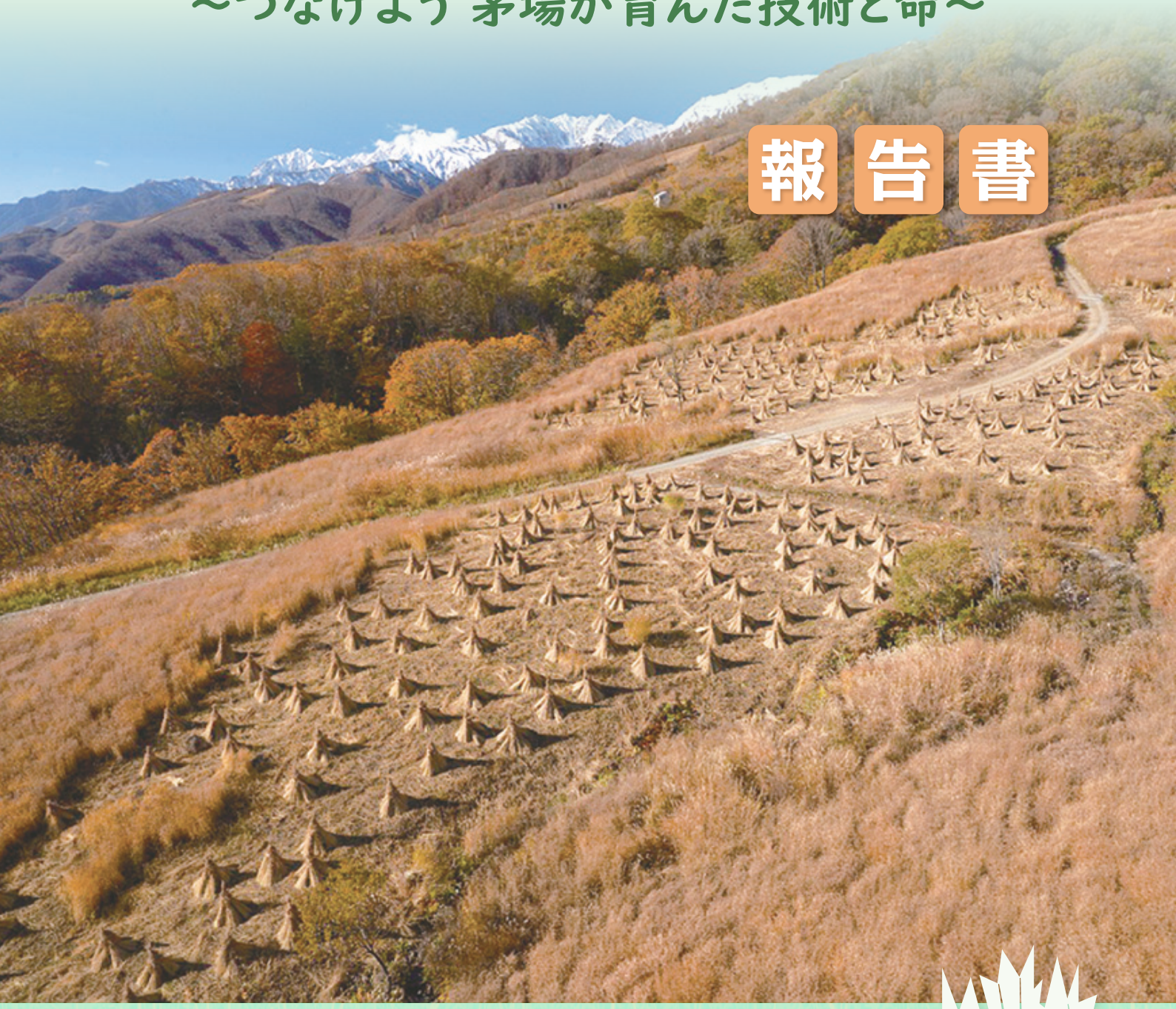
第14回 全国草原サミット シンポジウム in おたり

～つなげよう 茅場（かやば）が育んだ技術と命～

報告書



開催日 2024.10/4(金)・5(土)

開催地 白馬アルプスホテル
小谷村内茅場・長野県宝旧千國家住宅（牛方宿）

第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり大会実行委員会

目　次

■第 14 回全国草原サミット・シンポジウム　開会式 …… 1

■第 14 回全国草原シンポジウム

◆基調講演

「カリヤスを刈る、葺く、雪国に暮らす知恵を探る」 …… 6

安藤邦廣氏・松澤敬夫氏

◆研究報告

「茅を育て、文化を守り伝える草原　～信州小谷村、牧の入茅場から～」 …… 18

井田秀行氏

◆分科会

・第 1 分科会：草原の生物多様性　～維持される仕組みに着目して～ …… 24

コーディネーター：井田秀行氏　発表者　高橋栞氏

・第 2 分科会：茅刈りと茅葺きを未来につなぐ …… 36

コーディネーター：上野弥智代氏　発表者　松澤朋典氏

・第 3 分科会：草原の管理技術を学び伝える …… 51

コーディネーター：武生雅明氏　発表者　栗田優氏・荻澤隆氏

・第 4 分科会：草原資源を地域に生かし、次世代につなぐ …… 65

コーディネーター：町田怜子氏　発表者　小谷中学校 3 年生

◆全体会・各分科会からの報告　コーディネーター：高橋佳孝氏 …… 73

■現地見学会 …… 83

・牧の入り茅場：解説　井田秀行氏　　実演　田原重男氏・中村英子氏

・雨中ショクの茅場：解説　武生雅明氏・荻澤隆氏

・旧千國家住宅（牛方宿）解説・実演：松澤朋典氏

■第 14 回全国草原サミット …… 85

● あいさつ

● 活動報告と問題提起、意見交換

・前回全国草原サミットの報告 / 鈴木嘉久氏（静岡県東伊豆副町長）

・シンポジウムからの報告、問題提起 / 高橋佳孝氏

・各自治体の草原の課題

・「未来に残したい草原 100 選事業」について

● 次回開催地の紹介

● 第 14 回全国草原サミット宣言採択

※附表　サミットを扱った新聞の切り抜き、参加人数表

第14回全国草原サミット・シンポジウムの模様は同webサイトのアーカイブ（Youtube）でご覧いただけます

※この報告書は文字起こし原稿をもとに加筆訂正してあります

第14回 全国草原サミット・シンポジウムinおたり

～つなげよう 茅場(かやば)が育んだ技術と命～

開会式

開会のことば	全国草原の里市町村連絡協議会副会長 静岡県東伊豆町副町長	鈴木 嘉久 様
主催者挨拶	全国草原サミット・シンポジウムinおたり実行委員会委員長 小谷村長	中村 義明
来賓あいさつ	環境省自然環境局長代理　信越自然環境事務所長	酒向 貴子 様
	下条みつ衆議院議員　秘書	砂子 弘樹 様
	長野県議会議員	宮澤 敏文 様
閉会のことば	全国草原サミット・シンポジウムinおたり実行委員会副委員長	郷津 信康 様

（開会のことば）

司会：開会のことばを、全国草原の里市町村連絡協議会副会長代理、静岡県東伊豆町副町長、鈴木嘉久様よりいただきます。鈴木様、お願いいたします。

東伊豆町副町長　鈴木嘉久 様

鈴木副会長代理：皆さん、こんにちは。全国に多々ある草原、そしてそこに寄り添う人々、そういった人々の協力の下、このサミット・シンポジウムは開催されていると思います。草原の価値を広く皆様に知っていただき、そして未来へつないでいくために、ますます地域間の協力を強くしていくことを望みます。それでは、ただいまより「第14回全国草原サミット・シンポジウムinおたり」を開催いたします。

（主催者あいさつ）

司会：次に、主催者を代表しまして、小谷村村長、中村義明が挨拶いたします。

草原サミット・シンポジウムinおたり実行委員長　中村義明小谷村長

中村小谷村長：本日は、この草原の里サミット・シンポジウムにお越しいただきまして、本当にありがとうございます。それでは御挨拶をさせていただきます。「第14回全国草原サミット・シンポジウムinおたり」の大会実行委員長を務めております小谷村長の中村でございます。開会に当たり、主催をする実行委員会を代表いたしまして御挨拶を申し上げます。北は北海道から南は九州に至るまで、全国各地多くの皆様から私ども小谷の地へ足を運んでいただきましたことに、まずもって御礼を申し上げますと

ともに、心より歓迎を申し上げます。また、オンラインで御覧になっておられる方々におかれましても、時間を割いていただきましたことに、心から感謝を申し上げます。

本日は、所管をする環境省から、自然環境局長の代理で、信越自然環境事務所長の酒向貴子様、長野県環境部からは次長の新津俊二様にお越しをいただきました。そして、公務極めて御多忙の中、衆議院議員下条みつ様代理、秘書砂子弘樹様、長野県議会議員宮澤敏文様におかれましても、大変貴重な時間を割いて駆けつけていただき、本大会が力強いものとなりますことに、改めて感謝と御礼を申し上げます。また、大会準備に当たりましては、全国草原再生ネットワーク様、日本茅葺き文化協会様、信州大学様、東京農業大学様、そして地域の皆様方に本当にお世話になり、重ねて感謝と御礼を申し上げます。

さて、この大会は14回を迎えますが、以前より全国各地の草原・湿原に関わる人々が集い、大変希少となった草原や湿原の価値と存在意義を全国にアピールするとともに、自然環境や、長い間受け継がれてきた歴史的・文化的な知識や技術をみんなで共有し、全国各地で取り組んでいる保全継承活動の現状や課題について論議を深めながら、草原を未来に残すための連携を図る目的で、各地で開催されてきました。

今回の大会開催地である私ども小谷村は、今では貴重となった和風伝統建築の屋根材であるカリヤスやススキが広範囲にわたって広がる茅場が草原の体を成して残っており、毎年、地元の方々によって火入れが行われるなど、維持管理が現在でもされています。

また、地元の茅葺き職人の皆さんによって、茅の刈り取りが行われ、広い茅場に、茅立てが広がるさまは、秋の風物詩となっています。茅は、長野県内外の茅葺き屋根の修理・修復に用いられており、小谷村はまさに茅の里であります。

今回見ていただくことになる村内二つの茅場は、文化庁の「ふるさと文化財の森」として設定されており、また、茅刈りや茅を乾燥するための茅立てなど、茅の採取はユネスコの無形文化遺産にも登録されており、今回の「つなげよう茅場が育んだ技術と命」のスローガンが示すとおり、茅場としての存在意義が高い草原を保持していることに、自負と責任を感じているところであります。

御参加いただいている皆様の草原・湿原への関わり方は、希少動植物の生息地であることや、また、牧場としてや、観光地としてなど、様々な意義があると存じますが、私どもの茅場も含め、それぞれが抱えている各地の課題をここ小谷で話し合い、今後どのようにこの貴重な草原を守り伝えて、次の世代につなげていくかを語り合い、草原に関わる全ての皆様と連携を深めていければと願っております。

結びになりますが、本大会が草原の持つ意義深い営みを広く示すためには、多くの皆様から共感をいただく場とならなければなりません。成功裏に導き出せるよう、ぜひともこの２日間、皆様からも御協力をいただきますようお願い申し上げるとともに、御参加いただきました全ての皆様の御隆盛を御祈念申し上げまして、主催者の挨拶とさせていただきます。

〈来賓出席者〉

環境省自然環境局長代理	
信越自然環境事務所長	酒向貴子様
下条みつ衆議院議員　秘書	砂子弘樹様
長野県議会議員	宮澤敏文様
長野県環境部長代理環境部次長	新津俊二様
小谷村議会議長	宮澤正廣様

（来賓　あいさつ）

司会：さて、本日は御多用の中、大勢の皆様に御参加、御列席いただきました。誠にありがとうございます。続いて、本日御列席いただきました御来賓の皆様から御挨拶をいただきます。初めに、環境省自然環境局長代理、信越自然環境事務所長、酒向貴子様、お願いいたします。

酒向所長：本日は、このような盛大なシンポジウムが開催されましたことを、心よりお喜び申し上げます。また日頃より、関係者の皆様方には、自然環境の保全や生物多様性の保全に御尽力いただき感謝申し上げます。

草原は、里地里山を構成する要素の一つであり、野生生物の生息生育地として、また食料の供給、良

酒向貴子環境省信越自然環境事務所長

下条みつ衆議院議員代理　砂子弘樹 様

好な景観、伝統文化の継承など、重要な場所となっております。草原環境を将来にわたって残していくには、半自然草原の火入れや放牧、採草など、地域で持続的に維持していくことが重要です。

今日では、産業活動や教育を通じて、人と自然のつながりの価値観や地域内外からの保全・回復への活動を促進していくことも求められているところです。草原に関わる人々が集まり、その価値を発信し、全国各地の取組を共有して連携を深める本シンポジウムは、草原の維持保全活動の寄与のみならず、我が国の生物多様性の保全を支えることに貢献していると言えます。

14回の開催地でありますここ小谷村は、中部山岳国立公園と妙高戸隠連山国立公園にも含まれており、日頃より国立公園に関して取り組んでいただいていることに感謝を申し上げます。そのような地域におきまして、希少な茅の生産活動が行われている茅場が、「未来に残したい草原の里100選」に選定されたことは大変喜ばしく、心よりお祝いを申し上げます。茅の活動を通じて小谷村の文化が受け継がれ、草原資源を活用した地域が発展していくことを期待しております。草原に関わる関係者の皆様の御健勝と御多幸を祈念いたしまして、簡単ではありますが、私からの挨拶とさせていただきます。本日はどうもおめでとうございました。

司会：次に、衆議院議員下条みつ様代理、秘書砂子弘樹様お願いいたします。

砂子：本日下条みつは、公務のため出席がかないませんでしたが、メッセージを預かってきたので、代読させていただきます。

「『第14回全国草原サミット・シンポジウムinおたり』の御開催、誠おめでとうございます。また、本サミットの開催に向け御尽力された皆様方に深く敬意を表します。せっかくお招きいただいたものの、公務のため出席できず大変申し訳ありません。

さて、現在日本では、古来より多くの恵みを受けてきた草原が、生活環境等により減少の一途をたどっております。多くの生物を育み多様な生態系を維持する場となり、またその景観で、日本人の心のふるさととも言える草原を維持する取組は非常に重要なものとなっております。このサミットが皆様方にとって実り多きものとなり、全国の草原が一層管理され、保全・継承活動が促進されるよう期待申し上げます。

結びに、本サミットの御成功と御参集の皆様方の御健勝をお祈りして、御挨拶に代えさせていただきます。2024年10月４日、衆議院議員、下条みつ、代読　砂子弘樹」。

司会：次に、長野県議会議員、宮澤敏文様、お願いいたします。

宮澤敏文長野県議会議員

宮澤県議：皆さん、こんにちは。北アルプスに紅葉を知らせる神無月初めの慈雨が草原を潤す今日、長野県、そしてまた小谷村に、全国からこのように大勢の方々が、しかも真剣にこの草原を考えておられる皆さんがこのようにお集まりをいただきましたこと、今御紹介いただきました長野県議会山岳環境保全議員連盟の会長として、心から皆さんを歓迎し、今日のサミットが有意義であることをお祈りするところであります。

今日３人の先生方にお話いただきます。その中の１人、先ほどお孫さんが表彰されました松澤さん。松澤さんは、20年に一度ずつ葺き替えがされております遷宮、伊勢神宮の屋根の葺き替え、これにもお出かけになられる、そういう私どもの誇りでもある方であります。その方がいつも言われることでありますけれど、本当に茅の文化、これは本当に市町村の村、村の横の絆、人と人との絆を結ぶ文化だと思います。こういう話が後であるかと思いますが、私はいつもそのように思っています。あの家の茅の吹き替えはそろそろやらなければいけないよね。みんなで出かけていって茅を切り、そして屋根に登り、下から投げて茅をさして、そして家をつくっていく。そういうことのつながり。これはまさに集落の絆でありました。そしてまた、茅場もそういう形の中で工夫されて、何度も手入れをされて、いいものをつくるという形が伝統であったわけであります。

ところが、この昨今におきましては、例えば長野県でも、実は保健の関係上もございまして、茅のところが民宿では使えない、こういうふうになりました。茅というのは御承知のとおり、いろりでもって火を焚きます。それが中に入って虫も殺して非常にいい環境をつくるんですが、屋根から抜けなきゃなりません。それをすると保健所の許可が下りないということで、残念でありますが、多くの場所で茅場、特に白馬等々の民宿からスタートしたところは、そういうようなところで茅の屋根がなくなったわけであります。

そういう中で、茅を使って横の絆をつくっていた集落の絆も築けてくる。現に今から30年前、この村は7.11という日でございましたけれど、線状降水帯が、２日間ここに雨を降らせて大変な災害を出しました。大糸線もあらゆるところで被災し、700億というお金をかけて復興をいたしたわけでありますけれど、そういうような状況になったときに、１人の犠牲者も出しませんでした。

それはなぜか。こういうような小谷村は、隣の人と人とのつながり、絆、「あそこのところはお父さんがあそこに勤めていて誰もいないから、あのおばあちゃんを連れて出なきゃいけないね」、こういう横の絆がものすごく色濃く残っていたわけであります。

そういうことで、この茅場があるということはそこに集落の絆があるということだというふうに私は理解させていただいております。

いろいろ時代が変わってきました。今も私が期待をしています雷鳥。雷鳥も、猿が上に住んでしまって、雷鳥がその下のところに飛んで帰って1,500mぐらいのところに住んでいる。こういうような逆転現象もこの北アルプスではなってきているのも事実であります。

こういう中で、私どもがもう一回集落の絆、そして今まで日本古来の、先ほど「ふるさと」という歌がございましたけれど、「こころざしをはたして　いつの日か帰らん」、あのふるさとを、私どもは続ける意味でも、どうかこの茅場を守り続ける文化、これが脈々と流れることをお祈りするところであります。

第14回、まさに今回は小谷村中村村長を先頭に、本当に職員の皆さんから始まりまして、関係者の皆さんが準備をしてきました。どうぞいい内容のサミットが開催されますことを、県議会の立場からもお祈り申し上げまして、お祝いの言葉とさせいただきます。おめでとうございました。

司会：本来ですと、御来賓全員の皆様から御挨拶を頂戴したいところではございますが、時間の都合がありますため、お名前のみの御紹介とさせていただきます。長野県環境部長代理環境部次長、新津俊二様。小谷村議会議長、宮澤正廣様。また、この大会におきまして大変御協力をいただきました方が会場にいらっしゃいますので御紹介させていただきます。公益財団法人全国山の日協議会理事長、梶正彦様です。

そしてお祝いのメッセージをお預かりしております。衆議院議員、国会議員でつくる茅葺文化伝承議員連盟事務局長の務台俊介様からです。代読させて

いただきます。

「『第14回全国草原サミット・シンポジウムinおたり』が盛大に開催されますことを心よりお喜び申し上げます。地元小谷村での開催を私も心待ちにしておりましたが、国会開会のため参加できなくなりました。申し訳ございません。全国草原サミットは、希少となった草原を持つ自治体や草原に関わる全ての人々が集い、草原の価値や存在意義を全国にアピールする機会であります。このサミットを通して、関係皆様の連携をさらに強められ、草原の維持につながりますことを御期待申し上げます。

結びに、この大会が大いに意義ある大会となりますよう祈念申し上げますとともに、お集まりの皆様並びに運営に御尽力いただきました小谷村の益々の御発展を心より祈念申し上げ、開会に向けましてのメッセージとさせていただきます。令和６年10月４日、衆議院議員、務台俊介」様です。ありがとうございました。

（閉会のことば）

司会：それでは、閉会のことばを、「全国草原サミット・シンポジウムinおたり」副実行委員長、郷津信康が申し上げます。

全国草原サミット・シンポジウムinおたり　郷津信康副実行委員長

郷津副実行委員長：まずは、本日御来賓の皆様には、大変お忙しいところ、足元も悪い中、御出席をいただきまして誠にありがとうございました。

続きまして、この開会式終了後、基調講演がありますので、どうぞよろしくお願いいたします。以上をもちまして、「全国草原サミット・シンポジウム in おたり」の開会式を閉会といたします。

第14回 全国草原サミット・シンポジウムinおたり ～つなげよう 茅場(かやば)が育んだ技術と命～

基調講演
「カリヤスを刈る、葺く、雪国に暮らす知恵を探る」

筑波大学名誉教授　日本茅葺き文化協会代表理事　安藤邦廣 氏
小谷村の茅葺き師　松澤敬夫 氏

司会：基調講演は、筑波大学名誉教授、日本茅葺き文化協会代表理事の安藤邦廣先生と、地元小谷村在住の茅葺き師、日本茅葺き職人連合代表、現代の名工、松澤敬夫さんに御登場いただきます。

安藤邦廣先生は、工学博士、建築家、里山建築研究所主宰です。2010年に日本茅葺き文化協会を立ち上げ、茅葺き文化の普及啓発、職人の育成、茅場の再生、茅葺き民家の保存と活用に取り組んでいらっしゃいます。

松澤敬夫さんは、昭和17年小谷村のお生まれです。茅葺き職人だったお父様に弟子入りされます。昭和42年から「小谷屋根」として独立。多くの民家や文化財建築の茅屋根の葺き替えを手掛けられます。平成22年から５年間は、伊勢神宮式年遷宮の茅屋根工事に指導的立場で携わられました。松澤さんによりますと、御奉仕に上がったとお話をされていました。 それでは、安藤先生、松澤さん、壇上に御移動いただきます。

安藤：紹介にあずかりました安藤です。松澤さんの話をたくさんお聞きしたいということで、講演というよりは２人で茅葺き、あるいはカリヤスという、この地方の茅の材料について、その暮らしの中で培われた技と知恵を掘り下げていきたいと思います。

初めに、私のほうから前座と言いますか、少し松澤さんに話をお聞きするに当たって、その呼び水となるような話を15分か20分させていただいて、それから私が松澤さんに質問をする形でいろいろな体験を踏まえてお聞きしたいと思います。

私の話は、カリヤスというものの材料の特徴やカリヤスの活用と、今日は草原の会でありまして、草原を保全・維持をするという取組についていろいろ語らうことでありますが、私は茅を利用する立場からの草原の価値と課題を少しお話しできればと思っております。このカリヤスという材料は、茅の中ではそう多くは使われていません。茅の代表で一番多いのはススキです。これは山にも平地にも生えています。それからヨシ、これは主に水辺に生えます。

これが茅の代表と、山の茅、「山茅」、「海茅」と呼ばれるわけですけれども、カリヤスはそれに対して標高の高い山に生えている優勢な植物ということで、この小谷、あるいは長野県、北陸地方から福島県、東北地方南部までの山岳地帯で主に使われている材料です。量的には割合からいくとたぶん１割以下でしょうか。でもその地域では、これがないと屋根は葺けないというような大事な茅でもあります。

◆これは、明日皆さんに御覧いただきますけれども、小谷の松澤さんが長くここで仕事をしてこられた現場の牧の入の茅場というところで、標高が700m～800mあるところと聞いております。このカリヤスというものがなぜ雪国で使われるのか理由があります。一つはもちろん標高の高いところに生えるので、ススキやヨシに負けない。平地では、ススキ、湿地であれば当然ヨシになりますからカリヤスが生える余地はないです。負けてしまうわけです。ところが、このような標高になりますとススキが生えにくいというところでしょうか。それが一つ。

もう一つは、このカリヤスを刈る時期です。カリヤスは名前のとおり、刈りやすいからカリヤスと

言って、サクサクと刈ることができる、中空で細くしなやかな茅です。それでカリヤスと呼ばれるわけですけれども、ちょうどこれから、10月の20日を過ぎると刈る時期になります。毎年ほぼ決まっています。そして11月中旬にになるともう刈れないです。刈ったカリヤスは枯れずに残りますけれども、刈っても使い物にならない。わずか２週間のうちに全部刈ってしまわないと良い茅としては使えないということで、11月の初めには全て刈り終えるということになります。これが大事なところで、この地方の初雪は大体11月初めになります。その時期に雪が降ると茅はみんな倒されて刈ることは難しくなりますし、折れてしまいます。ですから、雪の降る前に茅を刈るということがこのカリヤスの特徴であって、しかもそれが良い茅を得る条件にもなります。雪が降る前に刈れるということです。

一方で、ススキやヨシは12月の後半にならないと刈れません。ですから、もしこの地域にススキが入り込んでカリヤスがなくなったとすると、ススキは使えます。ススキが茅としても悪いわけではない、良い材料ですが、この地域にススキがもしカリヤスに代わって生え変わったとしたら、11月の初めに雪が降ってススキが全部倒されてしまいます。

そのときまだススキは青いです。青刈りをすると、これは茅としては質が悪い。青刈りということはまだ水分も養分も含んでいるので長く持たない、虫が食べてしまいます。枯れるのを待って茅は刈らないといけません。ということで、ススキはこの地域には合わないと、もし使おうとしても毎年のように倒されて使いものにならないという状態になりますから、カリヤスがなければ、この地域に茅葺は存続できないということになってくるわけです。

これが雪の深い地域、寒い地域でカリヤスが大切に使われてきた、カリヤスを選んで、そしてそれを育てて茅場としてきた理由だと思います。世界遺産で知られる白川郷や五箇山は、同じような豪雪地帯で、やはりカリヤスのコガヤで全部葺いています。長野県も全体的にそうです。福島県の会津地方も非常に雪が多いところです。そこも壮大なカリヤスの草原があります。

◆松澤さんは今でもお元気ですけれども、毎年このように茅を刈ってそして屋根を葺くという、全てこのカリヤスの中で生きてこられた方です。カリヤス

を刈って火入れして屋根を葺くという、この全てがこの松澤さんの親方人生です。こういう方が日本にいるかというとめったにいない。茅葺き職人は日本に約200人はいるわけです。昔はもっとたくさんいました。ですがこの全て、（カリヤスの）茅場を管理して、刈って、火入れをして屋根まで葺いて、これを自分の仕事としてやっていらっしゃる方は、ほかにめったにいないと思います。

大体専門化されていて、茅を刈る人、この茅場の維持管理をする人は地元の人だったり、屋根を葺く人は職人さんにそれぞれに分かれてしまっていて、なかなか全体をやり遂げる人はいません。その全てにわたってこのカリヤスを知り尽くした人、あるいはカリヤスの草原を知った人は松澤さん以外にいないという非常に大切な生き証人だと思います。これは別に松澤さんが１人そうだったわけではなく、松澤さんの生まれた時代はみんなそうだったと思います。村の人みんながこのことをやり続け、そしてその知恵を共有していた。その代表が松澤敬夫さんということになります。

◆これは隣の富山県の世界遺産の五箇山の集落です。庄川が流れていますが、川沿いにある菅沼という10戸くらいの集落の全体です。裏に山があって、これが里山ということになりましょうか。今、森になっていますが、ほとんどの茅場はこの周りにありました。そして今、田んぼになっているところはもともと桑畑です。お米をつくるようになったのは戦後のことですから、昔は養蚕業、これによって巨大なこの合掌造り民家をつくる経済力、シルク産業は日本の明治時代、輸出産業の７割を占めていた。今の鉄鋼、自動車産業よりももっと割合が大きかった最大の産業を支えたのは、この山々のこの小谷も含

めた養蚕業です。その養蚕業が、これだけ立派なこの合掌造りをつくった当時は、ここは全て桑畑、そして山の裾、少し行ったところの中腹にこのように茅場があって、今は全く見えなくなりましたけれども、この茅場があってこそ、そのシルクが日本の最大の産業になって、日本が明治維新以降、富国強兵をされた経済の原動力だったわけです。

◆ここでこのように、カリヤスの茅場というものは、今、日本の中で職人も茅場も少なくなったので、文化庁の助成を受けて、みんなでこの茅刈りの研修、この茅を刈る技と知恵を継承する普及啓発、あるいはその専門家を育てる職人の育成ということを取り組んでいる現場で、小谷でも数年前、松澤さんの指導で３年間行ってきました。

◆カリヤスは、少し黄緑色が残っていて、上のほうがきれいなオレンジ色に変わったこの瞬間が一番の刈り時ですよね、松澤さん。これがなくなって、全部緑がすっかりなくなるとぽきぽきと折れてしまいます。水気が完全になくなってしまうとカリヤスはその柔軟性を失って茅としては使えなくなるという、非常にデリケートな材料で、この瞬間に刈らなければいけないというところがカリヤスの難しいところですが、そこが大事なところです。

◆カリヤスは中空なので、女性でもふわっと持てるくらい軽いです。ススキやヨシは結構重いです。丈も違いますけれども、カリヤスは本当に扱いやすい、屋根を葺く材料としてはいろいろな点でとても優れた材料ということです。

雪囲い

◆屋根を葺く前に、まず初めにこのように雪囲いに使います。ですから、カリヤスは最終的には屋根に葺くのですが、まず雪囲いに葺いて雪を避けると同時に、多少青いところが残っている部分がこのときにきれいに乾きます。冬の間に乾かしてしまうということです。まずこのカリヤスの１番目の利用は雪囲い、断熱材です。これによって中で囲炉裏を焚くだけで、一冬家族が安らかに過ごせる。

◆このように雪が積もってしまっても、建物が傷まずに中が保温されるというのがカリヤスの初めの役割です。

◆春になると屋根から茅を降ろして、新しい茅を葺くわけです。葺くのはもちろん新しい茅ですが、このごみのように見える古茅がとても大事です。屋根に葺くのが２番目です。1番目が雪囲い、２番目に屋根へ葺く。これがカリヤスの最大の利用になりますけれども、実はその前にも後ろにもカリヤスは役に立っている、働いているわけです。

◆このカリヤスの古茅を全部、手伝ってくれる皆さんに分かち合うわけです。ですからカリヤスは、屋根も含めてみんなのものです。個人の家だけれども、みんなで刈ってみんなで屋根を葺いて、そして古茅をみんなで分かち合って持ち帰ります。

持ち帰る理由は、もともとは養蚕のための桑畑の肥料です。これがなければ、桑畑は萌芽を繰り返して蚕を養うような旺盛な生命力・成長力を持ちません。農薬を撒いたらすぐに劣化して土は駄目になりますから、持続的な養蚕業を支えたのは、この古茅の施肥です。

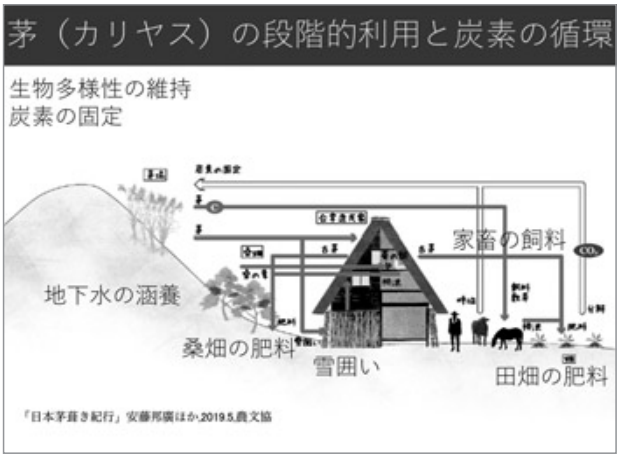
ですから３回目は、古茅として養蚕を支えるということに使われます。このカリヤスを刈った量に比例して蚕さんが繭をつくるということになります。非常に単純な話です。ですから、皆さんが山に行ったら全部残らず刈るのです。屋根のためでもなく、農地に施すこともできますけれども、最終的にはたくさんのシルクを得ることのために競い合って刈ったということですから、山々は全部カリヤスの草原がどんどん拡大したということが、この巨大な屋根に表れているということになります。

◆白川郷の合掌造りは100棟並んでいますが、今やもうコガヤの茅場はほとんどゼロです。杉も植林されて、山の広葉樹も伸び放題ということですから、風景は一変して、これが日本の本来の自然です。でも、日本人はこの大自然の中で暮らすことにおいて、草原をつくることによってより豊かな恵みをそこから頂いた。もちろん森林の恵みも大切ですけれども、森林と草原の両方の恵みをバランス良く選ん

で持続させてきた。これが日本人の縄文時代から続く暮らしの姿だと思います。

縄文時代は農耕をやっていなかったと思うかもしれませんけれども、結構古くから焼き畑をやっていますし、つまり木の実を拾うだけではなく草を食べるということです。草とは、ソバとかヒエとかアワとか、米以前の全ての食料は草原で生まれているわけです。

◆白川郷は、今は茅場が全てなくなっています。かろうじて残ったカリヤスの茅場が、今の白川郷では最後の茅場です。残念ながら世界遺産で観光で忙しくて、茅を刈る暇もなくて茅場が放置されて、森にかえって今はたった一つだけ残っています。これを何とか再生しようということが、やっと始まりました。世界遺産になって30年近くたった今、やっと本来の取組をもう一度戻さないと世界遺産が嘘になると、今始まったところです。



◆これはそのカリヤスの循環的な利用の図ですが、山の茅が屋根に葺かれ、あるいは家畜の飼料となって、寝床となって、最終的には農地に施されると、農地の中に桑畑もありますから、いろいろな農林畜産業を全て支えたのはこの山のカリヤス、この資源だけです。どこからも落ちてこないし、どこにも出さない。ここの持続的な循環によってこの壮大な茅葺屋根ができて、豊かな暮らしが300年続いたと言っていいわけです。

◆最後に今日福島県の草原が認定されましたので、福島の話を少し別の角度から見てみましょう。このカリヤスの草原は、今、あるものに使っている。もともとは今のような多様な養蚕業もやっていましたし、畜産も盛んだったのですが、今唯一このカリヤスの利用によって大事なものが守られています。

◆それは麻です。麻には、大麻と苧麻という二つの麻があって、両方の麻が日本の文化を、特に着ているもの、私のこれも麻の繊維ですけれども、古代から養蚕以前に麻が一番たくさん栽培されていて、たぶん小谷でも麻はたくさんつくっていました。

ここは麻の産地だったと思いますが、戦後に規制をされて、麻をつくっているのは福島県の会津地方１か所と、大麻は栃木県に１か所、限られたところにかろうじて守られています。そこの麻をつくるときに大事なものがカリヤスです。何に使うかというと、麻の成長力は、おそらくカリヤスやヨシよりもっと早いです。この麻は小型ですけれども、最大４mにもなりますから。ものすごい量で成長するためには、地面が常に健康で有機的でないといけない。肥料をあげてもすぐに劣化しますから、持続させるために、このカリヤスを堆肥に施しています。しかも燃やしています。秋に刈ったカリヤスをわざわざ畑で燃やして、しかも植える前に床に全部カリヤスを敷き並べています。

これは苧麻といいます。この辺では「からむし」という越後の上布をつくるような素晴らしい麻が取れます。文化として保存をして昔ながらのやり方を持続している一つの例です。そこにカリヤスはあらゆるところに使われて、燃やされて、敷き草になって、しかもこれが風で飛ばされないようにしっかり囲って守ってあげる。全てにカリヤスが麻の生産を支えているということが分かるわけです。絹と麻と言ったら、日本の繊維産業の中心です。それに全てカリヤスが絶対に必要であったということの一つの例です。

◆このように、実は地域の農林畜産業において、この茅というものは、その土台をつくっていると言っていいわけです。もちろん、屋根を葺く材料ですが、やはり食料が一番大事であって、これは、前回のサミットをやった東伊豆の細野高原です。ここはみかんの産地です。みかんも、この実をたくさん獲るには当然肥料がないと持続できないので、化学肥料ではなく、大量に厚く敷いてあるのはススキです。ここは太平洋側なのでススキですが、30㎝くらい敷くわけです。これは鹿児島県の知覧の茶畑の例です。静岡もそうですが、ここもお茶の栽培で、お茶も猛烈に人間が収奪するわけです。新芽をみんな切り取ってしまいますから。ふつうは枯れてしま

います。それがなぜ枯れずに毎年頑張ってくれるかというと、この大量のススキの敷き草です。茅は土に還ると言っていいということですが、還るどころではありません。土を肥やしていく。肥やすというと、そこに養分があるかというとそうではなく、寝床をつくっているだけです。あるいは、土が冷えたり熱くなったりしないように土の屋根をつくっています。人間が家をつくるように、土も家をつくって守ってあげたら、健康で非常に素晴らしい土壌がそこに生まれる。

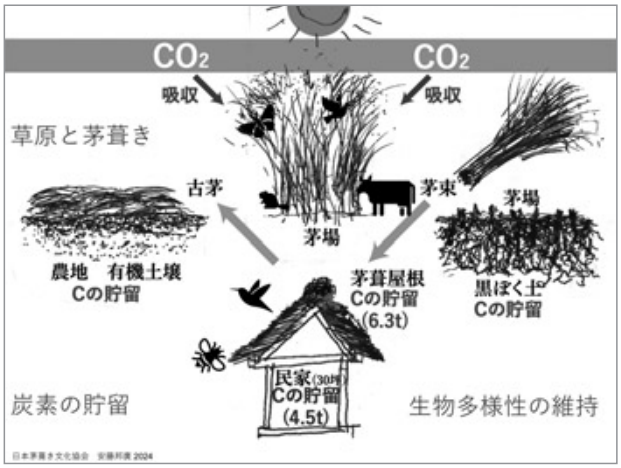
おそらく微生物の素晴らしいおうちになっています。ミミズもたくさんいるし、バクテリアも菌類も多様な土壌の生物をつくっていることを、優しくゆりかごのようにつくっているのが茅だということで、人間も生き物たちも全て茅に守られている環境が、この持続性の基本なのだということがお分かりいただけるかなと思います。

◆まとめです。今日、本当はこれを午前中に見せたかったのですが、これは旧南郷村(南会津町)の茅葺き屋根です。南会津町の方は今日帰ってしまいましたが、旧南郷村の茅葺き屋根は、草原にはササユリの貴重なユリが生えていますというところは紹介されましたが、茅葺き屋根のてっぺんにもユリがたくさん植わっています。

もう一つはこれも福島県の下郷町の大内宿という茅葺き集落ですが、ここに不思議なものがぶら下がっています。茅束がただぶら下げてあって、ここに説明が書いてあるのですが、今日(こんにち)茅葺きが一番多い時代に比べると、日本の風景から草原が１％になって、茅葺きも１％に減ってしまったわけです。

実は、分からないだけでいろいろなことに困っています。一例は、ここに下げてあるのは、果樹園がこれを買っていきます。あるいは貸し出します。果樹園に置くとここにたくさんハチが巣をつくる。つまり、茅葺きはハチの巣だったということが分かりました。

職人さんは、松澤さんの手を見たらグローブみたいな手をしています。これは少し極端ですが、ハチがとにかく茅葺きにものすごく住んでいる、それがいなくなったために、わざわざハチの巣をレンタルしています。なのでここに書いてあるように、今日は草原の日ですから、草原も茅葺きも生き物たちのすみか。これが今日の一番大事なポイント、基調講演ということでお話をしたいのですが、草原も茅葺きも生き物たちのすみか。草原は生き物たちのすみかというのは、皆さん当然と思うでしょう。でも、茅葺も生き物たちのすみかだということは、これはとても大事なことであります。



◆もう一つは、今社会で大切なことが二つあって、生物の多様性というものは今言ったように生物のすみか、これを人間が奪ってしまってはいけない、もっと共存をしないといけないということがあります。もう一つは炭素の貯留です。炭素の貯留というのは世界的な課題ですから、人間の営みには炭素を放出してはいけないだけではなく、貯留をしないと温暖化は防げないということです。その目で見ますと、この我々の営み、茅を刈る、そして刈った結果茅場ができる。これは毎年刈り取ったり燃やされたりしますけれども、この茅場の草原に残る大量の炭素の貯留というものはとても大事だということが分かってきました。

黒ボク土というものは、１万年以上も何メートルもたまっています。そして茅葺き屋根は日本に何百万棟とありました。この屋根に載った茅は、30年間、大量の炭素の貯留をしています。そして最後に、これが古茅になったときに、これは再び農地に炭素が貯留されます。簡単に分解しないのが茅の特徴です。ですから、これがまた有機土壌をつくる。有機というものは、炭素を含んで有機といいます。炭素がないものは無機。ですから、炭素の循環、しかもこれをあらゆるところにため込みながら暮らしを営むということが、これがぐるぐるスピードを上げれば上げるほど炭素の貯留は増えます。我々の日本の中で持続的な社会が続いた理由が、現代の課題

を通じていうとそういうことになります。でも、まだまだ茅葺きや草原の営みの深いわけは、これから松澤さんにお聞きしたい。これは今目で見た一つの価値に過ぎない。もっと複合的、多面的価値が草原・茅葺きをあえて我々がつくってきて営んできた理由があると私は思いますので、それはこれから松澤さんにお聞きします。ということで、よろしくお願いします。

安藤：松澤さんが職人になったのは何歳のときでしたか。

松澤：私のうちは生まれたときから貧乏でしたから、中学になったときから、「お前は就職もしないでうちにいて百姓をやれ」と親から教えられていました。「はい」と言って返事をした以上は、そのとおりに中学が終わるときからうちに入って、冬は雪掘りとかいろいろやって、茅葺きを教わって、覚えて一人前になるまでに時間がかかったけれども、今日に至っています。

安藤：若いときはほかに仕事をされていなかったのでしょうか。茅葺き、あるいは茅刈りが自分の職業ということになったわけですか。

松澤：茅刈りというのは、地域でみんな出てくれます。今日はどこの茅刈りだ、一つの責任者が集落にいて、その前に住宅は茅葺きがほとんどでした。瓦は高いし、なかなか替えるのも大変だし、雪を掘るのも大変です。その次に板葺きがありました。板葺きは皆さん知っていると思いますが、杉でもサワラでもいいところを使って、割って、そして屋根に葺きます。文化財である清水寺も皮で葺いているけど、あの皮に板を割って葺いています。そういう時代から茅葺きというものは手がかかる、大変だということで、なかなか前に進まなかったけれども、集落で茅葺きをやるというのは、みんな慣れているから、屋根屋さんが１人いればみんなお手伝いでできたということで、茅が見直されてきたというか、そういう生活の最後の中で茅場を守らなければ、茅場へ杉を植えれば地滑りが起きるという指導もあったりして、茅場を保全していくという機運があったりして、最近では牛もいないし茅場も刈りに行く人が少なくなってしまいました。

畑をやる肥料は、化学肥料やそういううちの周囲だけでもやるという、農業も縮小されて専門化されてきたので、地域ではそのような今までの生活パターンはできなくなってしまいました。

安藤：松澤さん、若いときは、職人ではなく、普通の村人として茅を刈ったり屋根を葺いたんですか。職人として今は仕事になっているわけでしょう。でも、みんなが茅葺きだった頃は、みんなが茅を刈るわけじゃないですか。それから、屋根を葺くときもみんなが手伝いますよね。

松澤：前は、刈るときはみんなが出て、今日は誰のうちの茅刈りだと、朝、夜が明ける頃に茅場に行って待っています。そのくらい地域で茅刈りをやって、そしてお手伝いをしていましたが、地域でもって観光で生きようではないかという時代になって、初めは民宿といって、古民家で茅葺きの家も民宿をやったんですが、だんだんとうるさくなってそれも変わって、専門的な観光で生きようということで、うちも新しくして、今日（こんにち）の状況を見てもらえれば分かりますが、そのような流れで変わってきました。

安藤：茅は各家で必ず、自分のためには自分で刈ったわけですね。

松澤：そうです。

安藤：だから茅を買うということもないし、専門の茅を刈る人もいたわけではなくて、自家用としてみんなが共同で利用したということ。

松澤：自家用としたり、50年に一遍ずつ、屋根の総葺き替えというのはどこの家でもやるようになって、今年はどこのうちとどこのうちだということを、前年のお祭りの後に申し込んだ家の屋根を来年やるという形がそこでまとまりました。

そして地域に帰って、来年はどこの家の屋根をやるから、みんなそのつもりでお世話になりますということで、年番の人が挨拶に回って歩いて、来年はあそこの屋根をやることになりましたお願いしますということで、食べるものもみんな、施主さんが用

意をして、朝、茅場へ行くだけで、その当番に当たったうちの近所のおばさんたちを頼んで、おひつにご飯を入れて茅場まで運んでくれました。そのような期間があり、私も若いときにはお世話になった経験があります。

安藤：そのときの茅場は、全てカリヤスですか。

松澤：ほとんどカリヤスです。ススキというのは中土の奥の小谷温泉へ向いたほうと、それから奉納の反対側にある茅場二つがススキでした。あとは全てカリヤスでした。自分の家の茅場もカリヤスでした。

安藤：自分の家の茅場もあったのでしょうか。

松澤：全部葺くだけはないけれども、大体200から300束、葺かれるくらいの茅場をみんな持っていました。そして、そういうものを全て集めて１軒の家を葺きました。

安藤：その年に葺く家に持って行って持ち寄って葺いたということですか。

松澤：そうです。

安藤：茅は取っておけませんね。取っておいたら傷むから葺く家に全部持ち寄って、それがまた返ってくるということですね。

松澤：そうです。そして、運ぶものはないから、みんな背中で、人力でもって山坂を運ぶんです。

安藤：大体その時代の話ですけれども、秋の茅刈りは夫婦で何日間くらい働きましたか。茅を刈って持っていくのを毎年やりますよね。

松澤：茅場を毎年刈るというのは、自分の家だけでも家族で２日くらいです。

安藤：そんなものですか。家族で２日刈ってそれがたまれば屋根を葺くことはできるということですね。

松澤：みんなで持ち寄ればできます。そして私たちのほうは昔は100戸ありました。今は、過疎化といろいろでもって半減してしまいましたが、その頃は全部でもってやれば、100軒のうち２棟は葺けました。

安藤：２棟も。大体50年持つとすると、100軒のうち２軒葺けば50年で100軒を守れるということだから、毎年20～30茅刈りをやれば100軒の家を守れるということはすごいことですね。

松澤：計算上はそういうことになりますね。そして茅無尽というものがあり、余ったものは、茅葺きの上にある屋根裏にみんな保存しておきました。

そして下で囲炉裏を焚くから、30年も経てば真っ黒のような茅になっているのも、それでもみんな大事にそのように蓄積をしていて、屋根葺きを繰り返してやりました。

安藤：この辺は雪囲いとして家に囲うことはあまりしなかったですか。

松澤：あれは何年頃までだったか、私たちも雪囲いをやりました。あれが一番家の中が温かいです。そしたら、消防法で家のぐるわへそういう燃えるものはよってはいけないという事例が出て、見回りが来るのでできなくなってしまいました。

家を断熱にするために、そのようにしておけば暖かいと言ったら、不燃材でないといけませんという通達が来ました。決められた以上はいけないというものはいけない、ほかに断れませんから。。

安藤：今日（こんにち）はまた省エネ法が出たから、今度は茅で葺きなさいと言われるかもしれないね。あとで務台さんが来たら話をしましょうか。国会議員が来たらそういうことを話さないと。

もう一つ、職人さんは茅というのはみんなのものだからみんなで刈って、自分で多少持っていても、持ち寄ってみんなで最終的には順番に利用をしていたわけですよね。職人さんは村に必ず何人かいたのですか。

松澤：その頃、茅葺き職人が少なかったです。ほとんど新潟県の高田地方から、春に来て秋に戻るという形で出稼ぎに来て、大工さんもそうでしたが、そのうちに地元でそれを覚えようという形で、俺の親父さんも婿に来る前は出稼ぎに歩いていました。

そして、それから今度は出稼ぎには遠くに行かないで地元でやろうではないかということで、仲間を

増やして今日(こんにち)に至りました。そのような形で地域割りがありました。お前は、南小谷だ、中土だ、北小谷だと。それも最後には協力をし合って、屋根屋さんだけで準備をしてできるような仲間づくりが、建築業組合などを組織して茅葺きもその中に入れてもらって今日(こんにち)の長い月日の中で変わってきました。

安藤：昔は越後から職人を呼んでいたのですか。

松澤：主に高田地方。

安藤：上越の高田ですね。そこから職人が１人、２人やってきて、その方が親方となって村の人が一緒に葺いたということですか。

松澤：白馬に行けばどこの家に泊まってどこへ行けという昔からの決まりごとがあって、出稼ぎに来てそこを宿にして、そしてその地域を自分の仕事場として仲間を募ってやったのが、なかなか今度はだんだん出稼ぎが少なくなって、地元の人たちにお任せしようではないかということで、そこで私たちは教えをこうて今日（こんにち）に至ります。

安藤：技を教えていただいて、松澤さんのお父さんが職人さんとして独立をしたと、あるいは仲間を集めて地域の屋根を葺くようになったということでしょうか。

松澤：そうです。

安藤：松澤さんも、仕事は大体お父さんに習ったということでしょうか。

松澤：はい。その頃、職人は競争力があって、どこの屋根屋さんに頼めば屋根雪が１m50㎝積もっても抜けないとか、長く持つとか、技術の競い合いがあります。それは自分で努力をしないと、職人として使ってもらえませんでした。

だから、「はかりにかけられる」と、よくそういう話を聞いて、人より早く強く丈夫な屋根を葺けということが、まず仕事を教えてくださいと、そのようなことをモットーにして指導を受けます。昔は、帰ってしまうとできないから泊まり込みで行きました。

安藤：泊まり込みというのは、小谷の村の中でも泊まり込みでやるのですか。

松澤：はい、泊まり込みで。そして行って、仕事を教えてもらって、その代わりに朝起きたら馬の草刈りに行けと言われましたが、眠たいけれども頭を蹴られれば起きないわけにはいけないから、それで草刈りに行って、腹が減るけれども、馬のえさや牛のえさのほうが先なので自分は後回し。そのような形で仕事を教えたり、地域と人と人を覚えたりすることが、今考えてみれば今の時代でも変わりはないが、ただ家から通えなかったということで、乗り物もないし、歩いて１時間くらいのところは毎日行って通って仕事を教えてもらいました。

安藤：草刈りという話が出ましたが、草刈りは茅刈りとは違いますか。

松澤：牛馬の草刈り。

安藤：それは何の材料を刈りますか。カリヤスですか、違いますか。

松澤：カリヤスもあったし、ススキもあったし、雑草もあったし。何でも端から刈って。

安藤：茅場の利用から聞きたいんですが、茅の良いところは屋根に使うと思うんですが、カリヤスというのは、牛馬のえさとしても良い植物だったんですか。

松澤：私たちのほうにはカリヤスはあまりなかったのですが、カリヤスを牛にくれれば腹を壊すと言って、消化が悪いとか。

安藤：あまりよくない？

松澤：よくないという話はあったんです。カリヤスも、穂が出ないときならいい。穂が出ると駄目。

安藤：穂が出る前の青刈りだったらいいんですね。

松澤：ススキは穂が出ても大丈夫だと。

安藤：そういう違いがあると。

松澤：早く言えば、ススキは刈って枯れても芯に白い綿が入っています。そういう形で牛にあげてもいいと、カリヤスは空洞ですから、ストローの状態になっているのであまり乾くと消化が悪いということから言ったんだということを、我々も後から知りま

した。

安藤：茎は空洞で固いけれども、まだ若いときは葉っぱが生えているから、それは牛馬の飼料としてはいいものだったんですね。

松澤：ススキのほうは。

安藤：ススキのほうが葉っぱが多いから。そのようにススキは飼料、カリヤスはどちらかというと屋根というような使い分けがあったということでしょうか。

松澤：はい。

安藤：なるほど。ススキは割と家の周りにもたくさん生えているわけだから、カリヤスはやはり標高の高いところで大事に育てるということで使い分けていたということですかね。よく分かりました。あと、カリヤスというものはほかに何か流用はしませんでしたか。屋根だけですか。終わったらやはり古茅は農地に戻すということは当然やりましたね。

松澤：カリヤスを他に使ったという記憶はあまりないです。ほとんど屋根に使っています。

安藤：終わった古茅は農地にもちろん施したということですか。

松澤：古茅ですか。古茅は全て使えなくなったものはまた土に返すと言って横積みにしておくと、そこへミミズやカブトムシの幼虫が生えるような状態になるようにそこに積んでおけば、自然にそれを分解してくれます。そうしたら畑へ入れます。

安藤：カリヤスの茅場は、牧の入でもワラビをたくさん採ったという話をよく聞きますけれども。

松澤：ワラビがどうして茅場に生えるかというと、一つの生物学的に言うと、ワラビの出るような茅場でなければいけないという一面もあります。

安藤：ワラビが出ないと良い茅場でない。

松澤：そうです。胞子だかなんだか、土を改造してくれるというか、そういう形でワラビが出るような土のところには良い茅が生えると言います。あまり生えると、茅をなくしてしまうから、刈ったりしてワラビを退治するような形です。

安藤：ワラビと茅は共存して、お互いに良いということですね。ただ、あまり放っておくと、ワラビが勝ってしまうというところが多少あるかもしれない。

松澤：ワラビが生えて茅が駄目になる。

安藤：ワラビをどんどん採ることは大事ですね。

松澤：春のワラビ狩りはいいことですが、なるべく茅を刈るときもワラビのところだけしっかり刈って、春に燃やせるようにしたら屋根には使い物にならないから、そのような手順で、昔からの言い伝えで、ワラビは駄目だからこういうふうにしろという形で今まで教えられてきました。

安藤：茅葺きの仕事をもう少し聞きたいのですが、今、小谷は鉄板を被った茅葺屋根はまだありそうですが、茅葺きのままは本当に少なくなってしまったと思います。

松澤：茅のままのものはほとんど見えません。

安藤：文化財になっているくらいのものしかなくなって。

松澤：小谷村も昔は茅葺きがほとんどだったんですが、今残っているのは文化財的な形で資料としたり、地域の景観にマッチしたものは残すが、そうでないものは建築関係で、これは尊いものだから残すかというものが文化財的になって、ほとんどその程度でしか。個人で茅葺きを持っている人もいますが、本当に少なくなりました。

安藤：養蚕もこの地域では盛んでしたよね。

松澤：養蚕も、俺たちが小さい頃は、何しろ「蚕様」

といって「様」がついていたから、養蚕は盛りにやりました。合間があれば、家に桑がなければ、山の木桑と言って、自然の中へ行って大きな桑の木があるのを取って持ってきて、何しろ収入源といえば蚕様が一番良かったです。春・夏・秋・冬、年に４回収入がありました。それは生活の関係でだんだんと変わってきましたが。

安藤：養蚕も盛んだし、畜産は馬と牛どちらを買っていましたか。

松澤：牛のほうです。

安藤：牛が多いね。牛も大体みんな飼っていましたか。

松澤：馬を飼っていたのはたくさんではなかった気もします。馬も、越中馬という馬が出稼ぎに来ていました。 冬場、馬を借りてきて厩で育てて、春、田起こしだけその馬を借りてまた返します。なので、越中馬と言って、馬が出稼ぎに来れば、トンネルもあったけど、トンネルも尻尾につかまってずっと、ただ後をついてきたというわけで、見事に６頭～７頭の列をつくって馬も移動してきてくれました。

安藤：馬は冬の間飼うわけですか。

松澤：そうです。

安藤：それをどのように飼うのですか。

松澤：冬の間、厩で馬を飼って、堆肥を運んで春、田起こしだけして返します。

安藤：冬の間はしっかり飼育をして、春に働いてもらう分、体力を養っておかなければいないわけですね。なのでえさもあげて立派に冬を越す。そして春に働いて初夏に返してあげるということが、この辺の農業だったわけですか。

松澤：それは、そんなに長くは続かなくて、戦後少しの間、10年くらいでした。そのうちに耕運機がはやってきて、昭和40年代頃から共同で買うように変わってきました。

30年代より前はそういうもので耕して、田んぼも小さいのは駄目だから、鋤鍬で起こすにも、馬もリードをする人が気に食わなければ言うことを聞きません。田の中で座って動きません。そういうように馬も利口だったので、馬を扱ったことがある人が行けば馬もしっかり立って、その代わり立ったらえさをくれる、ハミを外して少しあげると喜んで、またそれ欲しさに動いてくれます。それをいったん機嫌を損ねると絶対動かない。そういうものを何回も見てきました。なので馬方という人は大変だと思って。ハミを外せば本当に怖いです。ハミをやっているとものが食えないから。それで、ああいうところから「はめを外す」という言葉が出たのかなと思って。

司会：安藤先生、興味深いお話をたくさん伺っていますけれども、そろそろ会場の皆様からもし質問があれば寄せていただくのはいかがでしょうか。

安藤：それでは、せっかく敬夫さんに元気で話していただいているので、会場から敬夫さんについて御質問等々、何でも結構ですから手を挙げて、カリヤスの利用や屋根葺きについて質問はいかがでしょうか。

会場参加者：ありがとうございました。茅葺きや茅場の研究をしている者です。本当に貴重なお話をありがとうございました。集落の葺き替えの体制に関係して、何世帯くらいで共同をしていたのかというところと、茅普請と呼んでいたか分かりませんが、茅をみんなで葺くときの体制というか、どのように役割分担をしていたか、また職人さんと住民で明確な作業の区分があったかあたりを教えていただけるとうれしいです。

安藤：村で共同でやるとき、屋根を共同で葺く村の規模ですね。何世帯くらいで共同の関係を持っていたということですね。

松澤：共同で葺くと言っても、そんなにたくさんは葺けません。私たちのほうも、100軒ありました。100軒の中で２棟しか葺けませんでした。あとは修理という形で、毎年修理をやって20年経ったら葺き替えの準備をするというサイクルで、なので一代に一遍屋根の葺き替えをするということが基本でした。若いとき屋根の葺き替えをすればその代はいいと、順番でなかなか準備ができない人は、毎年毎年少しずつ茅をためたらやったりしていて、サイクルの最後には屋根を葺けるような形で、茅もためなければいけないので、茅葺のような屋根裏の広いところは溜めることができるが、ほかのところは外に置けば燃えるものですからいけないという指示を受けるし、大変な思いをしてやって屋根裏にためておいて葺き替えをした記憶があります。

安藤：そうすると、100軒で共同の関係を持って、100軒のうち１軒あるときは、基本的に100軒から

みんなが来るということですね。

松澤：持ち回りがあって、100軒の半分くらいです。

安藤：半分に分けてですか。

松澤：地域地域に分けています。

安藤：そうすると50軒で一つの区切りでしたか。そして毎年１軒順番に葺く形ですか。

松澤：あとは、親戚やら家族、家族が夜も寝ないで、屋根普請だといえば御苦労があったことを覚えておりますが、そのようにして割り当てをして、地域で協力をしてやるというような申合わせをよく固く守って何年も続けてきた過程があります。

安藤：分かりました。もう一つの質問が、１軒の屋根を葺くときに職人は何人くらいいますか。職人と手伝いでどのような関係で葺いたのかということです。

松澤：まるごと１軒やるときは、職人さん、見習いをやって３年くらいの人が４人、一つに１人を持つと、あとは地域の人たちがお手伝いに来ます。

安藤：それで大体葺けますか。

松澤：そうです。

安藤：大体１軒に何日くらいかかりますか。

松澤：大体１軒でも５間の８間ぐらいの大きな屋根坪で約100坪近くなる家で、大体田植えをする前に、春雪解けと一緒に足場を組んで屋根を葺いて、そして田植えが終わったら屋根屋さんだけで屋刈りをするというサイクルです。

安藤：そうすると、屋根を葺くだけだったら何日間くらいで終わりましたか。

松澤：みんなでやると、大体３日か４日です。

安藤：それで葺きあげてしまいますか。

松澤：そうです。

安藤：あとは田植えが終わったら屋根屋さんだけできれいに仕上げをやると。

松澤：ハサミを使って仕上げをします。それも、春の田植えが終わったら今度は屋根を刈りに行きます。

安藤：そうすると、職人さんが３～４人だと各面に１人くらいついて、村の男衆も屋根に上がって葺くわけですか。

松澤：そうです。慣れた人は。そのようにして何年も、覚えているだけで１代くらいは続きました。それが今日（こんにち）になってそういうものは廃止になってしまいました。

会場参加者：ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。本当に貴重なお話が聞けるいい機会なのですが、そろそろお時間が来てしまいましたので、質問ありがとうございました。

では、安藤先生、松澤さん、最後に一言ずつ会場の皆さんにメッセージをいただいて、この基調講演を結びとさせていただきたいのですが、よろしいでしょうか。

安藤：やはりこの小谷というのは、長野県の一番外れと思われて少し遅れている地域とみなされているのかもしれませんが、やはり越後との関係がとても強いと今日思いました。越後から職人が来る、そして習って松澤さんは日本を代表する職人さんになって、今、指導的立場にあるのですが、越後から職人を呼ぶということは、この小谷の生業が豊かだった証拠だと思います。職人を呼べるだけの経済力が、この山にあったということです。山の経済力は何かと言うと、山の森であって草原であったということなので、それが豊かなところには平地からその経済を求めて職人を呼べたと思っています。今日聞いて、その点がとても私はよく分かりました。

そういう中でこの小谷の茅葺きの民家というのは素晴らしい、大工さんは越後から来ていますし、雪に負けない素晴らしい民家が残っていて、屋根もおそらく敬夫さんが言うように50年以上持つというのは、日本の屋根の中では最高水準の茅葺き技術だと思います。

それも雪に負けないということでつくられたものだけれど、それだけその元の材料であるカリヤスというものを、みんなが非常に大切に育てて、そして

農業を営み、畜産を行って立派な民家をつくった、それを支えたのが越後の職人だったということが、私はとても興味深かったです。

松澤さん、小谷村に茅葺きが少なくなりましたね。この茅葺きを何とか元に戻さなければいけないですね。今日は村長もいるし、議員さんもいらっしゃるから、どうしたら茅葺きは戻せますかね。そうしないと、茅場があってもその茅を文化財に売ってしまうことになるでしょう。まずはこの立派な茅葺きを地元で皆さんに体験をしてもらったり、いろいろな交流施設に使ってもらうことは大事だと思うんですが、その辺で何か松澤さんのお考えはありますか。

松澤：これから、やはりこの自然に溶け込むという茅葺きの姿を、村長さんはよく知っていると思いますけれども、文化財的にも牛方宿やあの周辺に茅葺きを整備して、これから豊かな小谷村は茅葺きがなければ駄目だというような気持ちを持って。

そういう形で小谷村の茅葺きを守り、育てる、減らさないように。それから建築基準法で茅葺きがいけないとかいろいろとうるさいのがあるけれども、それは村の文化財的なものだとかいろいろやれば何とかそれはクリアするのではないかというようなこともお聞きをしておりますので、みんなで協力をし合って茅場を守り、文化財的なものでなくても茅葺きにしたいという人がもしあったら、トタンを剥いでまで茅葺きにしたいという人も中にはいます。そのようにして、この信州の景観へ茅葺きが芽生えるように、みんなで協力し合って、それを守っていく方向も大事ではないかということを私も提案します。

指導をしてずいぶん茅葺きの経験を積んだ人たちも増えてきました。なので、遠くまで行ったり、県外も協力の要請があれば出かけていきますが、そのようにしてみんなで協力をし合って、この草原と茅葺きは兄弟のようなものなので、うまくそこのコントロールをして守っていきたいということを私は提案をしたいです。

安藤：ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。

第14回 全国草原サミット・シンポジウムinおたり　～つなげよう茅場が育んだ技術と命～

研究報告
「茅を育て、文化を守り伝える草原 ～信州小谷村、牧の入茅場から～」

信州大学教育学部　教授　井田秀行 氏

司会：研究報告に移らせていただきます。報告者は信州大学教授、井田秀行先生です。

井田先生は、信州大学教育学部教授です。北信州の豪雪地でブナ材をふんだんに使った茅葺き古民家との出会いを機に、身近な草木とともにあった伝統的な暮らしの文化を伝えるべく、森・草原・人との関わりを生態学的に追究していらっしゃいます。

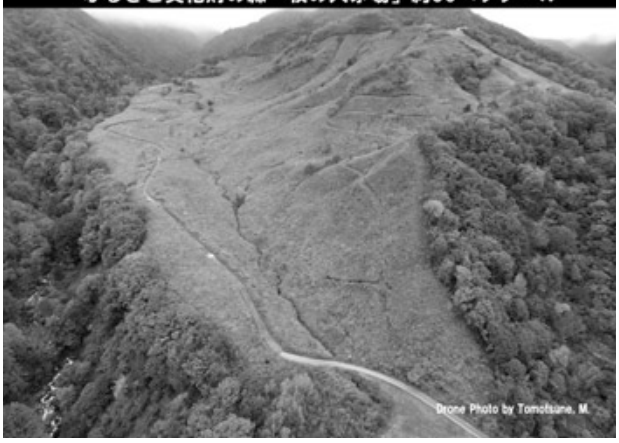
井田：ご紹介にあずかりました井田です。よろしくお願いします。

早速始めさせていただきます。私と牧の入茅場との出会いは、もう10年以上前に遡ります。調べてみたところ、2006年に初めて訪れて以降、松澤さんをはじめ多くの方々にお世話になりながら生態的な調査を行ってきました。ただ、正直に言えば、がっつり集中的に調査したというよりは、ほそぼそと断続的に行ってきたという感じです。

◆今回は、聞き取り調査、文献調査、現地調査に基づいた成果報告を行います。少し無機的な話が多くなるかと思いますが、どうぞお付き合いください。

◆こちらは牧の入茅場をドローンで撮影した写真です。大体30haの広さがあり、少なくとも江戸時代から、それ以前からも茅場として維持されてきたと考えられます。

ふるさと文化財の森「牧の入茅場」約30ヘクタール



◆牧の入茅場の特徴は二つ。一つは、カリヤスの茅場であること。もう一つは、火入れによって維持されていることです。カリヤスは全国の文化財や古民家の茅葺き屋根材として供給されています。

◆なぜカリヤスが茅として利用されてきたのか？安藤先生からもお話があったように、カリヤスは雪が降る前に刈る時期としてちょうどいい頃合いになって、ススキに比べ早く刈(枯)れるためで、雪国では重要な茅材として利用されてきました。また、崖崩れや地滑り跡などに自生することが多く、牧の入茅場では、そのような場所に生えていた茅を増やし、育成してきたのではないかと考えています。

◆カリヤスの断面は中空です。ススキもやや中空に見えますが、中に綿のようなものが詰まっています。カリヤスは細くて本当に「刈りやす」いです。

カリヤスはススキより持ちが良い

◆次に、二つ目の(特徴の)火入れについて、流れを簡単に説明します。

◆火入れは毎年５月のゴールデンウイーク最終日頃に行われます。当日は朝８時に集合し、簡単な説明の後、集落の80人～100人くらいの人たちがいくつかの班に分かれて作業を始めます。尾根上部や稜線部から火をつけ(防火帯をつくり)、徐々に斜面を下りながら焼き進める形です。

火入れは天候に左右され、延期というときもよくあります。私の家から車で２時間かかるのですが、向かっている途中で中止の連絡を受けて引き返すこともたびたびありました。前日に雨が降ったり、当日風が強かったりして、日程変更はしょっちゅうあります。

◆レーキは、先が鉄の熊手みたいなものなのですが、それで火種を引っ張りながら広げていく感じです。

◆ある程度斜面下まで行くと上まで引っ張り上げて、ここから風の流れで斜面全体が焼かれるという手順です。

◆少し動画を見てください。危険な作業ですが、皆さんは慣れた様子で効率良く連携しながら進めています。ここに素人が入っていくのは危険です。動画では火の熱がもちろん伝わらないのですが、音が伝わらないのも残念です。パチパチという激しく燃える音もすごいです。

仕上げは、道路際から火をつけて、大きな斜面を一気に焼き切るという感じです。これが燃えた後です。きれいに焼けています。山の上のほうはまだ葉っぱが出ていない春で、新緑も見られてとても気持ちのいい季節です。

ところどころ燃えていない場所は、沢沿いです。樹木も時々ありますが、これらは焼けて枯死することはなく、ちゃんと毎年芽吹きます。

大体うまく焼けると午前中には終わりますが、少し風が弱かったり湿っていたりすると、午後まで長引くことがあります。

◆このような伝統的な火入れで維持されている茅場が現在も残っているのには、いくつかの理由があります。大きな理由の一つは、ゲレンデになれなかったことです。地図中の丸印は、かつて茅場だったところです。現役の茅場もありますが、おおくがスキー場となっていて、今いる場所もその一つです。皆さんから見える斜面の裏側が牧の入茅場になります。こちらに栂池のスキー場、コルチナのスキー場、今ゲレンデになっているところは元は茅場で、今でももちろん火入れしているところもあります。ただ、茅場としての利用はされていないので少しもったいない感じもします。

明日見に行くのは、牧の入とショクの茅場です。

◆1950年頃までの茅場の使い方を文献や聞き取りで復元してみました。

千国、峰、立屋の三つの集落で100棟ある茅葺きの屋根を牧の入茅場で賄っていたのですが、この三つの地区の共有地は７haありました。牧の入茅場は30haあるのですが、この割り当てが７haということで、大体２万5,000把が収穫できました。これは実際に松澤さんが刈った面積からはじき出した数なので、先ほど松澤さん御自身がおっしゃった数が、計算の値と正確に一致したというのは少しびっくりしました。やはり経験値というのは素晴らしいなと思います。

１棟の屋根には、8,000把から１万把の茅が必要です。７haの茅場からは毎年２万5,000把が得られます。この量を8,000把で割ると、３棟分の屋根を賄える計算になります。実際には、１年に２棟をまるまる葺き替え、残りの茅は屋根の補修や秣(まぐさ)として利用していました。カリヤスの屋根は約50年の耐久性があるため、１年に２棟ずつ葺き替えることで、集落全体の100棟分の屋根を50年で循環的に維持することができました。７haの茅場で集落全ての屋根を賄っていたというのは驚くべきことであり、現代では考えられないほど地域資源を活用した効率的な仕組みです。

◆茅場の１年の写真です。リラックスして見ていただければと思います。火入れをして２週間もたつともう芽吹き始めます。７月になると、歩くのも大変なくらい茅がボウボウになります。８月下旬になると穂が出始め、10月になると非常にきれいな草もみじというか、カリヤス（苅安）色の草原になります。

◆10月20日の土用以降に茅刈りが始まります。これは松澤敬夫さんです。2008年の写真です。この頃よりも、茅の質が悪いのではないかということを耳にします。

◆刈り取った茅を束にまとめて立て、雪が降る直前

まで天日干しします。これを茅立てと呼びますが、これに挿してあるのはハギです。このハギの枝を目印として利用し、それを数えることで、その年に刈り取った茅の量が分かります。

◆２月、雪の中です。一見するとゲレンデとしてもよさそうだなとは思えますが、南斜面で日が当たりやすいため、雪崩が起きやすい場所です。そのため、ゲレンデには適していないと私も感じました。

◆４月下旬、雪解け直後の様子です。火入れをする直前ですが、雪のない地域とは異なり、刈り残した茅が雪の重みで倒れています。このため、燃やすのにちょうど良い状態になっています。

◆そして５月には火入れを行い、このサイクルを繰り返します。

◆火入れの際の温度は、膝の高さ（30cm）で350℃、たぶん400℃ぐらいまで上がると思いますが、この温度は非常に重要で、350℃～400℃で茅を燃やすと灰にならず炭化します。炭になることで炭素が土壌に残ります。

◆一方で、土の中の温度は火入れの影響をほとんど受けません。深さ１cmで40℃、２cmで22℃と、わずかに温まる程度です。

◆この土壌から、牧の入茅場が縄文時代から火入れを行っていたのではないかということが分かってきました。土壌専門の藤嶽先生（神戸大学教授）に調べていただいた結果、土壌断面を見ると、真っ黒な「黒ボク土」が非常に厚く堆積していて、藤嶽先生は、この黒い腐食層が数千年分たまっているのではないかと指摘されています。安藤先生も先ほど優れた炭素貯留量とおっしゃっていましたが、まさにその炭素貯留量で世界に誇るべき量を備えている土壌だということが分かりました。

◆藤嶽先生が「火山灰上ではない牧草地」、「火山灰上ではない森林」、「火山灰上の森林」、「火山灰上の草地」の４地点を比較した結果によると、実は牧の入茅場のような「火山灰上の草地」が最も炭素を蓄えるのに有利だということです。

カリヤスは燃えても灰にならず、炭のまま残ります。また、カリヤスの根っこは高いバイオマス（生物体量）を持っています。ススキよりもカリヤスのほうが地中に占める根の割合が大きいため、その分も炭素貯留に寄与していると考えられます。さらに、火山灰を含む土壌では、日本の場合アルミニウムが多く含まれており、このアルミニウムが有機物と結合することで、炭素が吸着されやすくなります。このため、黒ボク土ができやすく、茅場の黒ボク土は炭素貯留量が多く、いわゆる温暖化を防止する意味でも、非常に機能的な土であるということが分かりました。

◆一方、牧の入茅場のカリヤスの地上部は、日本の草原でトップクラスの炭素の吸収力があるようです。現在調査中ですが、炭素循環専門の廣田先生（筑波大学教授）によると、日本のいくつかの場所でススキやカリヤスの草原の生産量（乾燥重量）を調査した結果、牧の入茅場が最も生産量が多いことがわかりました。これはつまり、炭素の吸収力も大きいということです。

蓄積量と吸収量が大きく、火入れをするとその分は二酸化炭素として放出されますが、また成長するので、その分の炭素は光合成によって再び回収されます。したがって、炭素の排出は実質ゼロです。ここで茅を茅葺き屋根として使えば、炭素がそのまま蓄積されることになります。

◆また、茅の品質と生産量が火入れによって保たれているとことも分かりました。実際に防火区と火入れ区を設置し、茅がどのように成長するかを比較してみました。防火区ではトタンを被せて燃えないように処理し、実際に火入れをして、その年の秋に出てきた茅を比較するというものです。

生育途中の７月の写真です。この段階で（防火区は）前年燃やされず残った茅が、次の新しい茅の成長を阻害していることが分かります。こちら（火入れ区）のほうが葉が多く出ています。秋に刈り取った茅の本数、大きさや重さを計ると、穂が出る率（開花率）、密度、太さ、長さ、重量、均一性が高ま

ることが分かりました。つまり、バラツキが減るということです。このことから、火入れによって均質で良質な茅が維持されていることが分かりました。

逆に言うと、火入れを１回やめるだけでも茅の質が低下する可能性があることを示しています。

◆茅場の植物は、カリヤスの茅場だけで見ると30種類くらいで、種数としてはそれほど多くはありません。言い換えれば、ここはカリヤスを育てる畑なので、その点では理にかなっていると言えます。むしろ、評価すべきは、焼かれて刈り取られているにも関わらず、30種類もの植物が生育しているということだと思います。

オミナエシ、ヤマハギ、クララ、長野県の絶滅危惧種であるオオナンバンギゼルといった植物が生育していますが、ヤマハギは茅場にとっては実は邪魔者であり、敬夫さんが「ハギ退治」とおっしゃっていたかと思いますが、ハギはカリヤスにとって邪魔なので、夏場にはハギを抜き取る作業が行われ、またススキが入ってきた場合にも抜き取る作業がなされていました。

◆最近は、夏の手入れが十分にできなくなってきているので、ススキやハギが増えて困っているという話しをよく耳にします。

◆先ほど少し五箇山の話も出ましたが、五箇山は火入れができない茅場です。こちらは「中刈り」と呼ばれる作業を行っており、夏場に茅（カリヤス）以外の草を刈り取り、秋の茅刈りの後には「掃除」と呼ばれる作業によって、残った植物すべてをきれいに刈り取ります。これは、火入れと同様の効果を持ちますが、火入れと異なるのは、種子や芽が焼かれないため、植物の種数が60～70種類と多様性が高いまま維持されていることです。カリヤスが成長する前の春にはカタクリが群生します。

◆昆虫についても調べてみました。結果を一言で言うと、バッタが非常に多いです。個体数（密度）が高いだけでなく種類も豊富です。しかし、カリヤスへのバッタの食害はあまり見られません。バッタ類は地中に産卵するため、火入れの影響はほとんどないし、火入れによって天敵である狩りバチやイネ科を食べるカメムシも減少しているためか、カリヤスを食べる虫が増えないようなバランスがうまく保たれていると考えられます。

ちなみに、イナゴモドキは、近隣の安曇野市ではレッドリストに載っている種ですけれども、牧の入茅場には非常にたくさん生息しています。

◆昆虫は全部で550種確認されました。調査を行った丸山隆さんによると、こんなに多くの種が確認できるとは思わなかったとのことです。希少種や奇妙な種も見つかっています。奇妙な種とは、私もよく知らないのですが、例えばヒメトゲヘリカメムシのように、生態も分類もまだよく分かっていない種もあります。ショウリョウバッタモドキに関しては、これまで長野県での生息地は600mが最高地でしたが、標高1,000mの茅場でも生息していることが確認されるなど、いくつかの新しい発見がありました。

◆また、珍しい鳥も確認されました。チゴモズは環境省の絶滅危惧種であり、ホオアカは長野県の準絶滅危惧種です。これらの鳥たちは、おそらく隣接する森林を営巣地や休息場所として利用しているのではないかと考えています。

◆総論としては、人の営みがやはり茅場の生態系を維持しているということです。一言で言えば、人が生活を営むことで安定した生態系が維持されているということだと考えます。

◆課題としては、先ほども多くの意見が出ましたが、古茅の価値をどうにかして見直し、再利用できるようにすることです。私も現在、科学研究費を使って茅の循環利用をめぐる様々な価値を見出す研究に取り組んでいます。このように皆さんが集まる場で、さまざまな情報交換ができればと思っております。

◆最後に、今日は皆さんに牧の入茅場の素晴らしさを感じてもらうだけでなく、ぜひ自分事としてとらえていただきたいとおもいます。今日、いろいろな

方がいらっしゃると思います。行政の方には、茅場保全策の立案と予算化をぜひお願いしたいと思います。これは昨日思いついたことなので、真に受けないでください。半分は真に受けてほしいのですが。政治家の皆さんには、茅を新築に使える法整備をぜひ。これに関しては進んでいるようですが、引き続き進めていただきたいです。企業の皆さんには、SDGsやCSRに乗っかって茅場で活動していただきたい。研究者には、これは私自身にも言えることなのですが、茅に関する論文を増やし、熱く語りましょう。そして無駄な争いはやめましょう。情報を共有し、予算の取り合いもなくして、皆で科研を取れるようにしたいと思っています。農家の皆さんは、肥料に古茅を使ってみてください。建築家の皆さんは、茅を内装に使うようにしてください。教師の皆さんは、子どもたちと一緒に茅刈りや茅葺きを体験してください。私も数年前、学生さんたちと一緒に、松澤朋典さんに指導を受けながら「やこぼし」（古い茅をこぼす作業）を体験しました。

学生たちと屋こぼしのお手伝い

◆まだ続きます。終わりに、自分事にするために。若い人は、茅場や茅の新たな価値を創出してください。未来の茅葺き職人として修業をしてください。そして、若くない人は、記録を残し価値を伝える役割を担ってください。必要となる時代は必ずやってきます。そうした時代が来るたびに、記録を残し、価値を伝える努力が必要です。私もそうですけれども、若くない人はその責任を果たすべきだと思います。自然好きな人は茅刈りに参加しましょう。伝統文化好きな人は古民家に住んでください。食べることが好きな人は古民家カフェでランチを楽しんでください。最後に皆様にお伝えしたいことは、学びがなかった人もあった人も、今日のことを帰ったら身近な方３人に伝えてください。それでは、これで終わります。

司会：先生、少しだけお時間があるのですが、質問を少し受け付けます。

会場参加者：筑波大学でススキの茅について研究をしております。僕の研究している場所が、高エネルギー加速器研究機構という研究所の上にある茅場で、五箇山と同じく火入れができないのですが、五箇山で火入れの代わりに実施している「中刈り」や「掃除」といった作業は、実際に良い茅をつくるために成果が出ているものなのでしょうか。

井田：はい、出ています。むしろやらないと悪い茅になると思います。

会場参加者：その悪い茅というのはどういう意味なのでしょうか。

井田：作業せずに放っておくと、茅以外の他の種類がたくさん生えてきます。そして日陰になったり、成長が悪くなったりして茅の大きさとかのバラツキが増えるのではないかと思います。悪い茅とはそれらを指します。製品としてはバラツキがないほうがいいと思いますので。

会場参加者：まさに、高エネ研の茅場もかなりばらついてきている状況で、どうにかしたいなと思っているので。

井田：どうにかして（手入れをして）ください。お願いします。

司会：ほかにもう一人くらいどうでしょうか。

会場参加者：早稲田大学のものです。昨年、敬夫さんにお世話になりまして牧の入で学生と一緒に茅刈りをしました。敬夫さんのお話と先生のお話で大変興味を持ったのは、集落の戸数100戸を２軒ずつやって50年でサイクルできるという、この茅場の面積とか収穫量と集落の戸数が一致しているというところに、社会学的にも非常に興味を持ちまして、増え過ぎてもいけないし、要するに集落の戸数を賄える茅場が確保されていて、しかも集落が分家しないで、戸数を増やさない方法がありますよね。田んぼとか。それがなんか非常に一致している、今、牧の入はそういうお話だと思います。

なので、先生の御経験の中で、それがアンバランスだったりすることがあるのか。その戸数に合わせて茅場を開拓していたり確保をしていたのか、かつ

ての話はいろいろなパターンがあったと思うのですが、屋根の数と適当なサイクルでリニューアルをしていくということと、茅場の面積に合わせて茅場を広げたのか、茅場の面積に制約されて戸数が限定されるのか、それから耕作地との関係とか、いろいろ複雑かとは思うのですが、御経験の中で戸数と茅場の面積とサイクルの年数、この辺で何か。

井田：非常に重要なご指摘だと思います。ありがとうございます。私は生態学の専門なので、集落の社会学的な側面については専門外で、多少不正確なことを言うかもしれません。ただ、経験上、私も集落に住んでいる身として、資源が非常に重要であり、それが取り合いになるほど貴重だったのではないかと感じます。そのため、限られた資源を皆で分け合い、取り合いを避けるために、最適な集落の規模や茅場の面積、資源量が自然と調整されてきたのではないかと思います。

要するに、それが意図的に考えられて行われたというよりも、長い歴史の中で人々が集落を作る過程で自然と形づくられてきたのではないかと思います。30～40世帯の集落を維持するのに適した山の規模や茅場の面積が、歴史的に決まってきたのだと考えます。生物もそうですが、虫や植物が広がり過ぎないような生態学的な仕組みが働くように、人間も縄文時代から資源をうまく分配する方法を築き上げてきたのではないかという感覚です。

栗田：この関係を説明する地元、千国の栗田と申します。この茅場はずっと昔から同じ面積です。それで、この集落のうちはもちろん分家も出ますし、集落自体は加減はあったと思います。でも、集落的には維持されてきた部分もありますし、ただ、各家で持っている茅場もあるわけです。いわゆる家茅場と言って、それぞれのうちでも小さい分け地みたいなところがあったりして、それは生活に使う茅を刈ったりもしています。

幾つも集落があるのですが、ここの茅場は、先ほど言っているように立屋と峰と千国という集落ですが、関係集落はまたそのそばに幾つか茅場があります。ですから、例えば人を入れないとか、茅場でもって入居制限をするという、例えばある地区によってはもう長男しか残さないとか、そういうものは一切ないです。それから、茅場の面積も昔からこのままだと、私は先輩から聞いています。

井田：ありがとうございます。やはり地元の方に直接お話を伺うことが、一番確かな情報を得る方法だと思います。そのような聞き取り調査も、積極的に取り組んでいければよいと思っております。

会場参加者：ありがとうございました。先ほどの敬夫さんのお話ですと、戦後もここら辺は屋根を茅で葺いていたので、歴史学的にたどるのは難しいけれども、小谷の特徴の一つは、戦前期から戦後の状況であっても今のお話のようなものを拾って資源量と戸数と、外に流出した数や残る数というのを、近代でも調べられるでしょうか。

井田：（そうした情報を得るには）もうギリギリ（の時期）だと思います。

会場参加者：そうですね。でもギリギリだけれども、日本の中にそういうものがあるというのは貴重なので、それが小谷の特徴の一つかなと今思いました。

司会：それでは、信州大学教授、井田秀行先生の研究報告は、これにて終了となります。

第14回 全国草原サミット・シンポジウムinおたり ～つなげよう 茅場(かやば)が育んだ技術と命～

第１分科会
「草原の生物多様性　―維持される仕組みに着目して―」

信州大学教育学部教授　井田秀行 氏
東京大学農学生命科学研究科　高橋 栞 氏

井田：時間になりましたので、第１分科会を始めたいと思います。私は、コーディネーターの井田と申します。引き続き、第１分科会を進めて参ります。

この分科会のテーマは、「草原の生物多様性」です。ただし大事なのは副題で、そういう生物多様性が維持される仕組みに着目して、今日はさまざまなディスカッションができればと思います。

そのディスカッションに先立ちまして、本日は東京大学大学院の高橋栞さんをお招きし、調査報告をしていただきます。

それでは、高橋さんからご挨拶と発表をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

高橋：皆さん、初めまして。東京大学農学生命科学研究科博士３年の高橋栞と申します。本日は、この分科会１で研究報告ということで、「茅場の現状と新しい維持管理の形」というタイトルでお話をさせていただきます。よろしくお願いします。

私は、もともと修士のときは、千葉県白井市の北総の台地上の牧と呼ばれる草原で、生物多様性と生態系サービス評価の研究をしておりました。その後、卒業して環境コンサルタントの会社に就職いたしまして、環境省の地域循環共生圏という環境で地域を元気にしようという事業の自治体の支援をさせていただいたり、北海道の国立公園で計画策定の支援業務で水草を刈ったりしておりました。

入社して３年目の終わりの３月の繁忙期で忙しい頃、茨城の火入れに行ったときに、女性の茅葺き職人さんにお会いしました。そのときに、その方の手がすごく格好良く、印象に残りました。今まで、草原をどうにかしたいという思いはずっとあったのですが、いい方法が見つからないなと思っていたときに、このかっこいい女性の職人さんの話を聞いて、もしかしたら茅場や茅葺きというテーマだったら草原の未来が見られるかもしれないと思って学生に戻り、研究をしています。

もともと人や自然や文化の掛け算に興味があり、そこにコンサル時代に地域の課題解決やコミュニティづくり、さらに大好きな草原が加わった結果、今、茅場をテーマに研究をしています。

今日は、前半は全国の茅場がどういう現状なのか傾向を調べた結果、後半は、現在研究している茨城県の茅場について報告いたします。

早速、全国の茅場利用の実態把握調査についてです。全国の茅場の状況を把握するために、自治体に過去・現在の茅場の有無、場所、面積、利用年代を問い合せました。あわせて、文化財の報告書に茅の調達先が記載されていることがあったので、地域内の茅葺き屋根の有無、文化財の茅の調達先についても聞きました。これらはメール送付か問合せフォームを使って一つずつ問合せをさせていただきました。

また、茅の種類や根拠資料について今回は問うていないので、地元のおじいちゃんがこういうことを言っていました、という内容も情報として利用しています。また、過去は分かる範囲で年代を聞いています。

早速結果に移ります。1,718自治体中965自治体

から回答をいただきました。全国から網羅的にいただいて、56％ぐらいの回答率でした。

この中で、「過去に茅場がありました」と回答した自治体が956自治体中290自治体ありました。この290自治体の現在の状況の内訳では、「今も茅場が継続しています」と答えたのが43自治体。「今はなくて消滅してしまった」と回答したのが171自治体、「今は継続が不明」もしくは回答がなかったのは76自治体でした。

地図に落としてみると、全国的に茅場が消失している傾向にあることは分かりますが、消失した場所の地理的傾向については見られませんでした。恐らく人口動態や農地率や文化財の有無などの、地理的、社会的な要因が関係していると思われるので、今後細かい解析をしたいと思っています。

茅場の減少の要因は地域によって様々だと思いますが、その一部について、今回自分が研究して深掘りしている場所があるので、お話をいたします。

これは茨城県の霞ヶ浦の南側に位置している妙岐ノ鼻という、約52haある湿性草原です。ここでは「シマガヤ」という、この地域のみで採取されている茅があり、茨城県内の文化財や民家の屋根材に使われています。 かつて妙岐ノ鼻は、全域が入会地で、茅刈りや火入れが行われていましたが、この地域周辺の茅葺き屋根が減少して、茅を刈る人も少なくなり、現在は丸で囲った一部のエリアで１、２軒の茅刈業者の方が茅刈りをしているのみになっています。火入れもしばらく中止していましたが、2018年から部分的に、今年の春やっと全面焼けたという状況です。また、ここでは近年、シマガヤの質が落ちていると職人さんの間で言われていたので、この茅場でどのような変化が起きているのかを植物の長期モニタリングデータを解析して、明らかにすることを試みました。

方法として、まずシマガヤを扱う茅葺き職人さんと茅刈りをされている方にインタビューをして、シマガヤと言っている植物の中身と、茅としての有用性の関係を明らかにしました。妙岐ノ鼻では、独立行政法人水資源機構というこの場所の所有者の方がモニタリング調査を長く行っておりますので、その調査データから、インタビューで得られた茅の有用性の観点を入れて、植物がどのように変化したのかを調べました。

まず、インタビューの結果です。茅葺き師さんからは、茅の中にカモノハシが多く含まれていることが大事で、屋根を葺く際にセイタカアワダチソウやノイバラがあると取り除いているということや、シロバナサクラタデ、ハギ、ノハナショウブなどは茅の中に混ざっていても問題ないのでそのまま屋根に利用していることを聞きました。茅葺き師さんと茅刈りされている方の両方から、チゴザサやカサスゲのような茎が細い植物が多いと茅が柔らかくなってしまって使いにくいこと、カモノハシが全体で減っているということも聞かれました。また、インタビューだけではなく、2023年に刈り取った新品の茅と、茨城県の逢善寺という文化財の葺き替えの際に出てきたおおよそ50年以上前と思われる古茅を取りだして、その中の植物を一緒に確認しました。

これらの情報を統合し、妙岐ノ鼻で観察された植物を茅の有用性を基に５つに分類しました。シマガヤの主要な構成種である「茅有用種」として、ヨシ、カモノハシ、トダシバなどのイネ科植物。「茅に混ざっても問題ない種」としてシロバナサクラタデ、ミズオトギリ、エゾミソハギなど。「茅に占める割合が増えると茅の質が下がる種」として、チゴザサ、カサスゲ。「茅の質を下げるため屋根を葺く際に取り除く種」としてセイタカアワダチソウ、ノイバラ、ツル植物などが入っています。今回インタビューや茅の観察で見られなかったものは不明種として、解析では扱っていません。

まず、妙岐ノ鼻全体の変化を見るために、1996年から2021年の植生図を基に、群落内で優占する植物を茅の有用性で再分類しました。縦軸が妙岐ノ鼻全体に対する面積割合になっていて、横軸が年です。全域では、「増えると質を下げる種」、「取り除く種」の割合が増えていて、「茅有用種」と「混ざっても問題ない種」が減少傾向でした。

次に、1981年から2021年の40年間に行われた植

生調査の結果から、各種の被度の変化を茅の有用性による分類を使って確認しました。植生調査は１×１ｍのコドラートの中に出現した植物の被度を記録していて、コドラート内の植物の割合が、茅を束にしたときに含まれる植物の割合と一緒であると想定して、今回解析をしています。

まず、「取り除く種」に関しては、年代間で有意差がなく、過去からの傾向はみられませんでした。

「茅有用種」の被度は、1980年代から1990年代は差がなく、2000年代を境に有意に少なくなっていました。「増えると困る種」は、逆に1990年代を境に増えていました。

今回、茅の有用性と植物種の関係がこの研究で明らかになり、妙岐ノ鼻での植生の変化がシマガヤの質に影響していることが分かりました。古い茅からは過去の情報を知ることができ、重要なサンプルであるということも分かりました。茅葺き職人さんや茅刈りをされている方が感じていた茅の質が落ちている、という変化は、実際に植物の観点から見ても「茅有用種」が減っていて、「増えると困る種」が増えていたので、利用者の感覚と科学的なデータが一致していたということが分かりました。

この植生の変化が起きた要因として考えられることの一つに、水位の変化が挙げられます。霞ヶ浦では、1996年から関東近郊での水需要の増加を見越して、湖の水位を高く保つ運用試験を始めました。霞ヶ浦の水位が高くなったことによって、湿性植物が減っていることは既に研究報告があり、妙岐ノ鼻でも、特に1990年と2000年代の間で変化が見られたことから、もしかしたら要因の一つが、水位変化である可能性が考えられます。

かつての妙岐ノ鼻では、茅葺き屋根が身近に存在し、管理されていたことによって、質のいい茅が供給されていただけではなく、茅場の生物多様性や草原環境の維持につながっていたという、社会と生態系が相互に作用することで茅場が存続してきたということが考えられます。

しかし、環境の変化に伴って植生が変化したことで茅の質が低くなり、利用価値も下がったと考えられます。茅場としての利用がなくなったのは、生態学的な変化だけではなく、そもそも茅葺き屋根が減少してしまったり、茅葺きに関わる人やコミュニティが消失したり、社会的な変化が同時に起こっています。

ほかにも、妙岐ノ鼻では野鳥の会や行政、消防団との関係性を慎重に進めている面があったり、高い水位によって機械刈りや火入れが難しくなっているという問題も起きたりしています。このような環境要因や社会的要因によって社会と生態系が関わり合っている茅場の植生が変化していることが、もしかしたら全国においても同様に茅場の消失の一因になっているのかもしれません。

では、このような現状の茅場でシステムを回復して維持していくにはどうしたらよいのでしょうか。かつては、付随的で意識されていなかった生物多様性や、生態系サービスというものが、社会で注目を浴びていて、実はここが一つの介入できるポイントではないかと私は考えています。そこで、妙岐ノ鼻で考えている例をお話しします。

妙岐ノ鼻では、種の保存法に指定されているここにしか生育していないカドハリイという植物が残っています。カドハリイは、カモノハシが優占している場所に多く、今も茅刈りと火入れを行っているエリアと生育範囲がおおよそ共通しています。カモノハシは在来種の種密度を高くするファシリテーター種としての役割を持っていることも示唆されていて、また火入れによって成長率が高くなるということも分かっているので、カモノハシを主とするシマガヤを利用してきた結果、付随的に妙岐ノ鼻の生物多様性が維持されてきたと考えられます。

こういった内容は、例えば霞ヶ浦の水を使っている下流の工業地帯の企業や、首都圏の企業、または自治体さんが関わる動機になる可能性があります。最近では、自然にプラスになるような経済活動、ネイチャーポジティブな動きが求められていて、CSRやサステナビリティ、TNFDなど、企業活動が自然に与える影響を開示するような経済の流れがあり、生物多様性の話ができるようになってきました。実際に興味を持っていて、自社でも環境にポジティブな取組を何かしなければいけないけれども、現場と

つながりがなくて困っている企業さんも多くいらっしゃいます。

ただ、こういった今まで関わりのなかった企業や都心部の方々と協働するのは、言語が違って難しいと思われたり、果たして本当にそういう人たちの理解を得られるのか、グリーンウオッシュ的な活動にならないかということを思ったりする方も多いと思います。私もそう思っていました。ただ、一緒に現場に行って、生の声を聞いたり見たりしてもらうと、使う言葉や入り口が違っても、意外と同じ目線に立てることが多くあります。様々なステークホルダーを巻き込むために、茅場、生き物の保全だけではなくて、いろいろな角度からキーワードを出したり、茅場に対して多様な視点を見いだせる場所を提供したりすることが重要なのではないかと思います。一見関係なさそうですが、ウェルビーングや健康、新しい地域コミュニティ、スポーツ、アート、食など、今まで関わっていなかったキーワードを入れていっても面白いんじゃないかなと考えています。

これは茅場に限らない話ですが、ここ３年ぐらい、週末に関東近郊の千葉や茨城の野外活動に行けるときに参加する緩いコミュニティとして「若手の会」というのを動かしています。関東の都市域に住む環境系のコンサル・IT・サステナビリティやCSRの担当者など、様々なバックグラウンドの20～30代ぐらいの若手が、田んぼで活動をしたり、VRで湿地に行く方法を探したり、火入れに参加してみたりしていて、各々が自分の興味で自然に関わることができる新しい形で、コミュニティとして輪が生まれてどんどん広がりつつあります。

妙岐ノ鼻でいうと、火入れに参加してその技術を学んでもらったり、茅講座を開いたり、茅場の観察会と葺き替え体験を開催したりしています。次は茅刈りの時期なので、イベントにしてプログラムを組んだ上で収益化も考えています。このような活動を少しずつ広げたいと思っていて、新しく組織を立ち上げる準備をしています。現地に行っても行かなくても保全に関われる新しい仕組み・形を考えていて、さらに補助金や助成金などのもらうお金だけに頼らない、収益を得ながら持続可能な形で結果的に茅場や草原が守られる方法を模索しています。まだ走り出しなので完全ではないですが、御興味のある方はぜひ、noteをつくっているのでフォローしていただけると、今の私の考えや今後の活動が見られると思いますので、よかったら読んでみてください（https://note.com/i_aristatum）。

ではまとめです。これまでは、茅場は茅を取る場所として管理されてきて、結果として草原の生物多様性も保全されてきました。社会や経済の仕組みが変わり、環境も変わる中で、茅場や草原がこれから柔軟に続いていくためには、「多様な人が多様な目的で多様な関わりができる場所」として、価値を再認識して、新しい視点に気づいたり、人を巻き込んだり、そういったことができる場をつくる。その仕組みづくりというのが重要になると考えています。

最後になりますが、今回自治体への問合せでは、約1,000自治体にご回答いただき本当にありがとうございました。引き続き過去と現在の茅場情報を集めておりますので、もし情報をお持ちであれば、ぜひ私まで連絡をいただけるとうれしいです。

井田：今回、高橋さんに事例発表をお願いした経緯ですが、茅場に対して非常に前向きな姿勢をお持ちだったことが大きな理由です。私は「生物多様性を守るために何かする」というよりも、「結果として生物多様性が守られる」形が望ましいと思っていて、このたびの生物多様性をテーマにしたセッションを行うことになった際、そんな考え方に共感してくれる若い人はいないかなとさまざまな話をする中で、高橋栞さんをご紹介いただきました。実際にやりとりを進める中で、多くの点で共感する部分があって、今回発表をお願いする運びとなりました。

それでは、早速ですけれども、ただいまの発表に対して質問を受けたいと思います。

いくつかに分けてお伺いしますが、最初に研究内

容についてお聞きします。自治体へのアンケート調査に基づく質問がありましたらお願いいたします。ご意見やコメントでも結構です。何かございましたらお願いします。

会場参加者：阿蘇から来ました。貴重な発表ありがとうございました。本当に面白い研究だと思いました。結構はっきりと、西日本と東日本、関東から北とそれ以下で分かれる傾向が見られるんじゃないかと思いました。

そもそも過去に茅場がありと答えた地域が東日本に多いのかなと思いました。理由は幾つかあると思っています。自治体レベルで見た場合に、やはり温暖な西日本のほうが早く茅場がなくなっている。農業や利用の形態が関わっていて、そういった傾向があるんじゃないかと。岡山にしても、佐賀県にしても、小麦葺きとか、茅場じゃないところの茅葺きの資源を使っている部分が恐らく西日本のほうが多いのかなと。そういったところもあって、そもそも茅場があると答えたところも、西日本と東日本で傾向が見て取れるんじゃないかと思いました。そのあたりも恐らく考察していると思うので、お聞かせいただけたらありがたいと思います。以上です。

高橋：今回、茅の種類を問わずに聞いたので、うちは小麦や稲藁だから茅場はありませんという回答は結構いただいていて、それは確かに西日本のほうが多いです。ちなみに東北だと、茅場というよりはその辺のヨシを使っていたという話が多いですし、山が多いような自治体さんですと、その辺のススキを刈っていたよみたいな感じで、茅場として大きな面積を維持していたという場所がそもそも限られる場合もあると思います。あと、北海道はヨシやササだったり、沖縄だとリュウキュウチクを使ったり、地域による材の違いによって茅場の形態が異なっている可能性もあります。

会場参加者：西日本の草原は、茅場としての利用ももちろんあったと思うんですけれども、どちらかというとそのまま田んぼに入れるような農業利用というか、施肥の利用がメインだったんじゃないかなと思っていて、小谷のような屋根にして田んぼに返すというパターンと、緑肥としてそのまま使うパターンがあり、草の使い方が違ったんじゃないかなと、この図を見たときに感じました。これは所感なので、たぶん調べていただくともっと深い研究になるんじゃないかと思ったので、質問させていただきました。ありがとうございます。

井田：ありがとうございます。阿蘇の事例についてもいろいろお話ししていただけるといいと思います。もしかしたら後ほどコメントいただくかもしれません。ほかにご質問やご意見ありますか。どうぞお願いします。

会場参加者：茅場が東と西で違うんじゃないかということですが、茅場と一口に言っても利用形態が結構違うと思うので、これを聞くときの文言やアンケート内容を知りたくて、「茅場があるんですか」というのは、そもそも「屋根材を取る茅をつくっていた場所はあったんですか」というのか、あるいは「何か利用する草を取っていた茅場はありますか」というのだと、結構内容が違うと思うんですけれども、そこら辺はどうでしょうか。

高橋：ありがとうございます。質問は、「現在／過去、地域内に茅場として利用されている場所はありましたか？」という内容です。あまり絞らずに聞いた結果、いろいろな形態について回答が得られている状況です。

会場参加者：ありがとうございます。気になったのは、人によって茅場の認識が違うんじゃないかということで、特に屋根に葺くためのものだけが茅場であって、牛に与えるのは牧草だから茅場じゃないよねとか、あるいはヨシ原とか、自然に出てきたものを適当に切っているから茅場じゃない、管理していないとか。そこら辺の茅場の認識というのが難しいなと思ったので質問させていただきました。ありがとうございます。

井田：ありがとうございます。ほかにどうでしょうか？

会場参加者：環境省の戸隠から来ました。僕も茅場の定義が気になりまして、結構、長野県は牧草地を「牧（まき）」と呼んでいたり、霧ヶ峰みたいに、もう茅場利用はされていないけれども草原として観光のために維持されていたりするところが消失してしまっているんじゃないかと危惧をしています。そういったところをうまくフォローできているのかをお聞きしたいです。

高橋：ありがとうございます。草原に関してはデータベースが過去に出されており、先生方、研究者の皆さんがだいぶ整理されているので、すでに情報が

あります。ただ「茅場」という名前になったときに、情報が掲載されていないところもあったため、今回は網羅的に聞いてみるためにこの調査をしています。

井田：ありがとうございます。

会場参加者：阿蘇などの場合、自治体の人にヒアリングをされても、本当に実態が分かりにくいと思います。阿蘇の場合は草原を管理しているのは牧野組合なので、牧野組合の方に聞かれたら茅場についてかなり正確な情報が出てくると思います。私が知っている範囲では、阿蘇の牧野にはほとんど茅場があったはずです。それは地元の人に聞けば分かります。自治体の職員に聞かれてもほとんど分からない。今の世代の人は。

高橋：実は、阿蘇地方の方々からはあまり回答をいただいていなくて、回答をいただいた中でも、「阿蘇グリーンストックさんに聞いてください」という回答が多く、自治体の人が知らないパターンというのは本当に多かったです。また、文化財課の方の熱量によって、回答の差がありました。「分からないのでこの人に聞いてください」と、職人さんや管理をされている方、博物館の方なども御紹介いただいていています。そういった方々に聞くことで、茅場がどこにあるか、どこにあったかという情報の精度が上がってくると思うので、阿蘇について知りたいときは、実際に管理されてコネクションをお持ちの阿蘇グリーンストックさんや牧野組合の皆さんにお聞きしたいと思います。ありがとうございます。

井田：お願いします。

会場参加者：先ほどから皆さんがおっしゃっているように、自治体の職員さんがどれだけ茅場を認知しているかということの結果の全国マップが今回出たのだろうと思います。

一方で、屋根材に使う茅については、茅葺き職人さんの数が限られているので、茅葺き文化協会から職人さんに「どこから茅を取り寄せていますか」という質問をすると、現在の茅場について網羅的に把握できると思います。以前、国際茅葺きサミットの中で外国では年間に何束茅が使われているか、何軒の屋根が葺かれたかというデータまで持っていたけれども、日本の場合はそれが集約されていないという課題も出ていたので、今回のデータと組み合わせると、実際に茅場として使われているんだけれども、自治体としては認知されていないとか、そのずれが見えてきたら、今度どこにアプローチしていくことが大事かとか、そういうところが見えてきて面白いなと思いました。非常に面白いデータだと思います。

高橋：ありがとうございます。そう言っていただけて本当にうれしいです。たくさんメールを送ったかいがあったなと思っています。

最終的には茅場データベースをつくろうと目論んでいて、茅葺き文化協会さんにもお話をさせていただいておりまして、これをベースに、今まで茅文さんが出してきたレポートや文化財の報告書に記載されている茅の調達先、職人さんがお持ちの情報などを集約しようとしています。

やはり茅場を維持していくためには、まさに小谷村さんもそうですが、自治体の方の力はすごく必要なので、今後のアプローチの仕方を見るという意味でも、自治体の認知とのギャップを把握するのは重要だと思います。コメントありがとうございます。

井田：もう少しソフトな話題でも全然構いません。

では、私からコメントですが、茅の種類をぜひリストアップしていただき、国際的にその価値をアピールしていただきたいと思います。海外では日本が茅の種類の多さが知られていないはずなので、英語の論文で、茅の種類について記載することが、非常に重要な価値を持つと思います。

では、次に移ります。もちろん、さかのぼって質問していただいても構いません。次は、妙岐ノ鼻の実際の現場での研究に関して、何か質問があったらお願いします。

会場参加者：東京農業大学のものです。本日は、貴重なお話ありがとうございました。植生調査による

種組成で、昔とちょっと変わっているというようなお話があったと思うんですが、その一つ、気温の変化でいろいろな種類の植物だけでなく、虫とか動物とかが北上しているというような認識をしているんですけれども、植物で今まで見られなかった種類というのが入ってきたということはありましたか。

高橋：新しい種が入ってきたというよりは、その種の分布している面積が広がっている可能性のほうが高いです。例えばセイタカアワダチソウやツル性の植物、ノイバラは、妙岐ノ鼻でも湖に近い辺縁部では1981年のデータでも確認されています。しかし、火入れ面積が全域から一部へと縮小し、ノイバラやツル性の植物が増え、今では簡単には燃やせず残ってしまっています。気温の変化で新しい種類が移入してきたことはないと思います。

会場参加者：ありがとうございます。分布が変わったということで理解することができました。

井田：ほかによろしいでしょうか。

会場参加者：茅の利用者のインタビューで、カモノハシの量が違って短くなっているということや、茅刈りのときには昔はもっと太かったと言われています。言い換えれば、今は昔よりも小さくて細くなっているというような変化がここのコメントからは予想されたと。

今回すばらしいのは、実際に古い茅のサンプルをもらって比較することができたところで、種組成の比較はあったんですけれども、長さや太さといった形質の比較をやったらすごく面白いんじゃないかなと思っているんですが、もしやっていたら結果を教えてほしいと思います。

高橋：長さについて比較していたので結果をお話しします。今回は1981年にコドラート内のカモノハシの長さを全部取っていたので、それと同じ方法で2023年の６月から11月に毎月同じようにカモノハシの長さを測りました。

その結果、1981年に関しては大体100cm前後で、わりと同じだったんですけれども、2023年のデータを見ると、長さにだいぶばらつきがあることが分かりました。長いものもあれば、短いものもあるみたいなところですね。

もう一つ、カモノハシに関しては長かったと言われているのと同時に、シマガヤ自体がすごく短くなっているとインタビューで言われました。その原因として、コドラート内の被度を見ると、チゴザサとカサスゲが60％ぐらい被度を占めていて、恐らく茅の束の中で短い植物の割合が増えたことで、全体的に束が短くなっているということも起きているんじゃないかなと思っています。

カモノハシの太さについては、葺くときに刈り込んでいるので、どこの太さを取るか難しく、保留しています。サンプルは色々な年代で取ってあります。

井田：ありがとうございます。ほかにあればどうぞ。

会場参加者：九重から参りました。シマガヤというのは植物名ではなくて、そこに生えている草たちをまとめての総称ということでよろしいでしょうか。

高橋：はい。今回、そもそもシマガヤの中身が何の植物を指しているのかを調べました。メインの構成種として、昔はカモノハシが多かったと言われていて、そこにヨシ、トダシバ、オギ、ウシノシッペイ、ヤマアワのようなイネ科の植物、あとチゴザサやカサスゲも昔の茅にも少し入っています。これらが全部ミックスされた茅をシマガヤと言っています。なので、ほかの地域の茅に比べるとだいぶ特殊な茅だと思います。

会場参加者：分かりました。ありがとうございました。茅がこんなにたくさんの種類で構成されているというのがすごく新鮮で、本当に面白かったです。ありがとうございます。

井田：ありがとうございます。

会場参加者：筑波大学からきました。他の茅の研究で聞いたのが、セイタカアワダチソウなどと競合している希少種だったり、競合していない希少種がいるというような話を聞かせていただいたんですけれども、それで気になったのが、そういう希少種は、別に茅にとって有用な種だけではないと思うんですけれども、希少種だとしても、地元の方の認識として茅に使えないから除外してしまおうというか、そういうような取組を昔は行っていたのか、それとも、一応そういうものが点在していたとしても無視して茅を刈っていたのか。手間と保全の問題だとは思うんですけれども、どのぐらい茅に関係ない種を除外していたのか気になったので、その辺の地元の方の認識についてお聞かせいただきたいと思います。

高橋：今回のインタビューの結果で、「茅の中に混ざっている問題ない種は？」と聞いたときに、若い職人さんなので昔の方がどう言っていたかは把握できないですけれども、その方が言うには、シマガヤというのはもともといろいろな植物が混ざっていて、１本違うものが入っていても屋根に影響しないとおっしゃっていました。また、いろいろな植物が入っているのはかわいいからそのまま入れていると言っていました。そのぐらい柔軟な気持ちで使っていらっしゃると思います。

茅刈り師さんに関しても、茅を束ねる際に要らない植物を抜きますかと聞いたときに、そんなめんどくさいことはしないと、昔から全部丸めて船に載せて出していた、みたいなことをおっしゃっていました。希少種は茅有用種ではないですが、今回の結果やこれまでの研究を踏まえると、茅有用種と希少種というのが、妙岐ノ鼻に関してはセパレートするものではなくて、質のいい茅と同じ空間に生育するものとして一緒に考えられていると思います。ただ、これはほかの茅場ではどうなるかというのは私もまだ研究できていない部分で、希少種や生物多様性と茅の利用の関係には興味があって、ぜひいろいろな茅場で見てみたいなと思っています。ありがとうございます。

会場参加者：ありがとうございます。もう一点だけ質問させていただきたいんですけれども、自分は出身が茨城なのでわりと霞ヶ浦の辺はよく行かせていただいたんですけれども、妙岐ノ鼻の湿性草原がどういう環境か分からないんですけれども、周りが湿った環境だと火入れに工夫が必要なのかなと思ったのですが、火入れをするときに地元の方がやっている具体的な工夫などが、もしもあったら教えていただきたいなと思います。

高橋：おっしゃるとおりで、湿った環境で火入れするのは大変です。昔は霞ヶ浦の水位は、0.9m前後でしたが、現在は冬期に1.3mぐらいまで上がります。そうすると、かなり茅場が水浸しになってしまいます。ここは平野なので機械で茅を刈っているのですが、ぬかるんでいるために機械を入れられず、火入れをするときにも、茅刈りした場所では水面に刈られた後のヨシやイネ科の植物の茎がちょっと出ているだけの状態で、そこに火をつけるのがだいぶ困難です。茅葺屋根が多かった頃は、全面きれいに刈っていたと聞くのでそもそも火入れの必要がなかったとも聞きます。茅葺屋根が減って徐々に刈らない場所が増えてきていた頃も、今より水位が低かったので、刈り残しを燃料に火入れができたと思います。今年の春も水位が高く、茅刈りをしている場所では燃やせなかったところがありました。

具体的な工夫はまだ見つけられていないというか、そもそも物理的に難しいですが、水位が下がればクリアできる可能性があるので、文化の維持という面で水位を下げられないかという交渉は、これからも地道に続けていきたいと思っています。また、燃やせないのであれば茅刈りする面積を少しでも増やすという工夫もできると思います。

井田：それでは、次のテーマに関する質疑応答に移りたいと思います。

３番目のテーマは茅場の未来の在り方についてです。個人的には茅場の利用と管理の未来について具体的な提案に近い形でお示しいただいたと感じています。おそらくここが今日の話の中では一番大事な部分になってくるのかなと思います。この部分について質問やコメントがあれば、ぜひお願いしたいと思います。皆さんも様々な思いを頭の中にめぐらせていると思いますので、ぜひ声に出していただければと思います。

会場参加者：広島から来ました。若手の会は、ゆるコミュとして活動しているということで、茨城や千葉の活動に来るから東京の方が多いのか、結構いろいろなところから来ているのか、どこから来ているかの内訳を教えてもらえたらなと思います。

高橋：ありがとうございます。基本的には千葉と東京、わりと都心部に住んでいる方たちが来ています。ゆるコミュっていいネーミングですね。

会場参加者：広島でもそういうのを取り入れていけたらと思っています。広島も大阪の先となってしまうと人があまり来られない、東京の人からすると、「めっちゃ遠いじゃん」と言われてしまうので、こういうコミュニティがあれば足を運んでくれるとか、見てくれる人が増えるのかなと思って、参考にさせていただきます。また詳しく教えてください。

高橋：ありがとうございます。知っている人がいる、移動手段が確保されている、実際に体を動かせるというのが、この若手の会が集う要因になっているかなと思っています。

今年の３月の生態学会の自由集会で、若手がどうやったら保全活動に参加できるのかというテーマで話をさせていただき、アンケート調査をしました。そこで見えてきたのが、野外活動に興味はあるけれども、忙しくて行かれないとか、行くのに時間がかかる、車を持っていないから出せないという意見が見られました。逆に参加する要因として、誰か知っている人が先に参加していて、話を聞いてから自分もそこについていったという回答がすごく多かったです。

若手の会の初期は５～６人のメンバーで始まったのですが、自分の大学や会社の同期を呼んできたり、この前打合せですごく盛り上がったからその人を連れてきたり、私も知らない人が輪の中に増えていって、人が人を連れてくるみたいな感じで、コミュニティが少しずつ形成されているかなというところです。

井田：ありがとうございます。追加でコメントはありますか。

会場参加者：ぜひ全国区でやってもらって。

高橋：今ご質問いただいた方は茅葺きの若手の中でいろいろな属性の方が参加するコミュニティを広島でつくっていて、ご近所の方や茅葺屋根の施主さんや地域のＮＰＯの方々など、関わる現場の先々でどんどん仲間をつくっていて、私も巻き込まれている１人なので、こういった人たちと連携をして、どんどん人を巻き込む。仲間となって顔見知りが増えていく。茅葺きの仲間だったり、草原の仲間だったり、自然に興味がある人たち、いろいろな分野の人がつながっていくことができたらいいなと思っていて、協働している仲間の１人です。

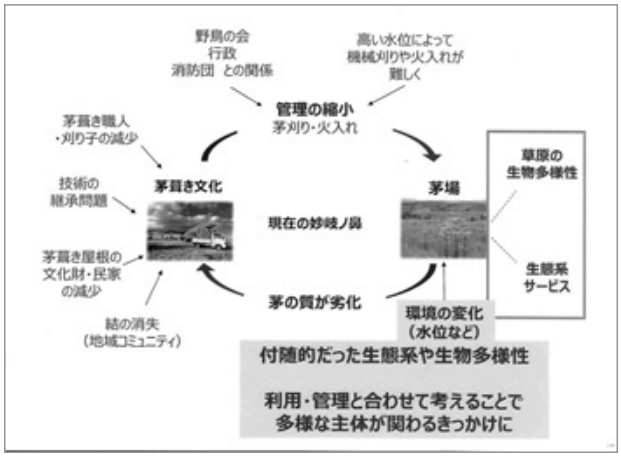
井田：ありがとうございます。ぜひ広島支部をつくっていただければ。まさに今日のような会がそのための重要な機会でもありますので、みんながカリスマになる必要はないですし、できるところをやればいいのかなと私も思っています。持続可能性については、一時私も思ってましたが、最近は「まず今楽しければいいかな」と思うようになってきております。

皆さんから何かこの未来に向けて、やはり若手の会として、（実年齢関係なく）若いと思っていればいいのかなと思っているんですけれども、どうでしょう。もし、ほかに意見、質問があれば、ぜひお願いします。なかなかこういう機会はないと思います。

会場参加者：御嶽山のふもとの開田高原というところから来ました。私もそういう若手の人たちを巻き込んで、地域では火入れを毎年行っていて、村全体でやっているんですけれども、シューターを担いで水を出して火を消すんですけれども、山が近いものですから本当に避難するのが怖いところがあって。

最近は信大の卒業した人や、若手の人で保全に興味のある方が一緒に手伝ってくれたり、そういう人たちは開田の自然が好きで、生物をよく観察しに来てくれるんですが、そういう若い人たちをもっと巻きこむ。あと、開田では、企業さんが地域の人と一緒になって、シューターを背負って一緒に火入れのときに回ってくれるんですが、こういう人をもっと巻き込むといいとか、何かいい手はあるでしょうか。

井田：それはどういうふうに集めていくかということですね。



高橋：シューターを背負って、かっこいいですね。

既に若い方々が巻き込まれているとお話を伺っていて思いました。これまで茅場や草原に関わったこ

とがない人たちを巻き込んで、その人たちを実際に連れていって何か新しい活用方法がないかなと話を聞いてみると、「あっ、そういうところ面白いって思うんだ」みたいな、自分たちにはない感覚を知ることができます。私たちからすると、こういう植物がいたらすごくきれいとか思うところはありますが、自然や生き物だけではなくて、きっと響くところが人それぞれ別にあって、そういうのをうまくこちらも拾って吸収して、新しい視点で茅場や草原を捉えたらどうなるんだろうとか、何か一緒に面白いことができないかなとか、そういう話が現地でできると、きっと新しい人たちも増えてくると思います。

そのためには、その場所を管理している我々サイドが、いかに、ただ生き物を守りたいだけの団体ではないということを示すか、が重要だと思います。継続のためにいろいろな方法を模索していて、アイデアや新規の参加者に対していつでもウェルカムですと示したり、具体的なアクセス方法や宿泊場所の情報が提供されていたり、そういう現地に来るためのフォローが必要かもしれません。また、来たらどういう人たちがいるのかが分かっていると安心感があると思いますし、現地に呼び込むために、まずは現地でないところでアピールしたり交流したり、できることを考えられるといいと思います。

現地ではない今ここで直接お会いしてお話を聞いて、私も開田高原に行きたくなりました。アクセスや宿泊をアレンジできたら若手の会のメンバーや茅仲間を連れて行きたいので、そういう情報をいただけると嬉しいです。今日の出会いもそうですし、こういうのを大事にして、一つ一つ積み上げていけば、何か新しい方法が見えるかなと思います。

井田：ありがとうございます。おそらく会場の中にはすでに自分の地域でしっかり取り組んでいるところもあると思います。そのような地域から、今の質問に対してヒントがあれば、ぜひ教えていただきたいのですが

会場参加者：僕も皆さんも高橋さんもそうだと思うのですが、生き物が好きというところから入っている人たちなんですね。世の中そんな人ばかりじゃないというか、そんな人じゃないほうが多い。でも実は共通点があるよねというところが大事かと思っています。

例えば、最近お付き合いがあるところでいくと、ファッション業界の人です。そういう人たちは自然とは関係がないじゃないかと思うんですけれども、白馬にあるショップでも、都会でも同じ服を売っていますよね。でもそれを使う場所として草原があったり、地方というところがあったりすると、そこでようやく接点ができると思うんですね。その接点をどうつくるか考えなければいけないのかなと思っています。

生き物を守りたいからこうしましょうというよりも、あなたたちの事業活動ややりたいことは実は草原でできるんです、という提案の手札をいかに持ち続けるかというところが大事かと思っています。

相談に行ったときに、「ジェットシューターが重たいから、背負える人を探しています」と言っても多分誰にも響かないですよね。それよりも、「めっちゃ遠くまで飛ぶ水鉄砲で一緒に遊ぼうよ」と言ったほうが、人が来ると思うんです。それは言葉の言い換えかもしれませんけれども、何か相手の懐とか、業種とか、価値観に入る工夫がすごく大事になってくる。その結果、井田さんがさっき言った自然が守れればいいということに繋がって、相手に合わせて提案を変えるところが、すごく大事なのかなと思っています。

阿蘇でも、岡山県の蒜山高原でも、課題解決というか価値創造ですね。手段としては、大阪の百貨店さんと連携して、百貨店と草原は全然関係がなさそうですけれども、さっきのお話のように、百貨店というのは物を売っているだけじゃなくて、最近は「コト消費」で、何かしら体験とか購入したものを使う場所、価値観とか、そういったものをどう表現するかをすごく工夫されています。その場所として地方を選ぶ。

恐らく白馬に大きなお店があるのもそういう価値観や遊ぶ場所の表現だと思いますし、小谷だったらスキー場と連携して草原が守れるかもしれない。開田高原だったら、もしかしたら馬かもしれないし、ほかの手段かもしれない。草原が好きじゃないけど馬が好きな人はたくさんいるとか、山が好きな人だったらもっといるとか、そういうところがあると思うので、本当に大事な思いを心に秘めつつ、何か個別の方策を考えることがすごく大事かなと思っています。今のところ、そういう思いを持って僕も地

方で活動しています。

井田：ありがとうございます。ほかにどうでしょうか。

会場参加者：さっきの井田さんの質問で、たしかいろいろなところの方が来られていると思うんですが、このコミュニティは出来始めたところで、始めたのは高橋さんですか。まず１個目の質問ですが。

高橋：いろいろな経緯はあるんですけれども、私が声をかけて始まりました。

会場参加者：それは、やろうとして始める人が１人いないと始まらないし、さっき言ったいつの間にか広がっていたというのは、それは次の段階で広がっていったということで、コミュニティはそういう広がり方をしていくんだと思うんですけれども、もう一個は、長く続いていく、コミュニティが成熟してきてどうやったら続くのかなと考えていたんですね。阿蘇ではグリーンストックという形ができてずっと続いていて、たくさんボランティアの人たちが来ているんですけれども、今日来られている九重の皆さんは、10年以上前もたしか同じような服で来られていて、この活動が何で長く続いているのかなと。

若手の会と言いますが、たぶん前は九重の皆様も若手だったと思うんですね。若手の会が立ち上がることも大事で、広がることも大事だと思うんですけれども、できたコミュニティが長く続くというのもとても大事だと思うので、質問としては、九重の方に何で続けられているのか、秘けつとか聞ければ、皆さんの参考になるんじゃないかと思ったんですが、どうでしょうか。

井田：ありがとうございます。じゃあ、九重の皆さん、ぜひ。次のサミットの担当になりますね。

会場参加者：参考になるかどうか分かりませんが、私どもは「九重の自然を守る会」で、自然が好きな人ばかりが集まったんです。というのは、楽しくなければ続かないじゃないですか。苦しいことばかりじゃ続かない。楽しければ長く続くと思っています。ですから、楽しいことを長くやる。自分も楽しくなければ人も楽しくないと思います。ですから、野焼きへ行ったら、野焼きは面白いよ、面白いから来て加勢してくださいと。

坊ガツル（湿原）でいうと、九州電力さんにお願いをして一緒にやりましょうということで始まったんですが、九州電力の社員に野焼きをやりますよと、加勢してくださいと投げかけたら増え過ぎて、今は最高でも200人、大体150人でいいんですが、多過ぎて参加者を抽選で今選ぶようになっています。

それはやはり面白いから。「野焼き楽しいじゃないですか」と。「あなたが協力してやってくれたことでこんな草原が保たれていますよ」、「また緑の草原になったときにもいっぱい来てください」とか、そんな呼びかけをしてやっています。

私どもの会もそうです。自然が好きで好きでたまらない人がここに集まっていて、ですからみんな来てくれるんですが。何かやるときに募集するときも、無理なく参加をしてくださいと。一生懸命じゃなくていいですよ、適当でいい。一生懸命走ったら途中でパタッと倒れて終わりになりますよと。じゃなくてゆっくりいい加減でいいんですよ、いい加減でいい活動ですよと、でもそれは「よい加減」の「いい加減」なので、じゃないと全力ではなかなか長くは走れませんから、いい加減な活動でいいと思って呼びかけをしております。そんなことで、結論にはなりませんけれども。

井田：ありがとうございます。高橋さん、どうでしょうか。

高橋：ありがとうございます。まず始める人が誰かいたというのが大きなきっかけだよねというのは本当にそうで、やはり私が火入れに感動して、「ねえ、これ面白いからみんな来てよ」と呼びかけたり、「職人さんたち面白いから、ちょっと一緒に泊まりにいこうよ」と誘ったら、ついてきてくれた人がいたというのはやっぱり大きかったので、私が動いたことがきっかけになったと思います。

でも、それは恐らく、今現地で活動されている皆様が私と同じ立場だと思うので、皆さんもできるこ

となのかなと思って聞いていました。

あと、九重の皆様の、苦しいことは続かない、できるときに楽しく活動して、面白いと思ったことを続けていらっしゃるというあり方にもとても共感できます。私たちの若手の会も、無理なく自分のペースで参加してよくて、毎月行っている人もいれば、私みたいに火入れはたくさん行くけど田んぼには半年に１回ぐらいしか行かないみたいな人もいて、どれぐらいの頻度で現地に行くかは本当に自由で、別にそれは強制もしていません。

ガチで頑張りたい人もいれば、そうじゃない人もいる。地元の方と話すのが楽しい人もいれば、生き物がどう変化するのかをすごく楽しみにしている人もいるし、草刈り機やチェーンソーの講習を受けさせていただいているんですけれども、そういう技術の習得を楽しみにしている人がいたりします。若手のコンサルが集まっていて、同業他社ではなかなか情報交換が難しいんですけれども、立場を取っ払って好きに話ができる、同じ志を持っているので他の会社とはいえみんなで仲良く話して、こういう未来にしていきたいよねみたいな話をしたり、活動で使えそうな新しい技術の情報を共有したり、そういう熱い日々を過ごす中で、みんながそれぞれ目的を持って集まってきてくれていることで、若手の会が続いてきているのかなと思います。

まだ十分に茅場にたくさん人を巻き込めているわけではないですが、火入れに感動する方がすごく多いですし、茅葺き屋根というと古い文化と思いがちですが、私たちはそういう側面だけではなくて新しい茅葺の可能性もたくさんあると知っていますけれども、それを知らない方たちもたくさんいるので、そういう面白さをいろいろな方面に伝えていくことができれば、どこかにそれを面白いと思って引っかかってくれる人がいると思いますし、そういうきっかけを生む場や仕組みづくり、進め方ができたらいいのかなと思います。

井田：ありがとうございます。あっと言う間に時間がたってしまって、言いたいことを言えなかった方もたくさんいらっしゃるかと思います。進行がなかなか上手にできなくて申し訳ありません。

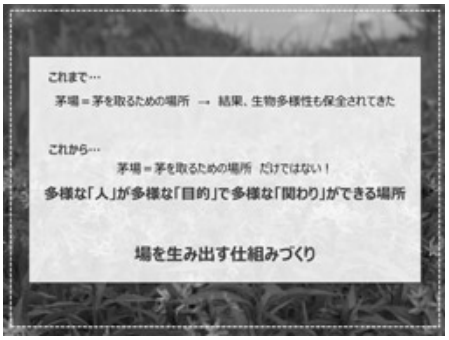
高橋さんの研究をまとめると、「多様な人が多様な目的で」とあったスライド、これですね。今日はこれに尽きるのかなと思います。茅場に限らず、どんな課題も今はこれが必要だと思います。里山が荒れているとか、クマ出没多発などいろいろな課題がありますが、多様な人が多様な目的で関わり、さまざまな場所や場づくりを行うことが大切ですね。この会も一つの場です。次に何をするかというところで、みんな戸惑っているのではないかと思っています。本当にありきたりかもしれないけれども、できるところをまず自分でやってみる、一歩踏み出して前を向いて行動していくことが重要だと感じます。そして、その後に場を生み出す仕組みがつくられていくのではないかと思いました。

そこで、今日のお願いです。最後のスライドにあったQRコードから、ぜひ皆さん登録してください。そうでないと、「集まってよかったね」で終わってしまうので、何かアクションを起こす。QRコードでnoteに登録して、この中に入ればメーリスに入れるわけですね。そこから、みんないろいろな思いをぶちまけたり、良い例を共有したりして、つながりを持っていければと思います。そんなことでよろしいですか。

高橋：まだ全然私の思いを１枚しか記事にできていないので、これからどういう活動をやっていますとか、その辺も記事にしたいなと。うちの研究室は面白いことをやっていて、もしかしたら参考になるようなことをエッセンスとしてちりばめられるような記事が出てくるかもしれないので、そういった意味でうまく使ってもらえれば私のfacebookでもいろいろ情報発信をしていますので、いろいろなところでつながれたらと思います。

井田：では、しばらくここに映しておきますので、皆さん登録していただいて、また情報交換の場にしていただければいいのかなと思います。

それでは、時間になりましたので、今日はここで閉じさせていただきたいと思います。ありがとうございました。



第14回 全国草原サミット・シンポジウムinおたり　～つなげよう 茅場(かやば)が育んだ技術と命～

第２分科会
「茅刈りと茅葺きを未来につなぐ」

日本茅葺き文化協会　事務局長　上野弥智代 氏
㈱小谷屋根　茅葺き師　松澤朋典 氏

上野弥智代：こちらは第２分科会で、今日は「茅刈りと茅葺きを未来につなぐ」というテーマで、皆さんと語り合えたらという趣旨です。

日本の多様な地域性を持つ茅葺きというものが、そこに未来を考えるヒントがいっぱいあるんじゃないかということで、再評価されつつあります。単なる建築物というわけではなく、今日は草原サミット・シンポジウムですけれども、その中でもこの第２分科会は、「茅」ということに着目して、茅刈り、茅葺きを通じて未来を考える、未来につなぐというテーマでお話ししていけたらと思っております。

私はこのコーディネーターを務めさせていただきます日本茅葺き文化協会の事務局長をしております上野弥智代と申します。よろしくお願いします。

最初にお話ししていただくのが、松澤朋典さんです。先ほどの松澤敬夫さんの息子さんということになりますけれども、簡単に御紹介します。

今、株式会社小谷屋根の代表取締役です。ここでは「茅葺き師」と呼ばれています。松澤朋典さん、昭和54年生まれ、父・敬夫氏に弟子入りし、文化財建築の茅屋根を手がける３代目として、伝統技術の継承及び普及啓発に力を入れている。この小谷で育って、この山の暮らし、それから技と知恵を受け継ぐ継承者として松澤さんが取り組まれていること、少しそんなことを最初に15分ほどお話をしていただいて、それから質問に限らず、皆さんと対談することでお話をできたらと思っています。

松澤朋典：私は今、小谷屋根の代表をやらせていただいています。もともとは東京のほうに高校を卒業してから６年半ぐらい出ていました。また、父に弟子入りする、甘えにならないような覚悟ができたときに僕も戻ってきて、現場では親方として、家では父としての区別をはっきりして、仕事を覚えるために本当に一生懸命自分なりに努力して、今、何とか３年ぐらいで、現場は頭を張ることになってしまって、それは父が伊勢神宮のほうへ行って、こちらは後を頼むという話になったので、それを機に僕が受け継いでいます。

また、小谷のことも含めて、いろいろなことを含めて覚えていかなければいけないし、それをアウトプットしていかなければいけない。そんな中で、今までやってきた、20年少しになりますが、小谷のことを発表させていただきたいと思います。

小谷村に今ある茅場として、茅場といっても茅を採取はしていないところもあるんですけれども、火入れを毎年行っているところが、ショクの茅場、池の田の茅場、あと牧の入茅場、堂の入茅場、大体こちらの西側の山のつながっているところになります。場所でいうと、今、白馬乗鞍温泉スキー場がこんな感じでほぼつながっていて、みんなそれぞれちょっとずつ茅の特徴も違ったり、集め方に違いがあったり、運び出しも違いがあった中で、今一番多く出せるのが牧の入茅場、あとショクの茅場が、出しやすさなどで刈らせていただいています。

全部刈る時期が同じなので、ばらばらになってしまうと集めるのが大変になるので、取りあえず牧の入の茅場をまず刈って、足りなければ栂池の堂の入

茅場を刈らせてもらったり、ショクの茅場に行ってススキをたくさん刈らせていただいたり、あと雪の量によっても、雪が降らなければススキをずっと12月頃まで刈ったこともあります。

ショクの茅場というのは、地域の方が面白いことを考えてやってくれて、今ずっと残っているんですけれども、カリヤスとススキの両方があります。カリヤスが約2,000把、ススキが6,000把。１把、２把と言うんですが、大体刈ったときに直径20cmぐらいです。これは山で立てて乾かさなければいけないので、あまり大き過ぎると乾かない、小さ過ぎても倒れてしまうので、ちょうどいいのが大体７寸ぐらい、束ねたところで７寸ぐらいの束が一般的な規格となっています。６把で立てて縛るとちょうど６尺の縄で縛れる大きさが、一応単位としてこの小谷村では標準化されています。

ショクの茅場はずっと前から刈っていたわけではないんですけれども、ススキが多くて、道がすぐ近いということで、このように端から刈れるんですね。茅場として管理しているからだとは思うんですけれども、やはり短期間でたくさん集められるのが管理されている茅場の特徴になります。

次に、この池の田茅場というのは、僕たちも土倉集落という集落があって、そこの方たちが山を登って刈って運んで下ろしてきて、すごく高いところにあるんですが、運び出すのが大変な場所です。でも、初めて去年見させていただいたらすごいんです。いい茅がたくさん生えていることに気づいて、すごく価値があるものが毎年ただ埋もれていっているのはもったいないなと最近すごく思いますが、どうしても刈る時期が同じ、雪が降る時期も同じということで、茅刈りをする人が限られている以上は、なかなか手をつけられないのが現状です。端から刈れるすごくきれいな場所で、見渡せるすごくいいところです。火は毎年入れてくれているところなので、質もすごくいいです。

牧の入茅場は、さっきのショク、池の田の茅場のカリヤス、結構範囲が広いので、上のほうもあれば、下のほうもあって、全部刈ればもっとあるかもしれないですけれども、6,000把はありそうです。

牧の入は、今ここに１万把と書いてあるんですが、僕たちも毎年刈る場所が限られていて、本当は奥まで刈りたいけれども、雪が早かったりして手が入れられなくなったところはツルが増えたり、すごく刈りにくくなってきてしまっていて、今刈ればカリヤスは１万把は刈れます。道を造った関係で道の周りはどうしてもカリヤスが生育できないような環境になってきて、道の周りがススキ、道から見るとススキしか大体見えないんですね。高いところから下を見るとカリヤスが見える。そのススキが年々やはり増えてきているのは間違いなくて、それを何とか絶やしたいなと思ってたまに草刈り機で刈り払ったりはしているんですけれども、なかなか減ってはくれないです。

でも、出しがすごく楽で、立てやすくて、声をかければ見渡せるので、牧の入が一番最初に僕たちが10月20日、土用の入りとともに入って刈らせていただいています。これは茅刈りしたときの風景です。

次に堂の入の茅場というのは、栂池高原のスキー場の鐘の鳴る丘ゲレンデという、すごく広かったらしいんですけれども、真ん中がゲレンデになって、両脇に残っています。右と左、両方とも1,000把ぐらいずつカリヤスがあります。緩斜面のなだらかなところです。

牧の入茅場の説明、先ほど井田先生もおっしゃっていたんですけれども、昔は２万把ぐらい刈れたんです。各家の母屋や土蔵、神社というものも含めて

管理されて維持できた茅場です。５間×８間の40坪とすれば、大体建坪200把で8,000把というのが間違いなく足りる。どの家の人に聞いても、この面積はこれだけあれば足りるからと、数量も大体の人が知っています。

１軒当たり100把刈れば１万把そろう。100把というのは家の軒回りに楽に置き切れる量で、管理しやすい量で、それを冬越えて、春の彼岸過ぎぐらいに持ち寄れば、この家に１万把というのがさっと集まる。そういうのが昔の小谷村でも当たり前にあった地域のつながりです。

今ではもう地域の作業の草刈りにしてもなかなか出られないとかそういう時代になってきてしまっています。茅場の茅を必要とする屋根葺き用に使う人たちしか、今茅場で刈っていないです。２～３週間しか刈る時期がない。やはりこれはどうしようもない。霜が４回も５回も下りると節が飛ぶようになって、材料としては使えないとなるぎりぎりまで刈らせてもらって、天気はよくても材料が駄目だから、１週間ぐらい待ってススキが刈れるようになってから刈ろうかと。本当に刈る時期が少ないので、本当は20人ぐらいでばっと刈れたらすごくいいんですけれども、なかなか人が集まらないという課題があります。

小谷村の茅葺きは、やはり暮らしの中にある。出稼ぎに行く方もいたり、とにかく食べることが優先で、稲作は間違いなくやって、その期間は工事はしないんですね。田植えの前と田植え後、あとは稲刈り前と稲刈りの後、ちょっとした時期に、でも稲刈りの後はもう茅刈りが待っているのでなかなかそういうのはできないんですけれども、茅は茅場から必ず調達できる。あと茅を屋根葺きに使う鉾（ほこ）とか、垂木（たるき）、もっと太くなると屋中（やなか）、もっと太くなるとサスというのは、山に入って定期的に取る。

そのほかに、養蜂をやったり、炭焼きをやったりする人は山を転々としながら、とにかく山の木を切って使う。この木は３年後には垂木になるとか、そういうのも大体の人が分かっていて、自分の家で数本毎年集めていれば、葺き替えのときには足りるというのが、もう各家の人たちが山に入って管理してきた。だから道も整備されるし、花も咲いて昆虫が飛び交って、それを求めて鳥も入るような山だったんですけれども、なかなかそういうのが生活のスタイル、家の形が変わって山に入る必要がなくなって、気づいたら荒れてきているというのが、今の日本中に見られる山の形。木を切っても切るだけで出すことを考えないとか、もう使い道がないし、使っても高いとか、いろいろな変化によって山の形、在り方が変わってきています。

やはり取るときも毎年間引きながら少しずつ取るというのが、育てていくことにつながって、一気に取ると絶えていってしまったり、生態系が変わってしまうので、商売のためなどでなく、定期的に少しずつ無理なく荒らさないように取ります。いろいろな家の人に聞くと、「そんなに取っちゃ駄目だ」とおっしゃいます。

こういうのは山から調達してくる。天然のもので、ちょっと前までは売ってはいたんですけれども、今はもう買う人もいなくて、売る人もいなくなって、取る人もいなくなって、自分たちで取るしかないので、林業の方は大勢いるので多くの人に声をかけて、本来捨てているもの、切り倒しているものが僕たちは必要なものなんですというのを伝えて、こういうのがあったらこういうのが多いところに道を造るとかして、少しずつ集めたものが集まってきて、今あちこちの山で小谷から遠くは池田とか、あっちのほうまで林業関係者が増えてきているので、少しずつ声をかけて集めています。

使うときは200本、300本と使うので、１年で集めるのはなかなか不可能です。長いものは８ｍとか。こういうものも自分たちで取りにいけないところもあるので、多くの人に関係者を増やして集めています。

春、野焼き、田植え、畑。茅くずは全て畑に入ります。小谷の人はみんな喜んでもらってくれます。ちょっと離れたところに行くと要らないというんですけれども、やはり使ってみるとよかったからと、だんだん自分のうちで使う分が減ってきたぐらい、自分のうちの畑に置いておいたものまで持っていく人がいるぐらい、茅は畑にすごくいいです。

除草剤をまいたり、種をまいて肥料をやって、すぐ育てて出荷するという方には、スピード勝負なので向いていないですけれども、自分のうちで食べるのは茅を入れるとおいしくなると、みんなが言ってくださっています。

秋は稲刈り、茅刈りして、保存食を取って冬を迎

えて、木材の調達、皮をむいたり、冬は屋根雪を掘ったり、ネマガリダケののし作業、あとは茅拵えをしています。冬の３月、雪が固くなったときに、冬の間出た茅くずを燃やして根をあぶって、反対側に曲げると石臼の穴に挿して反対に曲げたりすると真っ直ぐになるんですね。それを硬い雪の中にスポッと挿して一気に冷やすと形が真っ直ぐになるんです。そういう形で３月に、10月に刈ったネマガリダケを春伸ばす。それで彼岸過ぎの仕事に使っていくということです。

小谷村の屋根は、大体今10軒ぐらい、民家で３軒、資料館で２軒、あとそのほか、レストランや展示物などが５棟ぐらいあって、それぐらいしかありません。

豪雪地帯の葺き方の特徴は、「２、３ぷっくり、４、５、６ぴしゃり」と、ちょうど壁の上辺り、三葺き目ぐらいを一番高いところとして、結構起こすんですね。それは、雪の重さが一番かかっていいところ。そこから外は雪の重さがかかると折れやすいので、ちょうど三葺き目ぐらいを一番起こして、軒が丸っこくなるように、ちょっとこれだと見づらいんですが、三葺き目ぐらい、壁の上ぐらいが一番高

足立君江 氏 撮影

いんです。この内側にありますが、このぐらい起きているんですね。これは雨切れをよくしてつららをつくらないというのと、軒に無理がいかないようにする。雪が３ｍも４ｍも積もってしまうことがあるので、そういう構造上の特徴があります。

茅葺き、茅刈りの課題は、野焼きや雑草退治。自分たちで刈っている場所だったら自分たちで毎年刈るから、自分たちで刈るところぐらいは自分たちで刈っておこうとか、大勢の人が入っていたのがだんだんなくなって、全部僕たちではやりきれないところで、なかなかやろうと思ってもうまくいかなかったり、高齢化や保健の問題、農薬も、結構全国的に問題になったりします。

あとは刈り子の確保。短期間なのでなかなかいないですが、今僕たちはやっているのは子育て中のお母さんに10時～２時半までとか。山のガイドはもう10月に半ばになるとみんな終わって下りてきて、今度スキー関係のほうに行くちょっとの間がちょうど茅刈り時期なので、そういう方が入ってくれています。あとスキー産業の従事者。宿の人たち。従業員を早く集めて茅刈りをしてもらって、雪が降ったらそっちの仕事をするような方向にシフトしていただけるように、早めに人を確保するということ。

あとスキーヤーとトレイルランナーともつながったりして、茅刈りや茅の引き出しなど、同じ地球で生活をする人たちに多く関わってもらって、スキーを滑る場所は実は茅場なんですよということも伝えながら、みんながお互いのためになるように動いています。

茅葺きに関しては、やはり道具や機械の発展や開発がないので、同じことをしていくしかない、手間が同じだけかかる、昔と変わらない。あとは置き場の確保、材料の調達。この小谷の葺き方の高田流というのは、何か難しいと。雪国の屋根は葺きたくないという方も結構いるんですけれども、掘るのに時間がかかる、固く締めるので手を痛めるとか、職人の減少と高齢化が茅葺きの課題です。

どうやっていったら残せるかというと、関係人口を増やす、関わってくれる人を増やしていくことを、今少しずつやっています。トレイルランナーが走るトレーニングを兼ねて引き出す、すごく早く集まるんですね。こういうのを使ったりしています。

未来へ残すための取組も、小谷村では小学生３、

４年生がワラビ採りをして茅場に親しんでいるので、その延長で、スキー部の保護者たちと生徒で茅刈りをして、僕たちで買い取って活動資金に充ててもらっています。白馬高校のスキー部にも声をかけて、引き出し作業、行ったり来たり山をずっと走ってトレーニングを兼ねて、これも活動資金に充てるために、子供たちも先生も来て頑張ってくれています。

あとはキャンピングカー協会と連携して、平らがあればキャンピングカーで来て茅刈りをして、観光して、自然に触れて帰ってもらうイベントを１回やって、よかったのでまた今年もやるかもしれません。

あとは青年部・女性部、地域を越えた仲間たちとのつながりで、茅刈りをして刈った分を買い取って、それが組織の活動資金として収益活動につながる。

そういうことをやって、だんだん参加者が増えてきています。長野県には今100もないですけれども、スキー場があるところで茅刈りを復活させて、その地の人たちで茅刈りをやってもらって僕たちで買い取ることが、今５市町村で行われています。

県内では、６年生が毎年どこかで立穴式住居を造っていてそういうのを教えたり、茅刈りからやろうということで、今年も安曇野市のほうで一つ、骨組みはもう終わっていて、茅刈りを待っている学校があります。

そうやって関係人口を増やし、触れてもらう、知ってもらう、ものづくりの良さを子供たちに味わってもらう。あとは全国の職人さんたち、みんな忙しいんですけれども、ちょっと空いたときに行ったり来たりして、やり方の違いとか、気づきを与え合ったり、いろいろな発見のきっかけになったり、技術の交流も積極的にやっています。

林業従事者を増やしつつ、茅葺きとの両立、除雪との両立。各地の野焼きに参加。林業というのは谷に１人ぐらいは絶対必要な職種で、林業だけで生活するのも大変だから、茅葺きに入ったときは茅の加工もしてくれるとか、そういう人も今少しずつ増やそうと思っていて、今年から林業の関係の人が一緒に働いてくれているんですが、やはり谷に１人林業をする人も一緒になって増やしながら活動をしています。

スキー部との茅刈りが左側で、白馬高のスキー部の茅の引き出しが右側の写真。年１回キャンピングカーのときの映像です。

あとは子供たちと刈り取った茅でアート作品をつくって、子供たちが茅でつくった作品がある以上、二十歳になっても30歳になっても、見たときに当時を思い出して、ふるさとを懐かしくなってもらえたらという思いで、小谷・白馬の辺りから糸魚川までのジオラマみたいなものをつくらせてもらいました。

上野：ありがとうございました。最後のは道の駅にあるんでしたっけ。

松澤：はい、道の駅にあります。

上野：道の駅「おたり」ですね。ありがとうございます。

では、松澤さんのお話と、お昼からの松澤敬夫さんと、井田先生の話も踏まえてですが、この会場に地元の方はどのぐらいいらっしゃいますか、村長も含めて。地元の方は５人いらっしゃいますね。あと、よその地域だけれども、茅場を持っているということで参加されている方はおられますか。そうしたら、茅葺き職人ですという方は？　１人。あとは、環境保全活動をされている方は？　あと茅葺きの所有者、茅葺き民家を持っていますという方は？　２人いらっしゃいますね。 今言われた中に当てはまらないなという方は？　学生さんと環境省の方。あとは当てはまらなかったのはどんなことをされている方ですか。茅葺きを使っている方？

会場参加者：今、長野県に移住して家を探しているんです。古民家がいいなということで。

上野：新たな担い手ですね。そんなメンバーですね。ではこの第２グループで、最後みんなで四つぐらいキーワードを出していきたいと思います。何かこういうことができるんじゃないのということで。朋典さんに質問や感想、自分はこうやっているんだけれどもどうなんだろうとか、何でもいいんですけれども、まずは質問をどなたかいかがでしょうか。

子供たちと刈り取った茅でアート作品

会場参加者：山梨県北杜市の清里というところから来ました。環境保全活動みたいなことをしているんですけれども、私は裸足で森を歩いて森を豊かにしようということでやっていまして、そういうツアーや森づくりをしている者です。草原ではないんですけれども、もともと清里も草原が多くて、今みたいじゃなくて山も見えたと言われていたので、そういう再生の仕方というか、環境づくりもどうにかできないかなと思って今回参加しました。

先ほど10月20日に茅を刈り取り始めるというお話をされていたんですけれども、こういう一般の人が参加したい、手伝いたいみたいな窓口はあるんでしょうか。ちょうど10月20日は、私、そういえば空いているなと思ったので。

松澤：今茅場で刈らせてもらって、刈った束数で地権者さんにお金を支払うという形でやっているので、小谷屋根の茅刈りという形であれば一緒に参加できます。もし違うところに持ってきてということであれば、申込みをすればOKだと思います。

会場参加者：10月20日は大丈夫ですか。

松澤：ぜひよろしくお願いします。

上野：それは松澤さんに申し込めばいいということですか。

松澤：そうですね。一緒に同じ仲間でみんなで刈れば全然大丈夫です。

会場参加者：ありがとうございます。松澤さんに以前お会いして、裸足のマラソン大会に出てくれたんですけれども、茅葺きとは全然関係ないんですけれども、私も裸足で歩いていてすごく足が発達してきて、松澤さんの手を見た瞬間に、ちょっとハッとさせられたというか、すごい手をしているんですね。皆さん茅葺き師の方はそうだと思うんですけれども、やはり人間は使い込むとこれだけ発達するんだというか、発育発達段階である程度体の形は決まると言われているんですけれども、そうじゃないなというのは、松澤さんの手や自分の足を見て感じていました。人間の体の限界はまだまだあるなと、全く違う話ですけれどもそれで感動して、松澤さんを追いかけてきました。ありがとうございました。

上野：全く関係ないというか、森とかこういうところに暮らす人の体だったり、知恵だったりなのかなというのが、敬夫さんもそうですけれども、思いますね。茅葺きに発達しているというより、この山の暮らしというか、そのものに適した体だったりするのかなと私も思います。

会場参加者：今日は知人が欠席して、２日前にお誘いをいただいて来たのでこれに対する知識があるわけじゃないんですけれども、茅葺きの屋根を普及させるためには、一般の人に具体的にメリットを分かりやすく提示するのが大切かなと思ったんですけれども、具体的にメリットを提示するとしたら、どういう宣伝文句になるでしょうか。

松澤：茅葺きの建物は、大体自然なもので出来上がっていて、土間と土壁と草の屋根、木と草の文化みたいな、全て土に還るというのと、化学物質とかそういうものを使っていない。あとは自分たちで補修をしながら暮らしてきた、100年、150年守ってくる。特に塗装とかもなく。まあ差し茅とかは必要になるんですけれども、自分たちで維持管理していかれる。建物は大きいですけれども。

会場参加者：私自身、地球環境にどれだけいい影響を与えるかがこれからの生活様式では一番大切だと思っていて、茅葺き屋根以外にはどういう種類の屋根というか、地球環境にやさしい建築方式だとどういう屋根のつくり方があって、ほかの様式と比較して茅葺きのメリットはありますか。

松澤：やはり炭素の固定というところで、燃やしたときに炭素が固定化される、吸収したものが分かるんだけれども、炭になって残っています。そういうものは分解されるのにすごく時間がかかる。草原があるというのと、茅葺きにしていくというのと、カーボンニュートラル以上だと思うんですね。

会場参加者：つくる過程ですごく自然を汚さない。茅葺き屋根１軒あるだけで、そこのリンゴ農家はすごくリンゴがおいしいんです。受粉がすごくできる

とか。１軒あるだけで里山が守られる。木を切る、必要なものを調達する。山に人が入る。やはりそういう暮らし。稲作とかとちょうどいい関係性があって、やはり全部やれれば一番いいので。勉強になりました。ありがとうございました。

松澤：どこから来られましたか？

会場参加者：長野市からです。

上野：近くですね。すごく大事で、難しい質問ですね。茅葺きのいいところ、こうだからと説明できないといけないのは大事な指摘だと思います。みんなにまだまだ共有されていないことだと思っていて、すごくいいなと思っているけれども、うまく言語化できていないところがあると思います。

会場参加者：茅葺き屋根の家に住んでいます白馬村からきました。朋典さんに屋根の管理をしてもらっています。住んでみて思うのは、とても涼しいということですね。この夏とても暑い日もあったんですけれども、やはり家に入るとひんやりしますし、外から来られた方がみんな「この家は涼しいね」と言われます。それだけやはり断熱効果があります。

あと、雨が降ったときに雨音がしないですね。外を見て初めて「あ、降り出したな」と分かるぐらいな感じです。ただ、やんだときに分からないというのもあります。いつまでも雨だれが落ちているので。住んでみていいなと思うのはその２点です。

上野：ありがとうございます。あとは、家の中で火がたけるということ、生火をたいても屋根から排出してくれる、家の中で火がたけるというのはすごく大事なことじゃないかなと思います。

今はそれから離れてしまっているから、それができないからとあまり不便に感じないかもしれないんですが、何かひとたび災害が起きたときに、やはり水と火、それから食べ物というのがどれだけ大事かということを痛感することが日本の中でもよくあるわけです。そんなときに茅葺きというのは家の中でも火をたけるので、すごいことじゃないかなと、災害のたびに思うことがあります

会場参加者：今、筑波大学で茅場の研究をしております。質問ですが、小谷村で茅刈りは鎌で刈っていますか、機械で刈っていますか。

松澤：鎌で手刈りです。

会場参加者：そうなんですか。日本のほかの地域では、人が足りなくて機械の導入が進んでいますけれども、ほかの茅葺き職人から聞きますと、やはり鎌で刈った茅と機械で刈った茅は質の差があるという指摘がありました。松澤さんはどう考えていますか。

松澤：例えば草刈り機で刈るプロみたいな人、仕事としてやっている方に刈ってもらったこともあったんですけれども、僕が手で刈るのとあまり量は変わらないんですね。ただ草刈り機で刈ったものというのは長さがそろわない、草も入っちゃう。駄目な茅もたまにあるんです。そういうのも混ざっちゃう。自分の体から遠いところの茅も刈り倒して束ねるから、後の作業が大変で、集めることだけを考えるのであれば、とにかくいいものも悪いものもかき集めてしまって、冬の間選別するというのは、それは一つの手なのかなと。とにかく何でもかんでも端から刈って、とにかく集めてしまって、冬の間にそれを選別さえすれば、５分の１ぐらい駄目かもしれないけれども、8,000把、9,000把、１万5,000把ぐらいあるかもしれないですけれども、やはり手で刈ったほうが早い。いい茅がいい状態でそろったものが１回で集まります。

会場参加者：御回答ありがとうございました。そういう大きな面積の茅場で手で鎌で刈っているということにびっくりしました。ありがとうございました。

上野：ありがとうございます。次どなたか。

会場参加者：利根川の上流の奥利根のほうで、10haくらいの茅場を管理している団体に所属しています。先ほど、刈り子、刈り手の確保にいろいろ苦心されているということをお伺いしました。私のほうでも、やはり地元の方の高齢化とかいろいろ悩んでいるところですが、現状として、将来的には万全な状態でしょうか。それともやはり、先ほどもありましたけれども、いろいろなところ、スキー場関係者などに声をかけているということですが、その点について、将来的な見通しも含めてお聞かせいただければと思います。

松澤：取りあえず茅場が維持できるぐらいの量は何とか集まるんですけれども、若い子育て中のお母さんたちが、子供が小学校に入ったら働きに出るという形で、取りあえずゆくゆく退職されてまた秋に空いたら茅刈りに来てくれるというところまで見越して、少しずつ関係する人を増やしています。ただ、

もうしばらくは大変かもしれないです。それから先になると、「昔、茅刈りしたね」という方が戻ってくることを期待しています。

あとは、若い人たち優先で結構増えてきているというのと、通えないけれども茅刈りをしたいという人が増えてきているので、戸隠や野沢温泉、木島平、飯山で茅刈りをしている、それが定着して地元の人たちで教えに行かなくてもいいふうに集めてもらって、春僕たちが買い取りに行くという形で、点々とはしているんですけれども、同時期に同時進行で同じことができているというのは、少しずつ人口が増えていっているので、そこからまた広まってくれたらうれしいなと思っています。

会場参加者：ありがとうございます。私のところは、首都圏の人間が奥利根のほうに行って刈っています。それで地元では足りない部分を助けている。そういって首都圏から通っている人が大半なんですけれども、小谷村のほうでは、その辺のバランスというか、地元と都会の人の関係はどんな感じですか。

松澤：都会から刈りに来るのは、やはりイベントごとで、半日刈って半日は楽しむみたいな、そういう企画で都会から来る。あとは九州のほうから刈り子さんたちが、僕たちは刈るのが早い時期なので、九州はまだ２か月も先の話なので、こっちで茅刈りを２～３週間して帰るとか、そういう形で来られる方が多くて、通いで遠くから来る人はなかなかいないです。

会場参加者：では小谷村では、我々みたいにボランティアみたいな形で参加している方はあまり割合としてはいないという形ですか。

松澤：そうですね、たまに１時間半ぐらいかけて来られる方もいますけれども、あまり遠くからは。小谷・白馬ぐらいですね。

会場参加者：基本的には地元や周辺の地域で、現状としては何とか確保できていますか。

松澤：そうですね、地元で。

会場参加者：分かりました。ありがとうございます。

上野：今質問してくださった方は群馬県のみなかみ町の森林塾青水（せいすい）に所属されている方ですけれども、そこの場合は、都会の人が来る理由の一つは、谷川岳のふもとで利根川水系の自分たちの飲んでいる水の源流を守るという、その水を守るということを、最初のほうではそのことをやる人を集めようということで……。

会場参加者：取りあえず飲水思源、「水を飲んだら源を思え」ということをキャッチフレーズにやっているわけです。

上野：直接茅葺きを持っていて恩恵にあずかるとかでもないし、そこの地域に住んでいるわけでもないんですけれども、はるか下流で水を飲んでいる人たちが、何か役に立てないかということでやっていらっしゃる取組ですね。

会場参加者：そういう形でやっています。

上野：今、茅葺きの数が少ないのでここだけを見れば足りている話でしたけれども、茅場はあるのに刈り手がいないということが、わりと茅場がある地域が抱えている問題だと思います。が、これに対して何かいいアイデアがあったらもちろんうれしいですけれども、今しきりに各地に好んで茅刈りに行っている若者がいるので、何をもってその茅刈りをしているのか、自分が茅葺きに住んでいるわけではなく、研究はされていますが、その方のお話も聞いてみたいと思います。

会場参加者：東京科学大学のものです。おととしのシーズンから、まだ全然なんですけれども、茅場を巡って実際に茅刈りをするという、それを一応研究スタイルとしています。すみません、まだ小谷は来れていないんですが。

一応、今私の中でかなり遠い長期的な目標というか、考えている作戦としては、「茅刈りウィンタースポーツ化計画」。

上野：ウィンタースポーツ？

会場参加者：すごく競技性が高いと思っていて、私

が行った中で、たぶん一番激しかったのが小谷屋根さんが教えて茅刈りするようになった木曽の人たちが、もう暗いうちから刈り始めて暗くなるまで刈って、カリヤスはやはり期間が短いからその限られた期間の中で、もう束ねるのをそっちのけで、とにかく刈れるだけ刈ろうぐらいな勢いでやっていてすごいなと思います。

御殿場も、自衛隊を上がった人が１日で何十束も刈って、軽トラの後ろが全然見えないぐらいパンパンにして帰るとか、いろいろな人がいるんですけれども、やはりスピードもそうですが、でもきれいじゃないと使えないという、どこまで行っても材料なので、すごくそういう意味では、フィギュアスケートとか、スピードスケートとか、ウィンタースポーツ各種のいろいろな要素をかけ合わせた面白さがあるなと思って個人的にはまりつつ、でも趣味ではまっているだけだと怒られてしまうので研究にもしているという状態です。

先ほど子育て中のお母さんがというのもあったんですが、ある意味キャンセルできるということも含めると、単純に楽しさというところで刈ってもらうのが、まずはいいのかなというのは思っています。

あと、直接的に関係なくなってしまうかもしれませんが、一方で、葺き方を知らないまま刈っているとどんどん束としても訳が分からなくなってくるみたいなところがあって、阿蘇の人たちなどは、１日の終わりに茅束見せ大会みたいなのをして、職人としてやっている人が、「この束は使えない」とはじく束が出るとか、はじかれたら、その束はお金にならないので必死なんです、もうその刈り子の人たちは。そういう実務的なところもありつつ。私は専門が建築ですが、どちらかというとそういう文化人類学的な面白さも含めてあるので、単純にやはり１回来てもらって、刈ることそのものの魅力を何とかして伝えたい。でも行くところ行くところで刈り方も違うし、それもなあと思ってやっています。

上野：ありがとうございます。本当に茅刈りは、面白いと言ったら悪いかもしれないんですけれども、何か茅刈りのことしか考えていないというか、没頭するというか不思議な。プールで泳ぐときはそんなところがあるじゃないですか、水の中なので没頭してくるというか、茅刈りも基本的にすごく気持ちいい場所で一束一束だんだん入り込んでくるみたいな感覚があって、楽しいという感覚は分かる気がします。それとスポーツ性。

また、これは簡単そうでちょっと難しいからまたはまってしまうという。簡単そうだけれども、いい茅束をつくるのはそう簡単ではない。刈れればいいというものじゃない。身のこなしも、ベテランの年配の方のほうが動きに無駄がないというか、もう振り返りながらこれをやるとか、ああいうところは本当にすごいなと私も職人さんを見て思っています。

会場参加者：大分県の九重町から来ました。阿蘇の九重は知っていると思いますが、そこで景観の維持のために野焼きの実行委員会を立ち上げ、650haぐらいの野焼きを毎年やっています。やっていますが、だんだん茅が大きく立派な茅ができるようになっているんです。

考えてみれば、昔は茅葺き屋根が多かったんですが、最近はもうほとんどなくなっている状況ですが、昔茅場だったというところがやはりあるんですね。そうしたら、この野焼きするためには金が必要ですが、防火帯をつくるのも大変金がかかる。これは金をかけてでも防火帯をつくらなくちゃ焼けないんですね。だから、そのためには資金を稼がなければいけない。我々の地域では、防火帯について満額は出ないんですけれども、約３分の２近く町のほうが補助金を出してくれます。それで今600haの野焼きができています。何とかこの茅を金にすることはできないのかなと。こういう分科会があるということで参加をしました。

御教授をいただきたいと思います。茅場の要件といいますか、すばらしい茅というのはどのぐらいのサイズでどういうものがいいのかというのと、それから人の土地なんですね。その土地で茅を取るといったときに、礼金とかはどのぐらい出しているのか、出さなくてはいけないのか。それを商品として売るとしたら、大体相場はどのぐらいなのか。そういったことを教えてほしいと思います。

松澤：まず、いい茅というのは、その地にある植物としてこれしかないとなればそれを使う。でもよそを見るともっとこういうのがあるからそっちのほうがいいなというものはあるんですが、あまり太過ぎないというのと、青刈りをするとどうしてもカビが生えて腐りやすくなってしまうので、青いものは極力刈らない。曲がったもの、特に根っこの曲がった

もの、あと弓なりになってしまったもの。これはたぶん乾燥の仕方が、立てかけておいた状態で固まってしまったものが多いかもしれないんですが、曲がっていなくて風すきがいいところで日当たりがよくて水はけがよければ、わりと風でこういう動きを繰り返して元に戻るんです。そうすると節が短くなります。節が長くなると風を受けない、周りも茅だらけ、中も茅だと風の影響を受けないので、スースー伸びてしまいます。ちょっとくぼんだところとか。そういうところは節が遠いんですね。そういうのはポキンと折れてしまったりします。腰がなくて硬そうだけど折れやすいとか、そういうものは使えなくもないのでいいんですけれども、やはり曲がっていないとか、太過ぎないとか、青くない、穂があるかどうか。穂があるかどうかというのは、刈り取った後の乾燥に影響するので、僕たちは穂のない茅は刈らないようにしています。

会場参加者：穂があったほうがいいんですか。

松澤：僕たちは水分が多い時期に刈るので、穂がない茅というのは乾燥がうまくできなくて、春見ても駄目なんですね。刈るときはすごくいい音がしていい茅だなと思って刈るんですが、上を見たら穂がなかったというやつは、やはり春になって選別するときによくないです。虫が食っていたり、いろいろな病気があると思います。穂をつけたまま乾燥させろというのは、結構あの辺では言われます。

あと地権者や地主にお金を払うというのは、相場がその辺であれば、例えばお礼で5,000円でも、１反歩ぐらいで5,000円というと多いような気もするし、場所によっては１把５円ぐらいだったりいろいろあるんですけれども、僕たちが今刈らせてもらっているところは、１把70円というお金を払っています。8,000把刈れば大体50万円ぐらい、100刈れば7,000円という計算になるかな。そういうお金を払って刈らせていただいて管理をしていただいているというところもあれば、年間どれだけ刈っても２万円ぐらいでいいよとか、そう言ってくれるところもあれば、刈ってもらえるならお礼なんか要らないよという人もいたりいろいろですね。特に決まってもいなくて。

茅の規格もその地によって結構統一化をされていなかったりして、僕たちも刈るときの大きさがそのまま屋根に上がってくるので、直接計算しないと、

例えば何尺締めとか、直径で20cm、25cmと言われても換算でしかできないんですけれども、大体30cmないぐらいが多いのかな、20cm～30cmぐらいの束が一般的かなと。あまり大き過ぎても重たかったりするので。大体20cm、25cmぐらいで1,000円前後、この価格も統一がないです。

上野：それは売値ですか。

松澤：売値です。だから刈る人がもらうのは、ススキでいうと大体300円から400円ぐらい。コガヤでいうと150とか刈る人もいるので、１日幾らみたいな感じになったりします。ススキの場合は１把300円で買いますとか、400円ですとか、その地によって200円とかもあるかもしれないですけれども、300円ぐらいがいいんじゃないのかなと思ったりします。これからの時代は400円近くとか。

会場参加者：それは乾燥したものの製品でですか。

松澤：それとか、例えば刈ってもうそのまま渡して、30刈ったら幾らもらって帰るみたいなやり方をするところもあれば、つけておいて、後でトータルして計算するところもあるかもしれないし。乾かした状態で届けて、いいのが幾つあったから幾らですねとやるところもあったり、いろいろなスタイルですね。軽トラで刈った分運んでお金になるところもあれば。業者が販売するときに、屋根屋さんが買う値段が800円とか、1,200円とか、1,500円とか、その茅によって全然値段が違うので、見積りに合わなければ使えないとか、でもしようがない、それで使うしかないとかあるんですね。やはり屋根の葺いている面積より材料のほうが足りないので、少しでもススキがあれば集めて増やしていってもらえたらと思っています。

会場参加者：九重の茅を乾燥させて製品をつくった

ら、買うような気持ちがありますか。

松澤：輸送費の問題で、僕たち長野県の茅しか使っていないんですね。でも、その地に近づけばそっちから買うとか、あとは今予約しないと買えないし、予約していても来年も駄目だ、再来年もあやしいとか、そういう状況が結構出てきているので、とにかく屋根屋としては材料をどう押さえるか。仕事はあるけれども茅がなければ仕事にならないとか。もちろん売ってくださるのであれば。

会場参加者：ちょっと頑張ってみます。それと一つだけ。先ほども前の会も出たんですが、カリヤスというのがどうも理解できないんですね。茅とカリヤス。

松澤：茅というのは屋根材のイネ科のものの総称を言います。茅という植物の名前はなくて、屋根に使うものが茅、それで葺いたものが茅葺き。ヨシというものもあれば、ススキにもたぶん種類があると思うんですけれども、あとはチガヤとか、カリヤスというのもその中の一種で、ススキとちょっと違うんですけれども、屋根に使う材料です。それは小谷にはものすごくあります。

会場参加者：カリヤスというのは、茅の種類じゃないんですか。

上野：茅の種類の一つです。カリヤスというのは植物名です。

会場参加者：そうですか。

上野：でも、そちらの茅はススキだと思います。

会場参加者：そうでしょう。だったらススキ以外は知らないです。

松澤：そうですね、ススキを一般的に茅と呼んでいます。

会場参加者：カリヤスは九州にはないような……

上野：聞いたことがないですね、標高が高くて日本海側の多雪地帯によく見られるようです。関西だと、美山の辺りでもあったようですけれども、九州ではくじゅうに限らずちょっと聞いたことがないですね。

　だから、みんなに「茅持って集まって」とここに集まってもらうと、みんな持ってくる植物は違うんですよ。全国それぞれの地域で、茅と呼んでいる植物が違う。屋根に使うものを茅と呼んでいるので。だからススキを持ってこられるし、ここはコガヤと言っていますけれどもカリヤスを持ってくるだろうし、ところによってはササを持ってくる地域も、北海道とか能登は、茅といったらササのところもあれば、ヨシ自体を茅と呼んでいる地域もあります。

会場参加者：分かりました。ありがとうございます。

会場参加者：九州にはカリヤスというのはないんですね。我々の地域では、やっぱりカリヤスと呼ぶんですけどね、それはヒメアブラススキをカリヤスと呼びます。細くて爪楊枝みたいな。

上野：ヒメアブラススキ、宮崎では？

会場参加者：それはものすごく少ないんです。だから非常に大事なところで、加工しやすい形が、そういう大事なところだけに使っています。だから私は草原も湿原も、茅もいろいろなところで使うんです。でも、そのヒメアブラススキというのは、中に綿が少しあって、カリヤスはほとんど綿がないんですね。ススキはありますね。非常に丈夫なんです、細くて丈夫なんですね。アブラススキは。だから大事なところだけに使っているというのがうちの地域です。

上野：では、ここから先は質問プラスこういうのはどうですかというのも加えていただくようにお願いします。アイデアつきでお願いします。

会場参加者：神奈川県から来ました。先ほどの皆さんと一緒で、群馬県のみなかみの上ノ原茅場の保全をしています。質問ですが、火入れをされている茅場が４か所あったんですが、刈り取りをされている箇所と刈り取りをされていない場所、またはできていない場所があるけれども、火入れは毎年されているということだったんですけれども、火入れをやめない理由というか、火入れはするけれども刈り取れていない理由というか、なぜ火入れはするのかというところを教えてください。

松澤：そうですね、火災の問題とかあるので、管理者はそれぞれ別ですが、山菜採りとかトレッキングで来たときに火災の原因になったり、そういうことかなと。毎年火は入れてくれているんですね、大変だ大変だと言いながらやってくれるので。牧の入も火事が怖いからと言っている方もいらっしゃるし、いい茅を育てたいからと言う方もいらっしゃるし、やはりワラビ採りがしたいからとか、いろいろな理由があるのかもしれないですね。

会場参加者：私たちのほうや全国的に山火事が怖い

から火入れはやめてくれという地区が多いのに、山火事が怖いから火入れをしてくれというのがあるのに驚きを覚えたのは文化の違いでしょうか。

松澤：あと小谷は雪がすごく降るので、全部寝るんです。立ったまま火をつけることはほぼないので。上のほうを燃やせば、もうそれ以上上には燃えるものがない状態をつくる。それで集めておいて上だけ燃やしてしまう。そうすると、ある程度下から燃やして大きな火になっても、飛んでいくことがあまりないんですね。

だから、特に無線を持たなくても、お互いの火の動き方を見ながらそれぞれが動き回ってできている。雪で寝る地域というのは火が入れやすいのかなと。あと時期にもよりますね。風が強い日は避けるとか。

会場参加者：ありがとうございます。もう一点、先ほどのつながりですが、私たちの団体は、先ほど言った首都圏から、生物多様性というか、水源の森保全ということで関わっているんですけれども、もともと地元の人や入会の仕事が残っていた箇所に入っていって、地元の方と協力して茅刈りをして、毎年買っていただける業者があったり、卸先が決まっていて茅の確保がボランティアながらしなければいけない状態ですが、そこでさっき言った高齢化により地元の人が手薄になり、協力していた地元の人が高齢で一緒に活動できなくなって、次の世代の若者にいざなったときに、今振り返ると来てくれるのは首都圏の人で、地元の若者がついてきていないという現状があるんです。そこをどうにかしなければいけないなというのがあって、先ほどのインストラクターとか、今、松澤さんの話でいいなと思ったのは「森のようちえん」のお母さん方を呼んでみるのもいいのかなと、ここに来て一つアイデアをもらったなというのがあるので感謝しています。

松澤氏：お母さんたちで、もう行きたくないと思った人は１人もいなくて、みんな気持ちよかったとか、楽しかったとか、また来たいとか、もう仕事もされているから行けないけれども、「イベントだったら行くからね。いつやるの？」とか、そのぐらい楽しんでくださって、すごく一生懸命やってくれて、満足して帰っています。この人何だろうというぐらい、女の人のほうが感じやすいのかもしれないですね、茅刈りの気持ち良さとか。

会場参加者：ありがとうございました。勇気をもらいました。ぐいぐい行ってみようと思います。

会場参加者：早稲田大学からきました。この会については、朋典さんが今年の６月に大網でうちのゼミにレクチャーしていただいたときに教えていただき、お誘いをいただきました。私は地域社会学を教えているんですけれども、ゼミ生と共に十数年、小谷村が大好きで毎年やって来ています。

昨年は松澤敬夫さんに牧の入で茅刈りを教えていただき、今年の６月には朋典さんにレクチャーしていただきました。それ以前から、真木集落で共働学舎の皆さんに茅場に連れていっていただいて、ここ３年ほど学生と共に急斜面の茅場、それから平たい茅場をいろいろ経験して、学生も非常に喜んで、私も非常に面白かったです。

今ちょっと発言しようと思ったのは、先ほども入門者、関係人口を増やすのが重要だとおっしゃっていたんですけれども、私も含めて私たちが茅刈りを経験させていただいたときに、ものすごく感動したことがあるんです。それを今思いだしたのでぜひお話ししたいんですけれども、さっきメリットは何だという話もありましたし、涼しいからというのもありましたが、初心者にとってのメリットは、もちろんお母さんたちもいいと思うんですけれども、束ができますよね。初めて経験しているんですけれども、この茅は必ず茅に葺かれるのであると。だからこれから全国のいろいろな茅葺き屋根を見たときに、その中に自分の刈った束が入っているんだということを、共働学舎さんにも言っていただいた気がしますし、敬夫さんにも言っていただいた気がします。それは小谷のあちこちで聞いた言葉です。それはすごく驚きなんですね。

今日朋典さんのお話を聞いていて、私も感じたんですけれども、茅葺きの技術、茅葺き師としての技術もものすごくプロフェッショナルじゃなければいけないのと同時に、材料集めも、違う仕事であるにもかかわらずいろいろな人をリクルートして頑張っていらっしゃって、やはり茅刈り、茅葺きの総合力というか、今AIにぶっちぎられるようなものの対極にある総合力、それがたぶん、「あなた方の刈った茅が必ずこの茅葺き屋根の中に使われて、しかもそれが50年、100年使われているんだ、あなたが死んでも使われているんだ」と言っていただいたときに、学生も私も本当に驚いて、しかも刈るのは簡単にできるんです。気をつけて混ぜないようにすれば。簡単だったのに、それが50年、100年、自分の仕事がこんなに残るんだと。

それは論文を書くよりもはるかに簡単なんですね。お母さんたちも、子供たちが大きくなったときにそうやってこの茅の屋根を差せるだと言うと、たぶんすごく感動すると思うんですね。

ですので、関係人口、飲料水源ということもありますし、いろいろな動機づけは仕方が必要だと思うんです。それで私が感じたのは、特に初心者にとって、初めてやった人が感動したのはそれですね。あなたのやったこと、本当に簡単な仕事が50年、100年残るものになって、しかも目に見えるということですね。今、家族のやっている仕事でも現場が違うから目には見えないじゃないですか、仕事の成果が。だけど、やった仕事と長く残るということと、自分で目に見えるし、ほかの人にもしゃべることができる。だから真木集落に行ったら、「あれはあの年にうちのゼミ生と一緒に刈ったやつなんだ」みたいにお話ができるというんですか、そういう動機づけの仕方もあるのではないかと思いました。

それで、この後に提言とかされるそうなので、いろいろな提案を出さなければいけないと思うんですけれども、やはり総合力を日本人の中でとか、特に子供たちやお母さんたちにかき立てる。そのときにたくさんの動機づけのオプションを持っていなければいけなくて、さっきの飲料水源もそうですし、金になるという話も当然でしょうし、特に関係人口を増やさなければいけないという話がありますから、そのときに、私たちは感動したのでこれはいけると、殺し文句の一つになるんじゃないかなと私は思います。

ですので、教育力という点で、総合力をいろいろな生態系の知識であるとか、それから瞬間的な感動を呼び起こす。本当に50年、100年残るんです。伊勢神宮のそういうところに残るわけです。私が刈ったやつがそうなるとは思いませんが、小谷に来ればそれがあるじゃないですか。それはものすごくロマンをかき立てるというか、世代を超えたストーリーになると思うんですね。

ですので、私が言いたいのは、今日いろいろな首長たちが来ていますね。基本は最初は来るけれども、次はお金を出してあげなきゃ駄目なんです、若者には。最初は先生と一緒に来るけれども、次に行くかと言ったら、やることがいっぱいあるから、お金を出してあげなきゃ駄目ですね。お金を出すというときには、教育力であるとか、生態系の何かというと、申請書を書かなければいけないじゃないですか。その申請書の書き方であるとか、ネタが、もっとタイプを増やして、こうやって勉強して、どういうふうにつながっているかの書き手側の思いを理解して、それでいろいろな教育力であるとか、生態系とか、いろいろな形でたくさんのネタをもっと育てて、ナショナル・トラスト的に、今回はどうしても理解系、生態系の話が多いと思うので、これは自分たちのやったことが自分たちの財産となって、次の世代に伝えるというのは、ナショナル・トラストの一つだと思うんです。

ですので、草原サミットであるにもかかわらず、ナショナル・トラスト的な発想とかそういうことがないことに驚いているんですけれども、ナショナル・トラスト的にすることの中の一つに、そういうコンセプトをもっと強く入れることの中の一つに、教育力であるとか、そういうふうにしていろいろな形で、朋典さんがやっているリクルート力をもっとつくっていくというか、そういう感じがしました。

そのときの1発目の殺し文句が、「あなたの刈った茅が100年後ここにある」みたいな、そういうことじゃないかなと思いました。

上野：皆さん、ありがとうございました。時間がもう５時間ぐらい欲しいところですが、まとめの時間になりました。

まず、皆さんの話と朋典さんの話の中で、最初のほうにあったかと思うんですが、まず、茅場の保全

のために保全をしているわけではない。「使って育てる」ということが一つのキーワードかなと思います。それは山も草原もですが、利用して使うことでそこが保全されたり、山で言うとちょっと残しておいて、全部使うのではなくて少し頂いてとか、段階利用が必要だなと。林業の人が残したものをこれには使える。茅も、茅葺き屋根だけといったら、曲がっているのはちょっととか、真っ直ぐなものじゃないととなるんですけれども、もう少し段階的利用が何かないかなと。今、茅には茅葺きしかないということだと、なかなか……、それも一つかなと。

そのために、まず茅を刈らないとというのは、保全のためにも利用のためにの両方必要なんですけれども、そのメリットというのは、昔で言うと、自分のところも茅葺きで、あなたも茅葺きで茅葺きの助け合いだったんですけれども、それが得るものが気持ち良さの人もいたり、子育て世代の一つの悩みを分かち合えるコミュニティーの作業をしながらおしゃべりする場にもなったり、そういう新しいコミュニティー、茅葺きはそういう場にもなるという、茅と茅葺き両方ですが、共同作業なので、みんなでやるということで、得るものは自分のうちが茅葺きというだけじゃないところ。それがある人はウィンタースポーツという、トレーニングとか難しいことにチャレンジしたいという面白さ。ストレス社会の中で心地よいというものが一つあったり、自分も茅葺きに住みたいということももちろんあるでしょうし、自分たちが何か関わったという、茅葺きに葺かれるという喜び、自分も関われる喜びの一つかなと思うんですけれども、そのメリット、最初に問いかけていただいた茅葺きのメリットは何ですかというようなこと。これだけ環境にもすばらしくて複合的な恩恵がたくさんあるのに、うまく共有されていないというのがあると思うので、茅刈り、茅葺きをもっと、茅葺き建物の話だけをしているんじゃないというところをもっともっと広く捉えて、もともと持っているものなのでそれは。

それをそれぞれの人に、関係人口はどこで引っかかるかというか、裾野が広いところがあると思うので、そこに広げていくことが、何か当たり前のようでそれができていないのかなと、皆さんの話を聞いて思いました。

松澤：周りに茅刈りとかがあればどんどん参加していただいたり、何をスイッチにされるか分からないんですが、景色とか、野草とか、虫とか、好きなものがいっぱいある中で、どれかがヒットすれば、一緒に働くとか。だから、誰でもできて、ただ経験を積めばできるようになる。茅葺き職人は茅刈りをする人は少ないんですが、今、住んでいる方、茅葺きを持っている方が本来は集めて用意してもらうものですが、それを集めることが省かれてくれば、その分自分たちで集められれば、その辺に生えているものと思えば安くできるというふうにつながっていくので、何かいいことがいっぱいつながるきっかけに、茅刈りにも参加してもらえたらと思います。

上野：「使って育てる」が一つ大きなキーワードかなと思います。

11月23日、24日に茅刈り茅葺きワークショップを京都の美山でやります。これは一般に広く受け継いでいくための一つの地域、茅葺き集落で茅刈りをやって、茅葺きを学ぶということをやれます。どなたでも参加できますので、早速これから始めてくださる方がいてもいいかなと。あとは小谷に来てもらってと思います。

みなかみも茅刈りワークショップが間もなくあります。10月26、27日、標高が高いから小谷と重なる時期ですが、全国でここが一番早いので、ずっと10月末から茅刈りシーズンが南に下りていきます、茅葺き文化協会のほうのFacebookページで、全国でこんなところでやっていますというのをこれから載せますので、そういうのも見てください。やはりそういう情報のプラットフォームもまだまだ充実していないところがあるので、その辺も課題かと思いました。

きっと関心はいっぱいあるのに、きっかけが得られていないというか、発信がうまく伝わっていないなと思って、井田先生も言っていましたけれども、今日来てくださった方は、御自身で茅刈りをしていただくか、３人の周りの人に今日のことを伝えていただければと思います。第２分科会「茅刈りと茅葺きを未来につなぐ」ということで、これで終わりたいと思います。

第14回 全国草原サミット・シンポジウムinおたり　～つなげよう 茅場(かやば)が育んだ技術と命～

第３分科会

「草原の管理技術を学び伝える」

東京農業大学地域環境科学部　教授　武生雅明 氏
親沢北観光委員会　栗田 優 氏
雨中林野組合　荻澤 隆 氏

武生雅明：では、分科会を始めさせていただきます。この第３分科会の座長を務めさせていただきます東京農業大学の武生と言います。よろしくお願いします。

何でまた東京農大の教授がこんなところまで来てと思われるかと思うんですが、私は、2003年に農大に勤めてからずっと、北アルプスの高山植物の研究をしておりまして、その関係で白馬村の八方尾根の研究をしていたんです。あるときに、小谷村の風吹岳に調査に行ったときに、池原の集落を通って石坂を通って北のほうに抜けて風吹岳に登ったんですが、びっくりしまして、池原という集落が本当にきれいだったんですね。春に来たものですから、春植物はきれいだし、里はきれいだし、それまでは、小谷村に来ても国道を通るだけだと集落が見えなくて、ここにはどんな集落があるのか、何もないんじゃないかと思い込んでいたのが、一段上って見ると、本当にきれいで魅せられて、それ以来ずっと通うようになりました。2011年からは、この対面に見える辺りの伊折という集落に１軒うちをお借りすることができたので、そこを研究拠点にして、もうずっと毎週末通うような感じで研究をしています。

今日はその関係からこの分科会の座長を引き受けることになったんですが、この分科会では、茅場を維持していくにはどうすればいいかという、それを一つのテーマとして話をしていきたいと思っています。

先ほど見たんですけれども、約30人の参加者がいらっしゃいますが、小谷村在住の方は６名ぐらいで、残りの方は他地域からですが、小谷村に来たことがある方はどのぐらいいらっしゃいますか？

案外おられますね。ありがとうございます。小谷村という村は、先ほども話したとおり、山あいの集落の村ですが、こういうトタンは載っていますが、今でも昔ながらの民家がたくさん残る、そういった景観の地域です。本当に人の生活と自然が調和して大変美しい景観が今でも維持されている、そんな村です。里を背景にして、後ろに北アルプスの白馬三山が見える、そんな地域です。

僕が最初に入ったのはまさにこっちですが、白馬岳を中心として、白馬鑓ヶ岳の山頂には石灰岩があったりして、国内でも大雪山と南アルプスの北岳と並ぶ高山植物のホットスポットで、本当にものすごく種の多様性が高い、そんな地域です。生き物屋からすると、この地域はそういう目で見られる場所です。それと同時にスキーリゾートの地でもあります。

地形的に見ると、これは赤色立体図という地図でちょっと誇張していますが、この村の真ん中をフォッサマグナが通っています。フォッサマグナの東側は丘陵帯、西側は北アルプスの造山帯の末端になるんですけれども、東側のほうはこの丘陵がずっと続いていくという形になります。フォッサマグナでぼろぼろになった地質で、雪がたくさん降るので地滑りがものすごく多発します。この平らな部分が地滑りの土砂の堆積です。この地滑りで崩れた堆積

地に集落が形成されているというのが小谷の集落のつくられ方です。東側はこの小さいところにたくさん集落があります。

一方で西側は、地滑りの規模が大きくなります。こんな感じででっかく崩れるというのが西側のスタイル。地形の規模も大きくなるのが西側。小谷では、東と西でかなり景色が変わるし、土地利用も変わってくる、そんな地域だと理解していただきたいと思います。

今日話題になる牧の入茅場やショクの茅場はどちらも西側に位置する茅場になります。こんな地滑りが発生する地域なので、昔から自然に対する信仰が厚い地域で、村の中のあちこちにたくさんいろいろな神様がいるというのも一つの特徴です。今でもほぼ毎月のように何らかの神様のお祭りが各集落で営まれる。地の神様の祭りが営まれる、そういう地域です。

地滑り地形の地域での土地利用というのは、大ざっぱに言うと、最初に言ったように堆積面に集落ができて棚田ができます。この急傾斜地は昔は刈敷や柴地で使われていて、尾根のてっぺんにようやく茅場、さらに遠く離れたところに薪炭林がつくられるという土地利用が発達していたようです。集落周りは、今は杉林ばかりですが、ほとんどが草原だったという景色だったようです。

この小谷村で僕が最初に魅せられたのはこういう風景で、棚田がすごく発達しているんですけれども、棚田の土手に春に行くと黄色い花がいっぱい咲いているんですけれども、タンポポのように見えたのが全部福寿草です。こんな地域はなかなか見たことがないんですが、この村では当たり前のことで、どこへ行っても福寿草がじゅうたんのように咲いています。これはエンゴサク。これはミミナグサと言うんですけれども、関東ではオランダミミナグサという外来種に全部置き換わりましたが、このぐらいでは、まだ普通に在来のミミナグサが出てくる。これも結構僕は度肝を抜かれました。

生き物屋は、普段誰も注目しないかもしれないんですけれども、こういうちっぽけなことに超感動して、ここしかないと思ったりするわけです。普通にカタクリのじゅうたんも見ることができるし、春になるとこういう春植物、これはキクザキイチゲとか、アズマイチゲとかというのは、林内をじゅうたんのように覆う、そんな美しい村です。

もう少し紹介させていただくと、スキーリゾートが発達しているわけですが、日本では先駆けとなっている地域で、昭和30年代後半には栂池など大規模なスキー場開発が行われています。平成５年、1990年代前半の最盛期で観光客数は200万人を超えています。今も、だいぶ減ったとは言っていますけれども、100万人近いということです。そのぐらいですよね、栗田さん。まだ100万人を切っていませんね。

栗田：はい、切ってないです。

武生：例えば、屋久島が世界自然遺産に登録されて、オーバーツーリズムだと言われたときに、僕はちょっと相談に乗ったことがあるんですけれども、そのときの人数が30万人でした。だから、オーバーツーリズムだと屋久島が騒いでいるときに、小谷村はその３倍以上の観光客が来ているという、規模から考えて分かるんですが、国内でも有数な観光地の一つです。白馬に隠れているところはあるんですけれども、実はそういう一大リゾート地の一つです。

ただ残念ながらスキー場の開発が進んでも人口はどんどん減って、昭和30年代は8,500人ぐらいいたのが、今では3,000人を切って2,600人ぐらいの村になっています。たぶんこれが今日の一番大きな課題、どこでも同じですけれども、過疎と高齢化が進んで担い手がいなくなっているということです。

この地域の土地利用をちょっと追いかけてみます。小谷村全域はちょっと無理だったんですけれども、南小谷地域ぐらいを対象に土地利用の図面をつくって見ていったものです。

これは1912年、明治の迅速測図（じんそくそくず）という地図から起こしたものです。そうすると、明治の時代には小谷村全域に、黄緑色が茅場ですが、茅場があるんです。姫川の東側にも小規模な茅場がたくさんあります。一方で、西側のほうはかなり規模の大きい茅場がたくさんあるんです。ちょっとこの図面には入っていないんですけれども、この辺に牧の入茅場があります。ここに見えているのは乗鞍のスキー場とか、コルチナのスキー場の辺りの茅場ですが、西側はやはり規模の大きい茅場で、明治の段階からあるというのがこの地域の特徴です。

45年、戦後間もない頃の米軍の写真を見てみる

と、東側はこの辺にあったはずの茅場がもう全然ない。昭和20年、戦後間もない頃に姫川より東側の茅場はほぼなくなっている。西側のほうも、里に近いほうはもうだいぶなくなっているんですけれども、山の上のほうは維持されているという状況です。

若干変なところがありますが、これは乗鞍のスキー場の周辺ですけれども、戦後間もない頃は、写真では草原ぽく見えないんですけれども、70年代の写真を見るとちゃんと草原で、これ以降ずっと西側のほうの草原は、スキー場ということもありますけれども、ずっと維持されているというのがこの地域の土地の歴史ということになります。

実は、小谷村の茅場は、今回の「草原の里100選」に選ばれたのはショクの茅場と牧の入りだけではなくて、この全域ということで選ばれているんですが、本当にこの辺のコルチナスキー場周辺や乗鞍ス

キー場の周辺にも良質な草原が広がっていて、西側一帯では、今でも広い面積で、良質と言ってもいろいろありますが、僕から見ると非常に豊かな草原が結構広い面積でしっかりと維持されている、そんな地域になります。

今日何度も聞いているかと思いますが、カリヤスが使われています。カリヤスという植物を、僕は今注目して研究しているものですから、少しだけ紹介させてください。大きく見ると、これがカリヤスの分布地点の図です。主に日本海側の北陸域に分布するのがカリヤスという植物です。一番上、ａのほうがオオヒゲナガカリヤスモドキという種があります。これは全然別種ということが最近分かっていますが、最近の宮崎大の西脇先生などの研究によると、まさにそこの稜線で分布が分かれていて、小谷村側はカリヤスで、妙高に行くとオオヒゲナガカリヤスモドキになるということが分かっています。だからここは、カリヤスとオオヒゲナガカリヤスモドキの境界になるんです。

オオヒゲナガカリヤスモドキのほうはそこから新潟のほうに分布が広がっていますけれども、文化圏としては、先ほど来出てきましたが、新潟と小谷は近いので、この周辺はカリヤスなのかオオヒゲナガカリヤスモドキかは関係なく、両方を茅葺きで使っているという分布が見られる地域になります。ちょうどここが境界域です。

もう一個はカリヤスモドキと言うんですけれども、カリヤスモドキは太平洋側から九州に分布しています。これは、例えば阿蘇の山頂とか火山の山頂域にそういう種です。

カリヤスの自然分布がすごく気になって、北アルプスなんかを結構歩き回って、どういうところにカリヤスが出てくるのかを調べてきたんですけれども、そうすると白馬村の小日向のコルというところからちょうど鑓ヶ岳に登る途中なんですけれども、そこに蛇紋岩の露出地があって、傾斜40度を超えるような蛇紋岩のなだれ斜面で、完全に蛇紋岩が露出するような、そういうところにカリヤス草原の自然草原ができます。

日本海側へ行っても同じで、蓮華温泉の奥に回り込んだところにも蛇紋岩の露出地があるんですけれども、この蛇紋岩の露出している崩壊斜面に出てくるのがカリヤス。カリヤスという植物は、本体は亜高山帯から高山帯の蛇紋岩地のなだれ斜面の植物になります。これはどういうことを言っているかというと、蛇紋岩というのは重金属をたくさん含んでいたり、リンが少ないということで、超貧栄養で毒性の強いところに生育する植物なんですね。そこになだれが来るように頻繁に壊される。貧栄養で壊される場所に生育するのがカリヤスという植物です。

それをこの地域の人たちはわざわざ使ってきた、ある意味山から取ってきて使っているのかもしれないんですけれども、だから本来は他種、他の植物との競争にものすごく弱い。そういう植物を使っているということになります。だから、ある意味人が頑張って刈って燃やしてというような形で維持をしないと、カリヤスというのはなかなか維持ができない。しかも、カリヤスの草原をこれだけの面積で維持するというのは相当大変なことだと。普通のススキと比べて圧倒的にカリヤスの草原を維持するのは

難しい作業だと、僕などは自然のところから感じるところです。

毎年こうやって刈取をする。刈取をするのはすごく大事で、貧栄養にする、もともと生育地がものすごく貧栄養なので、刈って持ち出す、栄養を残さないというのがすごく大事で、それを茅に使うということも大事なことになります。これまでの基調講演に始まってずっとそういう話をしているかと思うんですけれども、どうやってこのカリヤス草原を維持するかというと、結局刈って出して焼くと、この行為をどうやって続けていくかということがポイントになってきます。

今日は千国の牧の入茅場の維持に尽力いただいている親沢北観光委員会の栗田さんと、雨中ショクの茅場の維持をされている荻澤隆さんに来ていただきましたので、その辺の苦労話とか、昔話も含めて、どうやって頑張って維持してこられたのかといったところをお聞きしたいと思います。

栗田：ここから、１kmちょっと下ったところに千国という集落があるんですけれども、そこの栗田優と言います。もう一人栗田がいるんですけれども、その人のほうが、実はこの関係の責任者ですが、年を取っているので、古いことなので話してくれと言われて私が話をします。

もう先ほど来ずっとこの茅場の話が出ているので、たぶん飽きてきているんじゃないかと思いますので、関係のない今まで話したことではない話をします。

実は、この茅場の周りは森林帯です。雑木がいっぱいあります。これは炭を焼いたり薪を切ったりする林です。この茅場の管理で一番厄介なのは、実はこれ(火入れ)です。先ほど来、火つけの話をしてくれと言われたのですが、一番は安全にどう燃やすかということでやっているんですけれども、組織とすると、僕らの地区、千国が一つ、これが半分くらいの人数です。それから峰・立屋という地区がこの辺にあって、二つの地区に分かれて地区の運営は違っているんですけれども、財産区が一緒です。

昔は１年おきに、千国の人が焼く、次の年は峰・立屋の人が焼くというふうに交互にやっていたんですけれども、ここ近年、やはり人口が減ってしまったものですから、もうその一つの地区ではとてもこの仕事ができないということで、今は一緒にやっています。

この作業の責任者は誰かというと、これが一番元ですが、年番という、皆さんの地区へ行くとその年の当番の人がいると思うんですけれども、年番という人たちがこれを仕切ります。年番が仕切ることは、この茅焼きと、道普請と言って、道の荒れたところを直したり、草を刈ったりする、堰を直す。そんなような仕事がこの地区に住んでいる人の義務なんですね。これもそうなんです。

これは、先ほど話がありましたように、50年ぐらいで葺き替えますから、自分が葺き替えていく間にまたどんどんやっていくのでつながっているんですけれども、正直言って、昭和40年ぐらいに地区の人が葺き替えて、去年葺き替えるという話があったんですけれども、残念ながら、いろいろやってみたんですけれども葺けないということを言われて、その家はトタン葺きにしてしまいました。ということは、もうこの地区はこの茅を焼く意味がなくなります。

私どもも一番思っているのは、焼くというのは大変なことで、義務人夫ですから、各家で１人ずつ出てくるんですね。でも高齢者が多いので、今はもう出てこられない人は出てこなくてもいいよと言うんですけれども、その代わりほかの仕事に、例えば１年のうちに違うところの雪囲いとか、何かあったときにそこに出てくださいと言うんですけれども、一応義務人夫なので出てきます。そうすると、去年、最後のうちが屋根を葺けないと言われてしまったので、たぶんこのことは今度は何か違う意味があればつながっていくかもしれませんけれども、考え方は変わってくるだろうと思います。

焼き方ですが、一番は、まずその年番の人たちが集まってどうしましょうという話を春に決めます。

随分昔は雪の消える側から細かく焼いていく焼き方もあったみたいです。この頃はこういう焼き方でなくて、今は結構大勢の人が集まって、これは線が入っていますが、これは防火帯ですが、昔はこれがなかったんです。こういうのができてきたので、例えば千国だと五つのまとまりがあるんですけれども、その中でその年番の人たちで決めて、じゃあ自分たちはどこの辺をやると決めて焼いていきます。

ずっとこれは上じゃなくて１周するようになります。何かというと、外を焼いて外に出さない。中に

向かってみんな火をたいていく。もちろん火は上に延びますから、上からやっていっても下からでも焼き上がっていくんですけれども、大体がずっと尾根っぷちから周りを刈ります。そして先ほど話したように、この奥のところや脇の林の中に火が入ってしまうと大変で、実は何回も入ったことがありますが、入ると大変なので、今はそういうやり方をしています。

それから、この焼き方そのものは別に決まりがあるわけではないです。皆さん見よう見まねで、自分が安全なところにいて、この火を燃やすとどこに火が行くか、そんなことは分かっていて、上の人が焼き切っていないのにこの斜面に(火を)つけたら大変なことになってしまいます。そんなことは誰が伝えたわけでもないですけれども、何年かやっているうちに学んでやっています。

これも下に下りてきたときに一番最後につけるんですけれども、余談を申しますと、昔は僕らも若いので上のほうをずっと焼いてくると、結構長老で年数のたったキャリアのお年寄りがいると下から火をつけてしまうんです、待ちきれなくて。そうすると、上にいる人たちは大変なんです。逃げなきゃいけないし、林に入れたら大変だしというのは何回も経験しました。だから完璧にルールがあって、このやり方をすればうまく焼けるよというものはそんなにないと思います。

それから、周りの林の話ですが、実は里のほうというか、脇のほうは雑木のコナラとかいろいろな林ですが、この上に行くと植林とか官公造林で植えた林があります。ですから、もともとはここはそういうふうにしようと思えばできた土地ですが、先ほど話がありましたように、ここもやはり２軒分です。１軒が大体１万3,000把です。２軒分の2万6,000把ぐらいがここで取れます。ですから、それは春先に、今年はうちをやるよと、丸葺きというんですが、丸葺きをやりたいんでと申し出て、春のうちに相談して決めて、じゃあ今年はこのうちとこのうちと決めて、その方たちのためにみんながやります。

先ほども話が出ましたが、大体朝３時から集まってやるということで、昔は目覚まし時計がなかったせいか、僕が聞いている話だと、その親戚の人たちが各家を３時に全部回って、「お願いします」と。それで全員が上がっていくと。大体暑くならない前に一段落して、日が入る前にはやめたと。

大体１人で刈る束が200把。それも刈る人が10人で、縛る人が１人いて縛っていく。縛ったものは「タテ」と言うんですけれども、そこに立てて干すんですね。最終的にそのタテを今度まとめてきて、「ニョウ」と言って大きな茅のうちにします。それが秋口までにタテをつくって干して、雪がだんだん解けて見える頃になると、雪の上を茅ぞりと言って、茅の上に乗っかってずっとこの下まで、これは斜面ですから持っていってやってきます。それをニョウにします。

この地区は面白い地区で、谷あいの地区なものですから、周辺に四つ、それから川の反対側に二つ、架線を谷から谷へ線を渡して、そこへ持っていって架線で他地区へ持っていったという感じです。

そんなことで集めて屋根葺きに使っていたわけですけれども、先ほどの先生方の話を聞いていると、こういうことそのものが、大切なことだというのは分かるんですけれども、たぶん今までの経緯の中でも、何でこのことが残らなかったかといえば、やはり後継者の問題だと思います。

僕は30年ぐらい生きたいなと思っているんですけれども、なぜかというと、たぶんこの地区は３分

の１ぐらいの人口になってしまいます。もう高齢者だけのうちもありますし、いろいろな事情のうちがあります。そうすると、こういう今の集落社会がどういう新しい形態になっていくのかなと思ってはいます。それが茅焼きの問題です。

それから、先ほどの茅の話を少ししますけれども、この辺の茅は、一番先に刈る人は土用、ここでこの茅を先に刈ります。それが大体１日、延びて１日半ぐらいらしいんですけれども、その後開放して山の口を開けて、今度は自分で刈りたい人が刈っていきます。屋根の茅はこういった茅ですが、使った茅は何に使ったかというと、一つは先ほど暖房という話もあったんですが、僕が聞いているのは、雪が多いものですから、壁がみんな土壁なんですね。その土壁を守るためにずっと家の周りを、これは遠野なんかに行ってもみんなうちの周りに巻いてあると思うんですけれども、そんなのに使った。それから、堰があってそこに用水があると、そこが雪で埋まらないために、細木を使って茅を当てていくという、雪囲いとして使った記憶は僕はあります。

それが終わると、昔は大根を洗ったりするときに敷いたとか、ハエウリのところに草が出ないように茅を敷いたと。最終的にその茅は腐らせて畑に入れたというのが、うちで使っている茅です。あとは、さっき先生が言った「やこぼし」というのが出てきましたね、家を壊して。それが古い茅ですけれども、近年は結構燃やしちゃいましたけれども、それまでは肥料に使っていたみたいです。あとは、先ほどちょっと話が出ましたが、ここは焼くと後にワラビが出てくるので、ここを焼いた後に楽しみにしている人はワラビ採りに入ります。もう燃えて何もなくワラビだけしか出ていないので、非常にここはいいかなと思っています。いずれにしても、集落的にももう目いっぱいでやっているので、どんな形でこれがつないでいけるか、また何の目的をもってするかというほうが、地元でこれをやっていくための一つのエネルギーというか、このためにやるんだよというのがないと、なかなか難しいかなとは思います。ただ趣味的にやるのだったら、焼きやすいところを焼けばいいんですけれども、それではどうなのかなと思います。

それから、今、茅を持っていってくれるところは、松澤さんも２年ほど刈らなかったですけれども、ここのところまた刈りました。それから、ここに共働学舎さんという組織があるんですが、共働学舎さんは毎年刈っています。先ほど昔は東山に茅場があったと言ったんですけれども、真木という場所、昔、緒形拳さんの「楢山節考」という映画がありましたが、あそこで共働学舎さんは農業をやっているんですけれども、そこに民家があって、その茅を葺くのに、ここから何キロもしょってあの山を上がって持っていっています。ですから、使ってくれている人はそんなところかなという現状です。以上です。

武生：貴重なお話ありがとうございました。なかなか聞いていただけでは複雑な話だと思いますので、資料をお配りしました。資料の中でどういう組織運営をしているかとか、今どのぐらいの人数がいるとか、構成者というのを一通りまとめていますので、もし御質問があるときは、この資料を見ながら聞いていただければと思います。次は、雨中ショクの茅場の代表で、荻澤さん、お願いします。

荻澤：今、紹介いただきました雨中の荻澤隆と言います。よろしくお願いします。うちの茅場は、37人の共有地ということになっています。雨中というところは面白いところで、昔から集落があって住んでいた人というのは、今の37人ばかりじゃなくてもっと多いわけです。というのは、経済の発展に伴いまして、雨中は国道沿いにありますので、村内各地からいろいろ商売を始めたりする人が移り住んだ、そういうチームでもあります。ですので、牧の入さんとは違って規模的にも面積が少ないですので、火入れするときにも人数的にはもっと少ない人数でやっております。

やり方は全く同じで、上のほうから、どちらかというと森林に移したくないところをまず先にやって、それからどんどんと下に広げていくというやり方です。林野組合のほうは、組合長がいますので、組合長、副組合長、それと会計、それぞれ班長があったりして、その中でいろいろ日程等決めて行っております。

火入れのやり方については、もう皆さん画面を見ていただいて分かるとおりなのであまり詳しくは言いませんけれども、どちらかというと、この林野組合、少し前の組合長の頃、このままだとなかなかみんな組合員が年を取って成り立たなくなるというこ

とから、もっと新しい組合員を増やしていこうという方針転換をしました。

ですので、村外へ出て行って名だけの組合員に対して、ぜひ権利を組合のほうに売ってくれないかと。組合のほうで買い取って、新しく雨中地区に住民となってきた人たちにその権利を買っていただいて、新しい人を入れながら、今やっています。ですので、今37人の共有地の中でも組合が買い取った権利が９件ありますので、実際には残り28あります。そのうち９人が森林組合ですので、約30％以上の方が新しい組合員、そんな形になっています。ですので、確かになかなか維持するのは難しい中でも若い人たちも増えてきて、まだ５年、10年ぐらいはいいのかなと思っていますが、資料のほうにも書いてありますけれども、最終的に、そうは言っても60代、70代が圧倒的に多いわけなので、これからの維持管理が非常に厳しいのかなと感じております。

この茅場は、昭和40年頃に茅屋根にみんなトタンをかぶせて、茅を使わなくなった。その頃になってもずっとこの火入れの作業は続けてきています。

昭和46年に今のコルチナスキー場が開発されまして、この今燃やしているところもゲレンデになって、最終的にゲレンデになっても、一応組合のほうでもって火入れの作業はずっと続けてきたという経過もあります。ただ、ゲレンデになったので、茅屋根の材料としては使い方は少なかったんですけれども、スキー場として全体的に茅を刈ったと、そういう意味では茅刈り作業というのは、スキー場のほうでやってきたという経過がございます。

最終的に地区もお祭りをはじめいろいろな行事があるんですけれども、なかなか若い人たちが少なくなってきて大変だと。それはどこも皆同じであります。私もここの地区に移ってきたのは高校時代でしたので、新しく組合から権利を買って加入した１人でもあります。そんな中、私が住んでいたのは東山というところでありますので、そこは先ほど牧の入の皆さんが言ったように100軒もあるようなそんな大きな集落でなく、大体15軒ぐらいの集落が点在していたわけです。それが大体80軒、90軒ぐらいの集まりをもって、それぞれの茅場の維持管理をしてきている。それぞれ茅を刈って、最終的にはそれぞれの集落で、今年はこの地区の誰それが茅を葺きたいと言っているからということで、そこに４集落から５集落の皆さんが茅を持って集まっていたようなことであります。

そういうことでありますので、茅屋根の文化というのは結（ゆい）の世界だったんですね。お互いに助け合うという。それがもう完全に茅屋根がなくなってからは、そういう文化もなくなってしまったというところが一番寂しいところかなと思っています。

昔は農業にしてもほとんど手作業でやっていて、それぞれのうちで子供たちに、例えば縄の結び方からいろいろな作業の方法を教えていたんですけれども、今はそういうことはほとんど機械化されてない。そういうことは、逆に言うと、いろいろ小谷の伝統文化というものをつなぎ留めることができなくなりつつあるのかなと危惧しております。

この雨中地区は役場という大きな存在があるんですけれども、その地区でさえ、今、老老世帯、それから若い人たちがもう帰ってこないだろうという家が散見されます。この茅場の火入れもそうですけれども、どうやって維持していくかというところは非常に大きな課題になっています。これは地区としても非常に心配なことで、空き家ができたときに、そこにどういうふうに人に入ってもらうか。それを地区として全体で考えていかないとなかなかできないです。これは行政のほうの村でも、当然空き家対策はいろいろやっているんですけれども、地区ごとに文化も違うし、同じ小谷の中でも考え方が違う。雨中みたいに、昔から外からの流入の多いところはウエルカムで迎えられる姿勢があるんですけれども、そうでないところもありますので、行政とすればやりづらいところもあるんですけれども、逆に雨中地区としたら、どういうスタンスで新しい住民を呼び込むかというところを、やはりこれから考えていかないと、この茅場の維持もなかなか難しいのかなと

思っております。

私が東山にいた頃は、堰普請というのがあるんですけれども、この西山のほうに比べて非常に水が少ないところですので、昔の人たちが、３km、５kmという長い堰をつくって、その維持管理だけでも非常に大変なことです。私がまだ中学とか高校の頃、おやじがいないときには代わりに学校を休んで堰普請に出ました。そのときに、鎌の研ぎ方を教わったり、いろいろパイプやなんかをふせたりしますので、そういうときの作業の方法だとか、番線をシノを使って締める方法だとか、トラック結びだとか、そういうのをいろいろな人から教わってきた経緯があります。

ですが、今はそういう作業をみんなやることがなくなってきているので、そういうのをどうやってつなげていくかということも非常に大きな課題ではないかと思っています。これは、今言ったように、ただ火入れ作業だけではなく、この茅場をやるにはやはり最終的にそこに看板を立てたりいろいろな作業があるんですけれども、そういうものも若い人たちにどうやって教えていくかというところも非常に頭の痛いところであります。

だから、これから私たちがこの茅場を維持しながらやっていくというのは、どういうふうにしていけばいいかというところをもう少し掘り下げていかなければいけないなと。ここもそうですが、非常に茅を燃やした後、大体10日から２週間ぐらいでワラビがどっと出ます。そのワラビ狩りツアーだとか、そういうのも観光連盟を通してやったこともあります。ですので、やはりこの組合としては、いかにこの茅場の価値を、茅を使うこともそうですが、それ以外にも高めていく、そういうことも非常に重要になってくるんじゃないかと。それと同時に、ある程度そこでもって収益的なものが上がって、組合員にある程度配付ができるような、そういうような方法を取っていかないと、なかなかこれから先は残っていかないのではないかと、そんな思いもしています。

ただ、不思議に、今、私ちょうど70歳になるんですけれども、お祭りのときもそうですが、この雨中地区というのはそこらの地区から集まった人たちなので、昔からある神社というのがないんです。だから由緒のある獅子舞があるだとか、浦安の舞があるとか、そういう文化はないです。みんな戦後の青年団の頃、若い人たちが今の祭りをつくってきたんですね。それと同じように、ずっと今も若連中というのが、まだ幸い祭りを仕切ってやっています。だから、小谷村の中で若連中が祭りを仕切ってやっているというのは、うちの地区だけじゃないかと思いますので、そういう面で言ったら、この雨中地区というのは、ほかにないちょっと面白い集落なのかなと思っています。

そういうところをうまく生かしながら、どうやってこの茅場を維持していくかというところを考えていかなければいけないのかなと。だから、いかに地区のほうに新しい人たちを呼び込んで、多くの仲間を引き込みながら、なおかつこちらの作業のほうにも参加していただくような機会を与えていくというようなことを考えていきたいと思っています。

また新しく入った人たちもそうなんですけれども、この雨中地区というのは、わりと酒飲みが多いんですね。お祭りもそうですが、作業も、今日の武生先生も何回も手伝いに来ていますし、東京農大の学生たちも参加してくれています。その後、地区の食堂で一杯やるんですね。そのときに武生先生も参加するし、東京農大の人も参加する。そうやって地区の皆さんが飲むという文化も非常に好きなんですけれども。だから、今、茅屋根をどうとかそういうことでなく、この野火をつけることに生きがいを感じてやっているような、そんなところもあるんですね。そこら辺はほかのところと違うところかもしれません。

特異なところもあるかもしれませんけれども、でもそういう生きがいを持ってやってくれている人たちがいるうちは、私はまだ大丈夫じゃないかなと思っているんですが、ただ私も70歳ですので、私と横並びの人が多いので、あと10年、10年の間に

やはりどうやって地区のほうに新しい風を呼び込んできて、また逆に収益が上がるようなことを考え、それを楽しみに林野組合にも参加してくれているような人たちを募るかというところが、大きな問題ではないかと思います。

武生：荻澤さん、ありがとうございます。最初にもう少し紹介すればよかったと思うんですけれども、千国地区というのは、小谷の中でも歴史のある、非常に小谷の中心地として栄えてきた地区の一つです。ある意味歴史の中で培われてきた茅場を含めた土地利用の維持ですね。雨中地区は、今、荻澤さんがおっしゃられたとおり、移住者が多い新しい地区で、移住者を受け入れながら地区そのものが運営されてきたということがもともとあって、茅場の運営も比較的寛容な形で維持されてきたというのが、実は二つの地区の大きな違いです。今日はこの２人の方にお話をしていただいたというのは、とても対称的で面白いかと思ってこういう企画をしたところです。どの地域ももう過疎、高齢化で担い手がいないという同じ問題を抱えているかと思うんですけれども、ここから会場の皆さんに話を伺いながらこの問題にどう対処していこうかということを、できれば考えていきたいと思います。

大きくは課題が二つあって、一つは組織運営をどうするか。特に若い人たちや、先ほど話がありましたが移住者を含めたボランティアとかという外の人を入れていくかどうかということ。もう一点は、そうやって来た人、もしくは地区の若い人をどんなふうに教育していくかという、この２点があるかと思います。

まず最初に、運営面について話をしていきたいと思います。運営については、人の面とお金の面があろうかと思います。最初に、あまり意見がないかもしれないんですが、お金から聞いていこうと思うんですが、今、会場にいらっしゃる地域の中で、茅場からそれなりの収益が上がっているという地区はありますか。もし何かあったらお願いします。

会場参加者：群馬県のみなかみ町から参りました。私のところはそんなに広くはない、１haくらいの茅場を管理しているんですが、毎年各県の文化財の屋根材用の茅材として出荷しています。刈ってもらっている人の日当ぐらいは収益は上がっているかなと思います。

去年から、また全然別のところから、ススキの種が欲しいという商社がいて、崩壊地なんかも緑化材として使いたいということで、キロ3,000円で買ってくれるんです。穂がでかいのは１時間で１kg取れますから、茅を刈るよりもこっちのほうがいいなという感じで、今までは中国から入れていたらしいんですが、こういう御時世なので国産のを使おうということで。まだ去年30kgで、今年もまた30kgぐらい、ちょうど今取っているんですが、増えるといいなという感じです。

武生：ありがとうございます。ほかにありませんか。

会場参加者：京都府の南丹市の美山町から来ました茅葺き職人をしております。今回御紹介されていた松澤さんと同じように茅葺き職人ですので、実際に自分たちで消費する分を自分たちで生産しているという形で、事業としてやっています。

美山町も茅葺きの里として、最近は観光地として名が売れてきたんですが、そこは伝統的にススキで葺かれているとなっていますが、実際には美山の茅も実はカリヤスで葺かれております。現在我々が刈っている茅場というのは、休耕田や裾刈り地に生えてくるススキですが、そういうところは、今日のお話があったんですけれども、本来は刈敷や牛馬のえさとして使うための採草地で、茅葺き用の茅場というのは稜線上にあった、今はみな杉が植林されてしまったので残っていないんですけれども、我々のほうではネガヤと言うんですけれども、ここら辺はコガヤと言っていますけれども、そういうカリヤスの草原を何とか再興していきたいなとは思っているんですが、なかなか身近なススキの茅場の管理もままならないという中で。ただ、茅葺き職人としては、やはり圧倒的に茅刈りとしてはカリヤスのほうがいいので、何とか目指していきたいなとは思っているんですが、今日のお話の中からお知恵をいただけたらと思っている次第です。

武生：ちょっと聞いてもよろしいですか。例えば、ススキではなくてカリヤスであれば、１把幾らぐらいで流通するものですか。

会場参加者：今カリヤスが流通していないので、全く流通していない、市場に出てきていないので、値段がつけられないんですけれども、当然、例えば白川郷なんかは、あそこはいっときススキ葺きだった

こともありますが、やはり文化財としての価値を正しく取っておくことでカリヤスに回帰しているという流れがありますし、あとは今もお話がありましたけれども、松澤さんのお話であったように、ススキよりもカリヤスのほうが長持ちするので茅材として優れていますから、当然ススキよりも高い値段で出荷できるであろうということを期待しています

最近茅をつくりたいという相談は多いんです。茅葺き民家を保存しようというときに、茅葺き民家を保存するなら、まずみんなで茅を刈りましょうみたいな話を、みなかみ町の人なども一緒に、茅葺き民家を守るためには茅を刈りましょうみたいな話は30年前にはなかなか通じなかったんですけれども、今は逆に、茅葺き民家を残したいので茅場をつくりたいんですというお話が来るんです。そういう実生から増やして、在来11種子の散布という話がありましたけれども、そういう御相談とか、株分けするみたいな話があるんですけれども、新しく茅場をつくっていくよりも、伝統的にやはり茅場として利用されてきたところを復元していくほうが長く使っていけるんじゃないかという期待値もあるので、商品価値を高めるために、具体的にこれとは言えないんですけれども、やはりススキよりはプレミアムなものであろうと思います。

会場参加者：１束の値段は、ススキの値段。

会場参加者：１束、ずっと1,000円ぐらいだったんですけれども、最近値段が上がってきて、1,500円から2,000円ぐらいに急に上がっていますけれども、それは物価高の。

栗田：１把はどのぐらいの大きさですか。

会場参加者：２尺締めなので、90cmで周囲が60cm。

栗田：結構な大きさですね。

会場参加者：でも、カリヤスだとこんなものですから、カリヤスの１把とススキの１把は全然違うんですけれども、刈る手間はカリヤスのほうがかからなくて、かつ高く売れるのであれば、商品としては価値があるのかなとは思います。

武生：１把が1,000円を超えるということですね。

（中略）

栗田：昔から、それは別にお金のためにやっているわけじゃなくて補っていくという。

会場参加者：僕も牧の入に関しては、火入れされる方の立場も、刈る方の立場も、つくられる方の立場も全部知っているので、難しいのは承知しているんですけれども、みんなが幸せになればいいなと思います。

武生：経済的な部分でも意外と今行けるかもしれないという可能性の話をしているので、それもありがたいと思います。モチベーションの一つになろうかと思います。ほかに茅の直接的な利益以外のもの、先ほど種とかもありましたけれども、ほかにも茅場から何か収益が上がっているという事例とか。

会場参加者：お世話になります。静岡県の東伊豆町というところから来ました。先ほど、安藤先生の中にあったミカン畑にひいてあるあの地区になります。もともとそこが稲取の中に入谷という地区がありまして、そこが畑の下草ということで利用して、昔は牛とかも飼っていた時期もあったのでそういうものの利用が多くて、山の管理そのものをその入谷というところが担っていたんですけれども、現在は、需要と人手が減ってきているというのもありますし、そもそもの細野高原というところですけれども、そこの稲取地区に四つの町内会があって、ここが４区の共有財産という形で、今管理をし始めているというところです。

ほとんどが、先ほどから茅場が生活に根差した使い方というか、そういうものから、ミカンのほうも、ハウスミカンとか栽培方法がかなり変わってきたりして、そもそもの畑の下草に必要な量というのはすごく減ってきています。今はそういう生活利用から観光利用にシフトしてきている段階です。

その中で、やはり環境保全と同じような環境を維持していくために火入れが必ず行われるということで、この火入れも４区でやっています。火入れが終

わった後ワラビが出たりしたときには、当然山菜狩りということで、入山料を取って山菜狩りをしていただく。それから、今年は非常に夏が暑かったので、これからススキの鑑賞会というのを約１か月、それも入山料という形でお金を頂きながらやっていくと。将来的にはそういうお金は山を維持していくために使用されていくという形にはなっていくかなと。

担い手不足とか、そういう面も今後非常に考えなければならないということで、今年、そこをどうやって守り維持していくかという、そういうことのために協議会が出来上がって、今日はうちの職員と、それから１名は地域おこし協力隊が来ています。その地域おこし協力隊がそこの管理の部門に直接入って今活動を始めている状況で、観光的な要素でそこからいくばくかですが、収益が上がるような状況というので活用されている状況です。

武生：観光も一つの方法かなと思いますが、ほかにありますか。

会場参加者：広島県の芸北から来ました。僕は環境保全団体のNPOに所属しているんですけれども、そこで芸北茅プロジェクトという、茅を直接売るのではなくて、１回仕入れて販売するという市場みたいなものをやっていまして、そこで買い取りの価格と販売の価格の差額で収益を上げるという事業をやっています。

それはNPOがやっているのではなくて、地元の教育委員会と中学校と実行委員会を立ち上げてやっていまして、教育の一貫として中学生が主体となってその市場を運営するというようなプロジェクトになっていて、年間20万円ぐらいの売上げが、少ないんですけれども毎年上がってきているということをやっています。

武生：そうすると、直接的な収益というよりは、中学生の教育効果を狙っていると。

会場参加者：そうですね。やはり草原の維持というのはNPOとしてやっていきたいことなので、もう少し市場の収益を大きくして、管理されている草原を増やしていくというのを今年からやっていこうかと思っています。

武生：直接的な収益プラス教育という流れということですが、ほかにありますか。

会場参加者：長野県の菅平高原にある筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所から来ました。菅平高原も草原地域で、スキー場もたくさんあって、そこに結構いろいろな希少植物が分布しているんですけれども、ゲレンデが端から順に、スキー人口が減ってしまったので利用が減って森林化が進んでいるような状況です。

そこにムラサキというかなり希少性の高い植物が分布していて、もともとそこは菅平の中でも昔から神社の茅葺き屋根に使われていた茅場だったところでしたが、ササとか樹林になってしまったので、有志で木を切ってササを刈って、そうしたらすごく勢いのいいススキがぼーぼー生えてきたので茅刈りもして、小谷屋根さんに指導していただいて出荷も今しているんですね。それは有志と地元のNPOと一緒にそれを運営していて、菅平中学校の子供たちにも体験してもらっているという状況です。

このお金は茅刈りに出てくれた人の日当がまずあるんですけれども、１年間刈らなかった余分な草を春にもう一回刈ってきれいにしたり、年間を通すと実働よりはやや収益のほうが超えるぐらいにはなるのかなと。だから、希望者がいたら、そういう茅場とかを広げていくこともできるのかなとは思っているんですけれども、一番は希少種を守るということと、中学生の教育にも活用されているというところが我々としては大事にしています。

武生：菅平は、本当に長野では有数の草原生植物の宝庫なんですけれども、例えば、植物や生き物を観察するというような観察会とか、そういったガイドは収益が上がることはあるんですか。

会場参加者：ガイドを専門にやっているNPOと一緒に茅刈りをやっているんですが、ある程度そのNPOは７人ぐらいの職員はなりわいとしてやっていますけれども、やはりコロナのときにガクンと減って、ほとんどの職員がいったん解雇になってしまったんですね。コロナ後に、今インバウンドも含めて戻ってきたので、また７人ぐらいでやっている体制に戻ってきているところです。でも、お金を払ってガイドを求める人は、一般の人にはそれほどいないので、やはり修学旅行とかインバウンドツアーみたいなところが中心になっているようです。

武生：ありがとうございます。でも、その可能性もありかもしれないですね。

時間的にはこの辺で切り上げようと思うんですけ

れども、直接的な利益の方法はまだあるし、教育とかも含めて、観光も含めて、間接的な利用でもそれなりの収入を得る方法はありそうだと。ただ大もうけはできない。人件費が出るぐらいだというのがどうやらありますね。こういう中で、どうしても維持しようとなると、なかなか人を集めるのはやはり難しいですね。組織だてて収益を上げるための活動としての茅刈りであったり、野焼きとして難しいとなれば人を入れるのは難しいかと思うんですけれども、今、茅刈りもしくは野焼きを担ってくれる人をボランティアとか、外部の人まで含めてやっているという地域があったら教えてほしいんですが、お願いします。

会場参加者：九州の大分県の飯田高原「九重の自然を守る会」から来ました。ボランティアの参加という話ですが、野焼きの対象は、今、九重山系の真ん中にある中層湿原のラムサール条約に登録された坊ガツルというところがあります。それともう一つ、登山口の長者原というところにタデ原湿原というところがあります。それから飯田地区の中も野焼きをやります。そのメンバーですけれども、もともとは地元の方々がやっていたんですけれども、最初にお話がありましたように、もうそれを担う人たちが高齢化が一番多いと思うんですけれども、高齢化がありましたので、ボランティアを募って今はやっています。

坊ガツルの野焼きをするときには、周りが全部国有林ですから防火帯をつくる、これを輪地焼きと言うんですけれども、防火帯をつくってそれを取り囲んで真ん中を焼く。そういう手段でやっています。坊ガツルというのは、ボランティアの人を含めると総勢100人、あるいは120～130人ぐらいの規模でやっています。よろしいでしょうか。

武生：ありがとうございます。ほかにボランティアを入れてやっているという地域は。

会場参加者：群馬県のみなかみ町のものです。基本的にはやはりボランティア主体にやっていまして、茅場として放棄されたところを、また都会の人たちがそこを再生しようと、20年ぐらい前から火入れを始めて元の形に戻しました。地元の人たちにも教えてもらいながらやっていたんですけれども、地元の人たちはみんな高齢化してしまって、逆にむしろこの(小谷の)地域がずっと地元の人たちがやり続けられているのはすごいなと感じがしています。我々の地域の人たちは、そんな危ないことはやめてくれみたいな雰囲気のほうが強かったりもするんですが、ただオーナーにも協力してもらいながら、地域の人たちはどちらかというと移住者の人が多く、私も移住者ですが、移住者と都会の人と地元のお年寄りがちょっとという形で一緒にやっています。

武生：そういう移住者の人を受け入れながらうまくやれているという地区はほかにありますか。いかがでしょうか。たぶん、一番そこが難しいところだと思うんですね。地元の人だけでやっていくのがだんだん難しくなってきたところで、移住者の人とかボランティアでやりたいとか、都会の人をどう受け入れていくかというところが、今後一番のポイントかと思うんですけれども、その辺で何か御意見のある方はいらっしゃいませんか。

会場参加者：質問でもいいですか。先ほどの九州のほうでボランティアの方を募ったりして、人数が100人から120人の方を集めるということですが、何か集めるに当たって特徴がある発信の仕方をしているんじゃないかと思うんですが。

会場参加者：やっていません。

会場参加者：でも、100人から120人を集めるというのは……。

会場参加者：九州の中でも九重山を中心にして西側に阿蘇の草原の維持という、グリーンストックという組織があるんですね。あそこはほとんどボランティアの方ばかりです。火をつけるのは地元の人、延焼を防ぐために周りを取り囲むのはボランティアの人でやっています。ボランティアに参加すると丸一日の講習会をやります。火はこういう形でつけますよと、先ほど来話があるように、上のほうからつ

けて、下からは絶対つけません。真ん中に残ってやけどをするからと。そういった意味の教育も１日やります。そんな形で募集をかけています。今のところ牧野組合ごとにやるんですけれども、一つの牧野組合は40～50人集まっています。同日に２か所、３か所やるのもあります。その牧野組合が同じ日に３か所やることもあります。そういった意味で100人前後集まってきます。そんな形でやっています。

会場参加者：すごいですね。それだけ人を集めるというのは内緒の秘密があるのかと思いました。ありがとうございました。

会場参加者：私も九重から来ました。補足ですが、九重の場合は実行委員会形式を取っています。その実行委員会に所属する各団体さんですとか、事業者とか、基本的に一般ボランティアは受け入れていないです。地元で事業をされている方とか、九重の自然を守る会のボランティア団体の方とか、地元で活動されている方の中からボランティアに参加する方を募って実施していて、それで多いときは100人ぐらいになります。

坊ガツルについても、基本的に一般ボランティアは募集していなくて、事務局に九電みらい財団さんが入っていまして、九州電力の社員さんですとか、事業会社さんの中から参加したい意思のある方が参加して、100～120人ぐらい御参加いただいています。

武生：要は、地元に住んでいる方の中で選ぶという感じですね。

会場参加者：そうですね、基本的に外から地元の所属する団体さんとか事業者さんの社員さんとか、関係のある方しか来ません。

武生：分かりました。ほかに、まだ今日しゃべっていない方がいらっしゃるんですけれども、どうぞ。夏にお会いした開田高原の。

会場参加者：木曽の開田高原から来ました。茅屋根とはちょっと関係なくてといいますが、木曽は馬の産地でして、逆に茅屋根ではなく板屋根を使っていた場所で、ヨシ材は茅の屋根にしろというお達しがあったんですけれども、それも住民からの訴えで、馬にやるので茅を使わないという地域です。

そういうこともあって、残された小さい草地を馬と重ねて保全できないかということで、先ほどおっしゃった移住者ということですが、本当にごく少数ですが、馬を飼いに移住してきた方がいます。移住してきた方は土地を持っていないので、草を自由に買えない状況ですので、その人たちと一緒に会を立ち上げて、ごく少数の10人にも足らないような感じの作業者ですけれども、馬のために草を刈るという形で今活動をしています。

火入れのほうは集落でやっておりまして、集落も高齢化をしてきていて、大きな面積ではなく、小さな集落のそれぞれの地区で小さな面積をやっているので、構成人員は10人とか20人いればいいほうという感じです。そこにこれからどうやって関わっていけばいいのかなと悩んでいます。大面積でなく、そういう集落管理で火入れを維持しているところの御意見とかいただければと思っています。

武生：ありがとうございます。こんなに意見が活発に出ると予想はしていなかったんですけれども、いろいろな形で皆さんから御意見をいただいて、あと５分しかないところですが。経済的にも何とかなる可能性はあるという示唆をいただいたり、ボランティアを含めていろいろな人が参加することで維持できる可能性もあるという、ほかの地域からの人もあったんですけれども、最後一言ずつ頂いていいですか。

栗田：すみません、話の中で言わなかった部分があって、ここにあるんですけれども、コガヤがなぜもつかというと、写真があるんですが、本当に細いんですね。ですから密度が高いので、先ほど茅を刈る話が出ましたけれども、量的には相当密度が高い。うちはコガヤをナガヤというんですけれどもそれが一つですね。

それから刈る鎌ですが、これもついでに話しておくと、普通の鎌は７寸ですが、茅を刈る鎌は８寸を使っていました。それから、先ほどの話の中でも出たんですけれども、きれいにしたほうがいいんじゃないかというんですけれども、まさにきれいにしないとオオガヤになってしまう。ですから、刈ったところはきれいにする。特に牧の入の場合は河川があって土が肥えてしまうので、そこが草地化してくると灌木が出たりしてしまいます。それはたまに切るんですけれども、このコガヤを管理するのは、要するに周りをきれいにしていく。そのときに、先ほど出たハギ刈りをしておかないと、ハギの根はすごく張るので大変で、これは松澤さんからも言われて

やったんですけれども、ハギ刈りをするために根をやったんですが、なかなか全部取れないですね。そんなことがありました。

もう一つ、あした見ていただくと分かるんですけれども、小谷の屋根というのは茅の下に白いこういうものがあるんです。これは実は「麻幹（おがら）」というんですが、麻を昔つくったものですから、まず麻をどのぐらいですかね、５～６cm、もっとあるかな。これを敷いてその上に茅を敷いているんで、たぶん明日見てください。そのところを言い忘れました。

それと、今いろいろお話が出ましたけれども、本当に最後は後継者に尽きるんじゃないかと思いますけれども、ボランティアの大変なのは安全管理と、先ほど言い忘れましたが、実は日にちが確定しないんですね。特に牧の入は風をものすごく心配していて、風のある日は絶対にやらないです。今、土日にやるので、１回延ばすと１週間延びるんですね。ですから下手すると14日延びると結構大変になったり、燃えなくなってきたりしますので、その辺のバランスを取りながら、地元ですと、出てくれという日にある程度出るんですけれども、先生も来ましたけれども、飛んでいったらやっていなかったということもあるので、そんなところを思っています。以上です。

荻澤：組合の維持を考えたときに、やはり収益をどうやって上げるかというところだと思うので、先ほどカリヤスなどは結構いい値で売れると、ただしうちの組合員のメンバーには小谷屋根さんも入っていますので、小谷屋根さんにその値で売るわけにはいかないので、そこら辺を加味しながら、やはり収益を上げる方法、普通の茅でも売れるという話ですので、そこら辺はどうなのか、もうちょっと研究して、やはり新しい人を増やして、何とか今の体制を保っていかれるように努力していきたいと思っていますので、またぜひ皆さんからいろいろとアドバイスをいただければありがいと思います。どうもありがとうございました。

武生：最後荻澤さんに見事にまとめていただきましたので、私が言うことはあまりないですが、この会を通じていろいろな情報交換をしていただいて、それぞれのうまいやり方も今日はちょっと聞こえたかと思いますが、お互いにいいところを取って、各地域の草原の維持に役立てていただければと思います。

第14回 全国草原サミット・シンポジウムinおたり ～つなげよう 茅場が育んだ技術と命～

第４分科会
「草原資源を地域に生かし、次世代につなぐ」

東京農業大学地域環境科学部　教授　町田怜子 氏
小谷中学校3年生の皆さん

町田怜子：私は、本日コーディネーターを務めさせていただきます東京農業大学地域創成科学科の町田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

この第４分科会では、「草原資源を地域に生かし、次世代につなぐ」ということで、小谷村の中学生の皆さんが、５月、６月から一生懸命茅葺きの葺き替え作業や、私も一緒に行ったんですが、草原での野外学習、そのほか養蜂見学や高齢者福祉体験活動など、様々な中学生での学びと、そしてふるさとの草原をかけ合わせて、今日はそれぞれのテーマで発表してくれます。

まず、今日の流れを御説明したいと思います。最初にオープニングで中学生の皆さんからのサプライズのプレゼントがあります。その後、中学生の皆さんに御発表いただきます。この御発表では質疑応答の時間を設けることができないんですけれども、中学生の発表が終わったら、それぞれ４班の中学生が四つ角に集まりますので、この生徒にもうちょっと質問したいなというところに集まっていただきたいと思います。ただ、２班しか回る時間がないので、２班を決めていただいて、10分ごとに子供たちにいろいろな質問をしていただきたいと思います。４時20分から４時35分、最後にまとめをして、中学生の皆さんからもこんな御意見をいただいたというフィードバックをしていただいて、あと会場の皆さんからも一言いただいて、最後皆さんと、この生徒たちと一緒に草原から未来を考えることを共有して終わりにしたいと思っています。それでは、中学３年生の皆さん、プレゼントの準備お願いします。

【歌の斉唱】

町田：小谷村中学校３年生の皆さん、本当にすてきな歌をありがとうございました。それでは、最初の班の方、どうぞ。

中学生：これから３年生の発表を始めます。テーマは「ふるさとの課題に向き合う」です。

私たちは１年生のときに小谷村の自然について、２年生のときに棚田を復活させたらどうなるかについて考えました。集大成となる今年は、これまでの学習を発展させて、「ふるさとの課題に向き合う」をテーマに、草原や里山、高齢者の視点から課題に対して行動を起こしてきました。

まずは、小谷村の草原を残すという視点から発表します。

中学生：私たちは、「わらびに付加価値を！」というテーマで発表します。そもそも、なぜ小谷村でワラビなのかというと、江戸時代にまでさかのぼります。当時山菜の代表格として知られていたのがワラビで、特に塩漬けにされたワラビは、松本藩の特産品として高く評価されていました。そのワラビの品質は幕府にも献上されるほどで、献上されたワラビは、殿様ワラビと呼ばれていました。また古文書には、ワラビとだけ記されるのではなく、「御ワラビ」と表記されるほど気遣いがされていたことからも、その特別さが感じられます。

中学生：またワラビ漬けに使用された塩は、千国番所の運上塩が使われており、漬け込みは、主に千国村で行われていました。松本藩から江戸幕府への献

上品であったため、ワラビ漬けの運搬には藩の役人が付き添い、大切に管理されていました。これらのことから、小谷村の人々はワラビに対する誇りを持ち、その思いが今に受け継がれています。

中学生：ワラビを収穫することには、茅をスムーズに刈ることができるというメリットがあります。小谷村の茅は全国的に見ても質が良く、今後残していきたい茅場トップ100にも選ばれています。このような茅をより良い質でたくさん収穫するためにも、ワラビを採ることが里山の貢献にもつながります。

中学生：また、多くの人はワラビは大きくても腕の第一関節ぐらいまでだと思っているかもしれませんが、実際にはワラビは成長し過ぎると人の身長ほどの高さに達し、とても硬くなります。こうなってしまうと茅の中に成長した硬いワラビが入り込んで成長し、茅を刈る際に邪魔になってしまうことがあります。また、その成長したワラビがずっと茅の中に残ってしまうと茅の中で腐ってしまい使えなくなってしまいます。そのため、ワラビを収穫することで茅刈りをスムーズに行えるようになったり、茅の質を守ることができます。

中学生：池ノ田に着いたときは、ものすごく広かったので、みんなが散らばっていきました。私たちが採ったワラビの収穫量は、何と約30kgです。そして収益は約1万2,000円になりました。こうした小谷村のワラビをもっといろんな人に知ってもらいたい。そのため私たちは道の駅の「鬼の厨」というところで、ワラビを使ったメニューを取り入れてもらえるか伺いに行きました。

中学生：まだちゃんとしたメニューは決まっていませんが、取り入れてもらいたいメニューがあります。今考えているメニューはわらびおこわ、わらびの豚肉巻き、わらびと人参のナムル、山菜汁、ごま豆腐のわらびペーストがけを考えています。特に豚肉巻きは、小谷野豚を使い、その肉でわらびを巻きます。この五つが今考えているメニューです。

まだはっきりはしていませんが、11月、12月以降にメニューに取り入れてくれるそうです。ぜひ皆さんも、実際に行って食べてみてもらえたらうれしいです。これで終わります。

町田：ありがとうございました。ふるさとの課題に向き合う班の皆さんは、草原と、わらびのつながり、また管理のところも考えながら、皆さんに届けるためのメニューまで考えてくださって、食の恵みとか草原の恵みのつながりも感じられたかなと思います。

中学生：私たちは「草原の魅力を発信する！」というテーマで発表します。私たちは、小谷村の魅力を動画にまとめてSNSで発信しようと考えています。皆さんは、TikTokやYouTubeショートを見ていますか。今は見ていない人のほうが少ないのではないでしょうか。今どきはTikTokやYouTubeショートではやりが決まると言っても過言ではありません。

地球グミや氷タンフルもTikTokを中心にはやってきたのではないでしょうか。若者をターゲットにTikTokやYouTubeショート動画を使い、全国に向けてSNSを活用して発信しようと考えました。なぜSNSで発信するの？

中学生：図を見ていただくと、10代から30代の方は、ソーシャルメディアやパソコンやアプリの閲覧時間が、新聞やラジオよりも圧倒的に多いです。それから、SNSには気軽に情報が発信できたり、海外の情報も収集しやすく、海外にも気軽に情報が届きます。

テレビや新聞などでは特定の地域にしか情報が届けられず、全国に向けて発信するのは難しいと感じ、若者がよく見るSNSアプリを活用して発信しようと考えました。

小谷村は年々人口が減っているのは皆さんも御存じだと思います。今年４月に発表された2050年にはなくなってしまう市町村に小谷村が入っていました。小谷村がなくならないように、移住者を増やしたいという気持ちで若者がたくさん見るTikTokなどのアプリを活用しようと考えました。

小谷村の自然を生かした茅葺き屋根が最近世界中

で大注目なのを知っていますか。今回は茅葺き屋根の魅力をテーマに動画をつくりました。それでは御覧ください。

【動画再生中】

中学生：いかがでしたか。このように茅葺き屋根にはたくさんの魅力があります。皆さんも、ぜひ茅葺き屋根の魅力を通じて草原を守っていきましょう。これで草原班の発表を終わります。

町田：草原班の皆さん、ありがとうございました。情報発信というとても大事なところで、こんなすてきな動画を中学３年生がつくれたことにびっくりしました。とてもすてきな動画だったと思います。

中学生：私たちは養蜂は里山にどれだけ重要なのかについて学習しました。最初に、里山について説明します。里山とは、人里の近くにあり、人々が生活するために利用してきた山や森林のことです。林は人が手入れをしており、薪や炭の材料を集めたり、落ち葉を拾って肥料にしたりしていました。また里山にはハチは不可欠であると言われています。

しかし、農薬の使用や石油製品の普及などにより、里山は利用されなくなりました。里山が利用されなくなると荒れ地が増加し、災害が増加したり、熊などの動物が人里に現れやすくなってしまいます。

そして日本全体としても様々な問題が起こっており、過疎化や少子高齢化を原因とする休耕田の増加、地球温暖化等を原因とする動植物の減少によって、里山の崩壊を深刻化させています。

中学生：では皆さんに質問です。もしもこの世からハチが消えたら、世界はどうなると思いますか？アインシュタインは、ミツバチが絶滅したら、４年後に人類も滅びているだろうという言葉を残しています。なぜアインシュタインはこのような言葉を残したのでしょうか。それを調べるために、小谷村で養蜂を行っている細田さんにインタビューをして、養蜂の体験もさせてもらいました。

ミツバチを落ち着かせるために、煙を出す道具を使いました。何回も空気を送って煙を出さないといけないので、手がとても疲れました。落ち着かせた後にスズメバチを捕まえるわなを交換しました。スズメバチはミツバチを連れ去って、女王バチのえさにしてしまうそうです。わなの表面はベタベタになっていて、一度くっついたら逃げられないようになっています。

中学生：また、ミツバチがどうやって蜜をつくるかについて調べました。ミツバチは、羽化してから20日ほどの働きバチが外へ飛んで行き、花から花へと飛び回ります。ストローのような口で花の蜜を吸い胃の中にためます。巣に帰ると待っていたハチに口移しで蜜を渡します。このときに唾液が混ざり、花の蜜が分解されます。巣にいたハチは受け取った蜜を巣穴にためます。それを何度もして別の穴に移すうちに、唾液などで分解が進みます。また羽であおいで水分を飛ばすことで薄かった蜜がとろりとしたハチミツになるそうです。

ミツバチは自然にとってとても重要な役割を持っています。そのうちの一つが受粉です。ミツバチは花の蜜や受粉を求めて飛び回るうちに、野菜や植物の受粉をしています。世界の食糧を賄う重要な作物のうち、７割以上はミツバチが受粉をしているという報告もあります。もしミツバチがいなくなってしまうと、植物の受粉が難しくなるので、食料の生産ができなくなってしまいます。そうなったら、アインシュタインが言ったように人類が滅びてしまうかもしれません。細田さんからも、このようなミツバチによる受粉があるからこそ、おいしいキュウリやトマトがたくさんできるんだよと教えていただきました。

中学生：また養蜂は地域でも重要な役割を持っていました。ミツバチの販売によって経済が活性化するということです。細田さんは取れたハチミツはオタリアンジェラートさんに買い取ってもらったり、近所の方にお裾分けしたりすることが多いそうです。

ハチミツは風味も良く自然な栄養でできているため、とても体にいいそうです。私たちも細田さんの

つくったハチミツを頂き、食べさせてもらいました。細田さんの言うように風味が良く濃厚で、とてもおいしかったです。このことから、ミツバチの受粉によって作物の育ちが良くなったり、ハチミツを販売することによって経済が活性化したりすることがメリットとして挙げられました。

しかし、養蜂は費用が高くたくさん飼わないと利益を得ることが難しかったり、世話が難しく数を増やしにくかったりして、管理が難しいということもおっしゃっていました。また、養蜂を行うだけではなく、里山に田んぼをつくるなど、ほかにもいろいろな活動を行ったほうがいいと考えました。皆さんは、里山のために養蜂を行いたいと思いますか？

町田：ありがとうございます。こちらの班は里山の問題、草原課題のフレームワークをつくっていただいていました。養蜂のつながりをつなげてお話ししてくださいました。最後の問いかけもあってとても良い発表だったと思います。

中学生：私たちは高齢化について考えるために、高齢者福祉体験を行いました。これから発表することは、農業や食などの視点を高齢化の問題と絡め、どのように結びついているのかを一人一人が真剣に向き合い考えました。まずは、小谷村の高齢化が進んでいる現状を見てください。

小谷村在住の65歳以上の高齢者の割合をグラフにまとめました。昭和35年から令和６年の高齢者の割合は28.6％増加していることが分かりました。小谷村は、全国と比べて高齢化が急速に進んでおり、2050年には全体のおよそ50％を占めるともされています。

この現状を、皆さんだったらどう捉えますか？

中学生：認知症サポーター研修という貴重な場をお借りし、感じたことが幾つかありました。学んだことは、いきなり話しかけないこと、大人数で話しかけないこと、「認知症＝物忘れ」だけではないこと、何もかもが分からなくなってしまい、不安な気持ちが認知症の人を襲うということです。

特に３番目の認知症の方は物忘れをするだけではなくて、精神的ダメージや思いどおりにいかずいらだってしまうことなどがあるそうです。またそれは認知症の方自身も自覚があるそうです。私たちはこのことを知り、とても驚きました。

これは私たち３年生に出されたある場面です。皆さんだったらどう考えますか？　考えてみてください。

私たちはロールプレイを通して様々なことを学び考えました。それは接し方次第で認知症の進行状況が変わるということ。認知症の本性をしっかり知ることが大切だということ。心に余裕を持って接し、行動することが必要だということです。この活動で学んだことを通して、実際に高齢者のお宅に訪問してきました。

中学生：私が行ったＴさんのお宅は大網地区にあります。大網地区に行くには学校からバスで１時間、一度新潟県に出ないと到着できません。着いたときにはほぼ昼ぐらいになっており、Ｔさんの家について、すぐにお昼御飯をもらいました。

御飯を食べた後に大網周辺を散歩したりしました。その後おうちに戻り笹寿司をつくらせていただきました。具材を少しずつ載せて、最後に上から押しつぶしたら出来上がりだそうです。とても上手にできたし、おいしかったです。

大網に行って最初に感じたことは、家がこんなにあるんだなと思いました。大網を歩いていると大網分校という学校がありました。今では民間施設として活用されているそうです。武田さんは、大網にはコンビニなどがなく、山を下りなければ必要なものが手に入らないという大変さがあるとおっしゃっていました。山の中ということから若者が少なく、住人も暮らしやすいところに移住してしまうため、人が減り空き家が増えていっているそうです。

中学生：小谷村には農業をやっている方々が多くいます。私は伊折地区の酒井さんのお宅にお邪魔してきました。酒井さんは小谷中の給食のメニューにもあるおいしいトマトや雪中キャベツを育ててくださっています。私は酒井さんと畑の電柵作業をしました。

この活動を通して感じたことは、私たちよりも高齢者の方のほうが力と体力があるということです。また、農業をやっている方が多いので健康で長生きだということです。しかし、小谷村は傾斜が急なところが多いため、高齢者の農作業はとても負担がかかり、大変だと感じました。

高齢化の影響で、これからさらに農業をする高齢者が増えていくと思います。その中、私たちにできることは高齢者との関わりを増やし、生きがいの支

えになることが重要だと考えました。

中学生：僕は「ひじくらアッチ」に行ってきました。ひじくらアッチで高齢者と一緒におやきをつくって食べたり、遊んだりしました。その後、僕たちが考えた遊びで、高齢者と一緒に楽しく遊びました。僕たちが考えてきた遊びは、高齢者でも楽しくできるボーリングと輪投げです。その後、紙芝居をしてもらったり、一緒に話したりしながら時間を過ごし体験を終えました。高齢者の皆さんは、この小谷村の自然がこのまま残ってほしいし、この村も残ってほしいなと言っていました。その言葉には、小谷村の自然の大切さや小谷村の愛が僕の胸に深く伝わってきました。

中学生：私は高齢者のお宅へ福祉体験に行ってきました。初対面の私たちを温かく迎え入れてくださいました。キノコのコマ打ちや販売用のハチミツを瓶に入れる作業を教えてくださったり、中学生が好きそうな豪華な御飯を食べさせてくれました。高齢者福祉体験を通して、私たち若者にとってのメリットや高齢者にとってのメリットを考えました。若者にとってのメリットの一つ目は、地域の方々と関わることでコミュニケーション能力の獲得や視野が広がることです。大人の方と会話をするとき言葉遣いに気をつけたり、相手のペースに合わせて声の大きさや話すスピードを考えて会話をしたりなど、配慮しながら関わるという力が身につくと思いました。

二つ目は、人生経験が豊富な高齢者の方から、知恵や知識を得ることができるということです。代々受け継がれているわざや伝統文化について理解を深められると思いました。

では、高齢者にとってのメリットはあるのでしょうか。インターネットによると、社会的なつながりの維持、精神的な刺激、テクノロジーの学び、体力や活動性の維持があるそうです。私たちは、高齢者福祉体験を通して多くの学びと気づきを得ることができました。浮かび上がった課題は、高齢化が進むことによって空き家が増えてしまったり、農業での体の負担、食文化の継承がありました。このような課題を解決する一つの方法として、若者との関わりが大切だと思いました。

小谷村は高齢化が大幅に進んでいるという問題を抱えていますが、それは悪いことばかりではないと思います。高齢者の方々の豊富な知識や経験を共有することができたり、世代間の交流が活発になったり、社会に貢献する機会が増えるなど、ポジティブな面もあると思いました。今後は若者と高齢者が互いに助け合い、幅広い世代間の交流の機会を大切にしたいと思います。以上のように、３年生はふるさとの課題について考え、解決に向けて行動を起こすことを目標に活動してきました。課題の解決は難しいですが、これからも考えていきたいと思います。これで小谷中学校の発表を終わります。

町田：ありがとうございました。最後の班の方は地域の高齢化の問題をあつかい、小谷村をはじめ、各地の草原でも共通している課題で、今日皆さんが体験してくださったように、小谷村も一緒に世代で交流している温かいつながりが昔からあって、そこがお互い若い人も高齢の方も元気になったりすると思います。

あと、今、東京都の健康医療長寿センターから、農業とか田んぼとか、草原の管理とか、農の活動によって認知症の人のイライラした気持ちが落ち着いたり、時間の管理ができるようになったりという報告もあります。みんなと一緒に外に出て農業とか作業をすることの効果も多いかと思っています。

ということで、４班の発表をまず聞いていただきました。この小谷村中学校３年生の皆さんがふるさとの課題に向き合うということで、四つテーマがあったと思います。草原の食のつながりからワラビ、それから草原の魅力を発信しようということで、主に茅葺きの価値も併せてSNSで発信するTik-Tokの動画をつくってくださったり、あとは小谷の生物多様性豊かな場所だからこそできるミツバチの養蜂の話、そして最後にこの地域が抱えている社会的な課題を一緒に考えるというテーマがあったと思います。

【各班質問タイム】

町田：皆さんのおかげで、素晴らしくグループワークが盛り上がって、お一人お一人の御協力に心から感謝します。小谷村の中学校３年生の皆さんも、一生懸命準備をしてくださいました。皆さんからの質問で、また学びも深まったんじゃないかと思います。

では、残りの時間で、最後のまとめをしていきたいと思います。いかがでしょうか。まず中学生の皆さんに座っていただいて、これからは、各班でどんな御意見があったとか、皆さんとディスカッションしてどんな感想を持ったかを、１班ずつお話をしてもらって、それから会場からもコメントをいただいて、皆さんと一緒に話していきたいと思います。

各班でこんな意見がありましたというのを報告してくれる人、各班１人ずつ。では、まず「ふるさとの課題に向き合う」という最初のワラビのことですね。お願いします。

中学生：ワラビ班は、調理して道の駅に出すみたいな発表をしたんですが、その後どうするかとかまだあまり考えていなかった質問もあって、今後の課題も分かっていい発表になったと思いました。

町田：ありがとうございました。ということで、ワラビのテーマを発表したところですが、会場から御意見をいただけたらと思うんですけれども、田原さん、いかがでしょうか。

会場参加者：今日はありがとうございました。ワラビのことで先ほどもお聞きしたら、道の駅のほうでは一生懸命お料理をしてやるというお話があったんですが、先ほども聞いたら、私、地産地消のほうに力を入れているんですが、給食ではあまり取り入れていないようで、帰ったら私もお話ししますけれども、学校の給食のほうでも、ぜひせっかく地元で採れるものなので、ワラビも給食に取り入れていただきたいと思います。

そして今日の発表を聞いていて、小谷の中学生は本当に地域の自然や伝統の勉強をすごく一生懸命しているなということを、私も勉強になりました。

先ほどワラビのときに人口が減っている話があったんですが、移住者に来てもらうということはとてもうれしいことですが、皆さんが大きくなったら、ぜひいろいろ経験していますし、また高校を卒業して大きくなって、都会の空気も吸ったら、いずれ小谷に戻ってきてほしいと思います。これは私の願いです。ありがとうございました。

町田：では続いて２班目の方ですね。SNSで発信をの班お願いします。

中学生：動画を撮ってほかの視点から考えたこととか、動画のつくり方のコツとか、茅葺き屋根の良さとか、動画でつくったこと以外からの視点をたくさんいただけたので、すごく参考になりました。

町田：この班は情報発信ということで、外の方向けの発信もしていただいたので、地域外から来てくださった筑波大学の先生、お願いします。

会場参加者：今日はありがとうございました。茨城県の筑波大学から来ました。情報発信ということで、若い人ならではのツールだなと思ってすごく興味深く拝見しました。まだ公開していないけれども、これから公開する可能性があるということと、関わったグループの皆さんそれぞれ自分でTikTokとかやっているということなので、今日４グループの発表を聞いていますと、やはり素晴らしい資源が、わらびとか、ハチミツとか、茅葺きとか、たくさん素晴らしいものが小谷村にあるという、発信にぴったりのすごくぜいたくな環境なんですね。なのでぜひぜひこれから発信していっていただければ、日本だけじゃなくて、世界の茅葺きのネットワークもありますので、そういうところに共有して広がっていけばいいなと思いました。

あと、茅葺きに住んでいる方がグループにおられたというのですごくびっくりして、そういうところも皆さんでぜひ一緒に発信したり、差し支えがなければしていただければ、私もウオッチして楽しみにしていますので、頑張ってください。

町田：では、続いて３番目のミツバチのことをやってくれた班ですね。お願いします。

中学生：ハチミツ班では、たくさんの質問をいただいたんですけれども、まだ調べ切れていないハチミツに関してのことをこれから調べてみたらとか、せっかくハチミツの調べたのでまた新しいことを調べてみたいと思いました。

町田：ありがとうございました。では、東京農業大学の大学院生の方、お願いします。

会場参加者：私の専攻は町田先生が所属している地域創生科学専攻で、学部のときにそれこそマルハナ

バチが、訪花昆虫だと思うんですけれども、そういった勉強をみんながするんですが、ハチミツを考えるときに、やはりハチミツだからハチのことも考えなくてはいけなくて、ハチのことを考えるのだったらハチの生態も考えなくちゃいけないという、一つのことを多角的な視点から見られているのがすごくいいなと思いました。ぜひこれからも継続的に考えていってほしいなと思います。

町田：では最後高齢者の方とかそういった訪問をして学んでくださった班、お願いします。

中学生：私たちの班では、今回活動した内容が認知症についての課題や小谷村が抱えている高齢化についての課題について取り組んだんですけれども、御質問をいただいて新たな考えが生まれて、若者が小谷村から外に出ていってしまうという課題だったりもあるので、向き合うべき問題なのかなと思いました。高齢者福祉体験は今回１回だけだったんですけれども、継続的に関わっていって、後輩にも受け継いでいけたらと思いました。

町田：地域の方から御意見をいただけたらと思ういます。

会場参加者：今日は貴重な意見をありがとうございました。高齢者の関係ですが、先ほどの方が言ったみたいに、ぜひ町へ１回出たらここへ帰ってきていただいてお願いしたいと思います。いろいろなところへ行って経験してきて、ぜひ（高齢化率が）50％以上にならないように御協力をお願いします。

町田：発表ありがとうございました。今日は本当に中学生の頑張ってくれた成果と、皆さんの温かい御協力ですばらしいワークショップになったかと思います。まだお時間も許すので、話したいという方、伝えたい方、大丈夫でしょうか。お願いします。

会場参加者：隣村から来ました。私、小谷村の民家をもう何年も見させていただいて、小谷村の民家の材料が素晴らしいんですね。たぶん日本全国こんないい材料を使って建てている建物はたぶんないんじゃないかと。

私は建築をやっているものですから、お客さんに古い家を見てもらって、茅を抜けて雨漏りをしているものを買い取って、それを白馬へ移築した建物が３軒あるんですが、みんな持っていって非常に喜んで、材料はケヤキを使ったり、ナラとか小谷の素晴らしい材料でできていて、そんな建物がどんどん小谷から外へ持ち出されている現状があります。

先ほど、震度５でも耐える建物とありましたが、恐らくそれ以上じゃないかと。造りが非常に耐震というか、揺れに対して強い構造になっていますので、神城地震の後、相当数見させていただいたんですが、みんなちょっとは傾いているけれども倒れてはいない。それだけ強い建物なので、ぜひ地元の人たちが残すことをぜひ考えてほしいなと。このまま行くと、どんどん外へ持ち出される可能性があります。そんなことをちょっと感じました。

町田：それでは時間が近づいてきて、この第４分科会では、草原資源にとどまらず、いろいろな地域の資源を中学生の方が見つけてくれて、それをどう地域に生かしていくのかということを考えてくれました。私が想定していた以上に地域のいろいろな問題と向き合ってくださったところがあり、加えて会場の方も言っていただいたように小谷の豊かな資源というか、宝もいっぱい皆さんと共有できたかと思います。

この小谷村の中学生が頑張って発表してくれた内容を、また今日会場の皆さんがその学びを深めていただいたこと、本当に感謝しています。また子供た

ちが伸び伸びと発表できたのも、小谷村の中学校の
先生の優しく温かい御指導のおかげだと思います。
本当にありがとうございました。

第14回 全国草原サミット・シンポジウムinおたり　～つなげよう 茅場(かやば)が育んだ技術と命～

全体会

コーディネーター
全国草原再生ネットワーク　代表理事　高橋佳孝 氏

司会：全体会を始めます。全体会のコーディネーターは、全国草原再生ネットワーク代表理事、高橋佳孝さんです。それでは、お願いいたします。

高橋：皆様、こんにちは。大変お疲れさまでございます。基調講演の内容がすごかったですね。安藤先生のコーディネートで本当にいろいろなことを引き出していただきました。井田さんの講演もまた、中身の濃い内容でした。それでは、全体会を進めさせていただきます。

各分科会、ものすごく面白い内容で、活発な御意見と、システムもものすごく面白くて、全部聞ければ一番よかったのですが、どうしても重なってしまって、それぞれあれも聞きたいこれも聞きたいというのがあろうかと思います。その概要を皆さんと共有して、その中で課題を抽出して行政への要望等があればお聞きするようにしたいと思います。

いまさら何をまとめるんだというところはありますが、皆さんで共有をしながら、ざっくばらんにいろいろな思いを語っていただければいいかなと思っています。

それでは、最初に第１分科会の井田さんのほうから、第１分科会の内容について御説明をお願いいたします。

井田：第１分科会では、高橋栞さんの事例報告の後、議論を行いました。事例発表は主に三つの内容で、一つは非常に多くの全国の自治体へのアンケート調査に基づく内容で、茅場の現状について、茅場を今持っているか、過去にあったか、そういったようなアンケートに関する発表でした。２番目が、実際に高橋さんが現在関わっている妙岐ノ鼻湿原での茅場の利用における茅場の評価及び茅の評価に関する内容でした。三つ目が、茅場の利用及び管理の未来に向けてどうあるべきかという議論が交わされました。

１個目、２個目の研究内容に関するもので活発な質問がありました。メインは、やはり三つ目になるのかなと思います。茅場の利用・管理の在り方ということで、生物多様性をメインにこの第１分科会はやったのですが、生物多様性は、結局守るためにどうにかするというよりも、茅場をきちっと利用して管理して、その結果、付随的に生態系や生物の多様性が守られてきたものでもあるからということで、今後もやはりそうある、それがやはり理想の姿だろうという前提に立って、それぞれ、ではどうするか、どういうことをすれば生物多様性が守られて、茅場を利用して生物多様性が守られる社会を築くことができるのかということを主体に、それぞれ事例報告があったり、議論が交わされました。

その中で、やはり印象的なこととしては、高橋さん御自身が若者の会というようなものを実際に立ち上げて、若者で茅場の火入れや茅刈りなどの活動に、なるべくみんなで行って楽しもうということをもう実践されている。その中で生まれた言葉が私は非常にすてきだなと思ったのですが、多様な人が多様な目的で多様な関わりができる場所をつくろうと、そういう場所ができて、場を生み出すような仕組みをつくっていければいいかなというようなことで、これは茅場に限られないなと思いました。

そうすることで、いろいろ属性、言葉が違う、茅場と言っても「なんだそれ？」と言う人もいるし、「茅は大事だよ」と言う人もいる。全く知らない人もいるけれど、そういう言葉が通じないと言うと語弊があるかもしれないのですが、違わないけれども、そういう茅場という場を通じて同じ目線に立つためにどうしたらいいかということが、活発に議論された会となりました。

若者をどう巻き込むのか、どうやったら価値を広げられるのか、具体的な課題を、それぞれ団体に所属している方たちはお持ちだと思うのですが、そういった中で、落としどころにはうまく落とせなかったのですが、最終的には、やはりその場をつくるように、みんなができることを、小さくてもいいから実践していこうという形に結論としてはそうなりました。

せっかくなので、高橋さんが今つくられている「note」というブログに登録してくださいと、QRコードが前に出ていたので登録していただいて、高橋さん御自身が今メーリングリストをつくって、それで情報交換ができる場を、それも一つの場ですね。現場に行かなくても共有できる場を、やはりすぐできてしまうことをやり始めている。とてもスキルが素晴らしいなと思いましたので、会場の皆さんもぜひ登録してという形で実践していただきました。そして、会を閉じたという形になります。

高橋：生物多様性そのものをいろいろ論議するというよりは、結果としての生物多様性を守るためにどうやって参画していくかという、そういう仕組みづくりの方法を重点に考えられたということですね。多様な人たちが多様な目的で集まる場をつくる。そのことは、生き物に対しても影響を及ぼすでしょうけれども、上野さん、茅刈りの将来を考えるとき、担い手の問題というのは当然論議されると思うのですが、そういう展開を今の御提案について何かコメントはありますか。

上野：まさに第２分科会でもその点を少し話したところがあって、保全のための保全ではなく、使って育てるものなのではないのかということ、草原や山も。第２分科会の中でも、茅刈りをしたいのですがどうやったらいいですかという声が早速上がったり、すごく楽しかったのです。うちにも来ませんかとか、私たちも11月に茅刈り茅葺きワークショップをする機会がありますよとか、具体的に一歩を踏み出すようなところがあったのですが、結局担い手の問題が、茅刈りと茅葺き両方とも大きな課題でした。小谷の場合は、茅場はあっても刈る人がいない、時期が短い、雪が降る、それをどうしようということ。それから茅葺き職人は少し技術的に難しい、習得に時間がかかるという側面があるということで、この辺を段階的に関わる人、関わり方をやはり多様にするということで受け継いでいくという。茅葺きの総合力がすごいという御意見もあったりして……、ごめんなさい、今、質問は何でしたか？

高橋：続けて、第２分科会に報告いただいても結構です。

上野：いいですか。では、第２分科会は、「茅刈り取茅葺きを未来につなぐ」というテーマでお話をしました。まず、敬夫さんの息子さんで、今代表の松澤朋典さんに少し御発表をいただいたのですが、その内容は、この小谷の四つの茅場、茅刈りされているか、野火つけをされている茅場で、具体的にカリヤスが何万把取れるのか。全部でいうと、今でも２万把取れます。そういう茅場だということ。

それと茅葺き職人さんは茅刈り職人さんであるわけですけれども、茅葺きに使う材料そのものも、材料採取自体を自分たちでやるのだ。だから山に暮らす人の暮らしの技と知恵そのものだったと思うのですが、おしぼこにするような雑木を山で切ってくる。それは林業の人が使わなくて捨てているようなところだったりもする。そういうところと結びつける活動をしながら、材料採取を全部自分たちでやっていって、間引きながら使って育てることで山も豊かになるのではないかという、茅だけではなく、茅葺きに使う材料そのものの知恵もお話しいただきました。

今、小谷に10軒茅葺きが残っている。また多雪地帯に対応した葺き方をしている。松澤敬夫親方がよくおっしゃるように、「二三ぷっくり、四五六ぴっしゃり」というもので、そういう屋根の葺き方があるということ。それはなかなか覚えるのに時間がかかる。

関係人口を増やすにはどうしたらいいのかということで、新たに取り組んでいらっしゃることが、少し話にありましたけれども、白馬高校のスキー部の学生さんが茅出しを、トレーニングを兼ねてする。

それからこの頃ではキャンピングカー協会の人がここに訪ねてきた人に茅刈りを体験してもらって、それに触れていただいてリピーターになっていただく。それから小学校６年生が竪穴住居を毎年つくっているような、授業の一環でつくるほうもやっている。小学生はワラビ採りをやっている。

それから、道の駅に茅を使ったアート作品を展示して、それは子供たちが刈った茅で作ったそうです。この山の風景をアートにした、壁面のアート作品というか何というか、壁面の飾り物なのですが、それをなぜ作ったかというと、新しい需要ということでももちろんあるのですが、それは室内にあるので劣化しないので、それを見て20歳、30歳、40歳になっても自分たちが刈った茅がここにあって、ふるさとはこういうものなのだというふるさとの一つの思い出になればということでその作品がつくられた。ただ新しいものをというのではなく、子供たちのふるさとづくりにどんな方法があるかなということで、そういうことをされたということです。

そんなお話を聞いた後、皆さんからの質問などがとてもたくさんあって、時間いっぱいそういうお話だったのですが、まず出たのが、若い方からの質問で、茅葺のメリットは何か、それを説明していく必要があるのではないですかということ。これは非常に難しい質問でしたけれども、松澤さんが先ほど来お話をされている、単なる屋根だけではないこと、その背後にある恩恵も含めて大きなメリットがあるということをお話しされたのと、茅葺き民家の所有者さんも中にいらっしゃって、まず、その心地良さというのは本当に格別だということ。涼しいということもそうですし、雨音がしない、音が柔らかいということです。それから、中で火を焚ける。中で火を焚いて、今ここで生火を焚いたらたぶんみんな死んでしまいます。そういうすごいところが茅葺きにはあるのではないかと。そういうことが災害時にもやはり水と火と食べ物があったら生き延びられるという、災害が今多い時代に改めてその価値というものが見直されたというか、そういうものが大きなメリットというか、恩恵というものではないかというお話と、答えの幾つかでした。

このことは、これからの課題としてもやはりそういうこともすごく大きな、単なる屋根ではないので、うまくみんなが共有をできてない、もっとしっかり言語化して、みんなが説明できたりするようにならなければいけないということが一つの課題と、３人に伝えましょうということを第２分科会でも広げることで、それから交流人口、関係人口を増やすということ、こういう宣伝が本当に必要ではないですかというのが若者の意見でした。

それから面白かったのは、関係人口をどうやって増やすのかということについてはいろいろな意見がありました。

お一人は「茅刈りウィンタースポーツ計画」をしたいと、茅刈りはスポーツだ、ある程度難しい、面白い、気持ちいいということで、冬のスポーツにも勝るとも劣らないというものではないのかなということをおっしゃった方。それから、茅葺きはとにかく楽しい、気持ちいい、これが屋根になると思うととてもうれしい、それが何ごとにも代えがたい喜びだったとおっしゃった方もいました。

それから、茅刈りはやってみると本当に面白い、楽しい、気持ちいいということがとても大きいということ、それをもっと広げないといけないかな。中には、今度茅刈りに行きたいという方も生まれました。「今度、10月20日空いているんですが、小谷で茅刈りができますか」と言う方がいたり。

だから、そういうことがあったときの受け入れる仕組みがまだまだできていなかったりするので、茅場があって刈り手がいないところは、そういう仕組みのほうが、少し第１分科会でお話しされたのと一緒で、屋根屋さんだけではなく、そういう新たな受け皿が必要なのかなということ。

一番のキーワードは、「使って育てるということ」。利用させてもらって、そうしたらそれが草原、茅場、ひいては地球環境ということまで、自分たちが使うことでそのように大きく、それで自分たちの心地良い環境を手に入れる、一緒に使って育てると

いうことが、まずその視点が大事なのではないかなということです。

最後は、茅葺きの材料集めから茅刈り、そしてその住まいとして、また動物、生き物の住まいとして、その総合力というのは本当にすごいということが、今日一日の皆さんのお話から分かった。この総合力をもっと伝えなければということと、自治体の皆さんにはいろいろなメリットが、その場所で茅葺きを持っているから茅葺きの葺き替えのメリットがあるという関係ではなく、自分は子育て時代の悩みをそこで茅刈りをしながら相談できるというメリット、あるいは気持ちいいメリット、心地良い住まいを得られるメリット、メリット、恩恵はいろいろなので、そこをそれぞれに自治体も補助できるところがもっといろいろあるのではないか、ただ屋根を葺くだけの補助ではなく、そういうところにもつなげていきたいというような、まとまりませんけれども。

高橋：ありがとうございます。茅葺き屋根があることのメリットですよね。それは茅場にも通じるし、地球環境にも通じていると。先ほどおっしゃっていた関係人口を増やすことにも通じるし、楽しい、うれしいという期待を育てることにもつながるという。

そして安藤先生がいつもおっしゃっているように、農業や畜産にきちんと回すことによって地球環境に優しくなるし、おいしいもので皆さんが幸せになるしという、そういう総合力がすごいということをしっかりと発信できる仕組みが、まだ今そろっていないんだろうなという感じでしたね。町田先生、今のお話を聞いた感想は何かありますか。

町田：子供たちのところでも情報発信を発表する班がありました。第４分科会では、小谷村の中学３年生の皆さんが１年生の頃から里山や生態系などのいろいろなことをテーマに勉強してきたので、その集大成として里山と地域の問題解決を提案してくれました。その中で、草原の情報発信をしてくれた生徒もいて、茅葺きの動画をつくってくれました。それが世界に発信できるくらいの情報力になるという意見も参加者の方から出ていました。

高橋：それでは第３分科会、まさしくその草原を管理して茅の採取技術をどう学び伝えるか、伝承するかという、非常に肝のところでしたが、武生先生、よろしくお願いします。

武生：第３分科会では、茅場の維持を担う組織の運営やそのポイントについて話をしました。ここでは、千国の牧の入茅場の運営をしている親沢北観光委員会の栗田さんと、雨中ショクの茅場の理事をされている雨中林野組合の荻澤さんの２人に、それぞれの管理・運営の苦労話などいろいろな話を伺いました。

２人それぞれから、やはり当然のように、過疎化、高齢化による担い手の不足という問題が挙げられているわけですけれども、二つの地域がとても対照的で、千国の牧の入茅場の運営は、昨年、最後の茅葺き屋根のお宅が金属を被せたということで、茅葺きをしている意味がなくなったと。本来茅葺き屋根をつくるための茅場を、茅葺き屋根を持ったお宅が１軒もなくなった中でどうやって維持するモチベーションを持つのかが大きな問題になっているということでした。

ただ、地区の中ではもう昭和40年代くらいに、ほとんどの家屋が金属を被っていたんですけれども、この地域は、やはり今日もお話を聞いていてすごいなと思ったのは、90軒近い地権者の人たちが毎年義務人足で、先ほど茅場を維持するメリットは何かという話がありましたけれども、メリットを一切考えているかどうか僕は聞きませんでしたが、義務と言われたら全員が出てくる、そこに参加するというのは当たり前として地区が維持されてきたという話を伺いました。たぶん、そういう義務人足として出てきている中で、いろいろなことを学んで地区運営がされたかと思うのですが、その辺のメンタリティーというのが、もう少し時を経ていくと面白いのかなというところです。

一方で、雨中の茅場は、移住者の多い地区ということで、もともといろいろな人を受け入れるという土台があった。同時に、新しい集落ということで、祭事も含めて、いろいろなものを自分たちで新しくつくり上げている最中であるということもあって、伝統的にずっと維持してきたということよりは、むしろいろいろな人が関わり合いながらやっていく。その中で一番大きいモチベーションは、もしかするとお酒を飲むための一つの面かなという、荻澤さんらしいコメントがありましたが、これもまた一つの考え方です。モチベーションに、そういった地域の

交流の場を位置づけて、茅葺きそのものの直接的経済利益ではないのですが、地域を維持するためにあえてそういう場を使っているというお話でした。

お二人に共通するのは、基本的には地域をどう維持していくか、茅場だけではなく、地域をどう維持していくかということが基本だったんですが、例えば荻澤さんからは、茅場の維持管理のための様々な作業だけでなく、日常的な堰、用水路の掃除であるとか、いろいろな形で、実は小谷というのはまだまだ若い人たちを教育する機会があって、そういったところでの教育と茅場の教育、同じウエートですけれども、そういう場で若い人を教育していく場、それとしての意義がある、茅場を維持していくことに意義があるというお話をいただきました。

最終的に、会場からはそういった地区運営というだけでなく、茅場を維持することに直接的な経済的なメリットがあるかとか、いろいろな話を聞いて、かなりいろいろな地域の方からのアドバイスもあり、いい情報交流ができたかなと思います。

教育であったり、茅材としての直接的な利益であったり、観光であったりという形での運営のための仕組み、調達の方法もあるなと伺っていました。それからモチベーションに関しては、各地域悩みはあるようですが、なかなか多くの地域がモチベーションを維持するのが難しいところではあるのですが、そういう意味では、お二人のお話はとても参考になったかと思います。以上です。

高橋：私も今初めて聞いたのですが、小谷村はみんながっちりとした固いコミュニティーなのかなと思ったら、いろいろなパターンのものが実際にはあるんですね。そういうものが村内にたくさん存在しているということは、ある意味弾性力があってとても強いことかもしれない。今後訪れるいろいろな担い手不足も含めた社会情勢の変化に対して、どういう選択をするかという選択肢がたくさんあって、ある意味強いことかもしれないです。面白いですね。井田さん、今のお話を聞いて何かありますか。

井田：やはりメリット、デメリットだけでは済まないものもあって、未来の場をつくるということに対してもそれぞれの思いがあって、自然が好きな人もいれば、ただワイワイガヤガヤするだけ、お酒を飲んでそれでもうOKとする人もいる中で、やはりそれこそそれぞれの多様性を大事にしていくことにつながることかなと思いました。ちょっと言葉足らずですけれども。

高橋：それも生物多様性の一つだろうと思います。

では、第４分科会、とても面白い催しをやっていましたね。びっくりしました。

町田：ありがとうございます。第４分科会では、「草原資源を生かし、次世代につなぐ」をテーマに、小谷村の中学３年生の皆さんが成果発表をしました。

小谷村の中学３年生の皆さんが、茅葺き屋根の葺き替え作業、武生先生と私も一緒に取りくんだ草原での野外学習、そのほか養蜂見学や高齢者の福祉体験学習等生徒たちの学びと草原を掛け合わせて、四つのテーマを話をしてくれました。

分科会は、子どもたちの学びと、参加者の方たちのワークショップ型にし、中学生の皆さんと会場の皆さんと一緒に交流を深めることができました。中学生の頑張りと、参加者の皆様の温かい参加の下で成り立った分科会となり、本当に感謝申し上げます。

では、中学生の皆さんが考えてくださった四つのテーマを御紹介していきます。まず、一つ目の班は草原の食の恵みという観点から、ワラビを生かした地域活性や、ワラビと草原の維持管理の関係性を発表してくれました。まず子供たちは、走り回りながらワラビを採ったその楽しさというところもを感じてくれていて、それからワラビと小谷野豚を合わせたおいしそうなメニューなどたくさん考えて道の駅に提案してくれる等実践的なテーマでした。

二つ目の班は、草原の情報発信がテーマでした。デジタルネイティブ世代の生徒達は、SNS、TikTok用の茅葺き民家の発信やワラビの恵みの発信を、すてきな音楽をつけて動画を制作しました。会場の参加者からも、世界にも発信できる情報だというお話

もありました。

３班目は、草原の豊かな生き物となりわい、ミツバチの養蜂をテーマに発表してくれました。こういうところも、小谷のミツバチや草原の生かし方、生態系サービスから見た提案となっていました。

最後の班は、多くの草原をはじめとする地域の抱えている高齢化問題に向き合ってくれました。生徒達は高齢者福祉体験を通じて、認知症の方や高齢者の方と一緒に食事をしたり、農業をしたりすることによって、中学生と高齢者が一緒に作業を体験しました。草原の維持管理を共に行うことで、高齢者の方も元気に、子供たちも学びを提案してくれました。草原をキーワードに子供たちがふるさとの課題の視点からこれだけのテーマが広がることを実感しました。

最後に会場の皆さんが御意見をくださいました。今回の分科会では子供たちの目線から見た小谷村、草原のぜいたくとも言えるぐらいたくさんの恵みがあって、それを生かしていく提案となりました。かなりハイレベルな発表を小谷村の中学生がしてくれて、これだけ地域の未来のこと、ふるさとのこと、未来のことを考えてくれている子供たちが、また小谷村に本当に戻ってきてくれるためにはどうしたらいいのか、そういったところまで議論が深まったかなと思います。以上です。

高橋：草原をテーマにしただけで、ものすごくたくさんの課題について、それぞれが論議をしていったり、子どもなりの発想で提案をして、それに大人たちも加わって、小さなコミュニティーを四つぐらいつくって論議されていましたね。非常に面白かったです。

将来の担い手である子どもたちにとって、茅場というのはどういうふうに捉えられるかというときに、そういう様々な切り口と非常に結びついている。草原そのものが社会の成り立ちに関わっているし、自分たちの将来にも関わっているという、非常に面白い、自発的で面白いテーマをやってらっしゃいました。そういう意味で、とても楽しく聞かせていただきました。

一応今、四つの分科会から御報告があったんですが、時間はかなり限られるんですが、それぞれ今初めてお話を聞いた皆さんもいらっしゃると思うんです、会場のほうから、それぞれの分科会、どこでも結構ですので、御質問等あれば聞けたらと思いますが、いかがでしょうか。何かございますか。よろしいですか。何か疑問があれば。もうかなり皆さん疲れていますね。それではこちらで進めていきたいと思います。

草原の価値を見直す、草原の価値についてはいつも言われることですが、価値をどう継承するかといった問題です。

今、世代間の問題や、あるいは集落、コミュニティーの問題、いろいろ切り口はあったんですが、今後小谷村でなくても、全国の草原をテーマにしてもいいんですけれども、草原なり茅場の伝承についてどういうことが提案できそうか、それぞれ今回の分科会の中から思われたことを発言していただければと思います。町田先生からいかがでしょうか。

町田：私たちの第４分科会で子供たちが動画での情報発信を提案してくれたところが、すごく心強いかと思います。実際に茅葺きに住んでいる中学生もいて、子供たちの目線でも入りやすい、配信力もある、それに期待するところがありました。

高橋：では、武生先生。

武生：やはり今後はいろいろな地区の間の情報交流がとても大事かとこの分科会では思いました。特に、実際に茅場を運営している方々と使っている方々や流通させている方々の間の情報提供が、必ずしもうまくいっているわけではない。そのあたりがうまくつながっていくと、もしかするともう少し運営も速やかにいくのかなということを、今日の分科会の、特に後半のディスカッションで強く感じた次第です。

高橋：上野さん。

上野：今後につなげていくのにプロフェッショナルだけを育てるとか、広げていくというのではなくて、いろいろなところ、何て言うんでしょう、いろいろな関わり方があると思うんですね。だから、皆さんの下にその知恵と技がまた戻ってくるような。たぶん80代ぐらいの方の下にはあったと思うんです。その技と知恵が。それが今途切れてしまって、かろうじて職人の下にあったり、地元の下にあったりするものが、もう少し皆さんの下に、暮らしとその技と知恵が戻ってくるようなことが、プロフェッショナルを育てるということだけじゃなく、大事かなと思いました。

高橋：プロフェッショナルだけでなく、幅広い皆さんにそれが実感できるような仕組みをつくる、それで関わりを増やしていくということですね。井田さん。

井田：先ほども申し上げましたように、多様な人が多様な目的で多様な関わりができる場をつくると。高橋栞さんが御提案された言葉に尽きるかなと思っております。このいいところの一つは、茅場の現場にいなくてもいいんだよ、現場に行かなくても、別に茅刈りしなくてもいいんだよということかなと思っています。もちろん茅刈りに来てもらって茅を葺いてもらってもいいんだけれども、SNSで発信するだけでもいいし、そこに「いいね」するだけでもいいし、やはりそれが広がっていくことが大事かなと。最初は小さくても、大きな力となっていくものではないかと思っていますので、やはりそういう場づくりに力を入れていければいいのかなと、今はそうですね。

あとは、やはりそれをやり続けること、世の中、時代が追いつくまでやるしかないのかなと思っています。以上です。

高橋：いつの間になくなってしまうことのないようにしないといけないですね。その辺のスピード感もまだ必要かもしれないし、あらゆるツールを、今の若い人たちはたくさん持っていらっしゃるのでそういうものを活用していただくといいのかなと。

井田：若い人たちは、全部押しつけては駄目だとは思うんですが、やはりそういうツールを使うのは本当に早いですので、そういうところはどんどん若い人にお願いしていったらいいのかなと思っています。

高橋：そういう意味でも関係人口が増えるといいですね。

井田：若いというのは、決して年ではないので、気持ちで違うと、念のために。

高橋：今いろいろと御提案をいただいたんですが、それを実現するに当たってというか、今後行政のほうでどういう関わりをしてほしいかということがあれば、あしたはサミットがありますので、それぞれの皆さんから。極めてローカルなことでも結構ですし、日本全国の草原に対することでも結構ですし、一つか二つぐらいお話しいただければと思います。では、また井田さんのほうから。

井田：自治体への要望は、自然を守ってほしい。私は自然が好きで自然の研究をしているんですが、行き着くところはやはり文化を守らないことには自然は守られないなと、今思っています。自然を使ってきたからこそ、日本の自然の恵みを生かした文化が維持されてきた。けれども、いろいろな経済的な理由から、自然素材というものが何か面倒くさいものとなってきて、それとともにスピード、あるいはお金第一になってきて、文化も失われてきている。それも一つの流れではあるとは思うんですけれども、やはりそういう何百年と続いてきたものには必ず意味があると思いますので、そういう文化を維持するための施策及び補助をしっかりやっていただきたいと思います。

古い建物を守るために、その素材である森林や草原、草原に限らず、木でつくっている、要は木材ですね。それを調達した里山をいかに利用していくかというところも大事かなと思っています。それが結果として、自然が健全な生態系になっていくのかと思います。なかなかうまく言えませんが、そんなところになります。

高橋：上野さん、何かありますか。

上野：まずは、草原と茅葺き文化の基本法、まず茅葺きとか草原というのは、国民にとって大事なものだと、棚田基本法がありますね。あのような形で、まず「草原・茅葺き文化伝承基本法」、まだ仮ですが、そういったもので大きく位置づけてしまってほしいと、それは国への希望です。

それから、自治体の皆さんが補助を出してくださるときに、例えば茅葺き屋根の葺き替えに補助が出ますよという理由は、炭素の固定もしていますし、理由は幾らでも本当はあると思うんですね。なので、そういった保全に、環境に寄与しているという視点でもって、例えば、屋根の葺き替えをするとき

には補助を出します、あるいは茅葺き民家に住むのだったら補助を出しますというのがあってもいいなと思います。

それから、さっき減災、山火事を防ぐために小谷で野焼きをやっているというお話があって、山火事を起こさないために野焼きをやる、それからその野焼きを安全にするための防火帯切り、この辺に直接的に補助が出るといいなと。具体的にもうぱっと出してもらったらいいなと思うのはそんなところですが、そういった基本法などで大きく位置づけて、細かなところに結びつけていけたらという希望です。

高橋：壮大な提案をいただきました。基本法によって大きな枠組みをしっかりとつくって、実際に補助をするときにはその理由づけというのは非常に多様なんだと。減災・防災も含めて、それから今の脱炭素社会の最先端を行っているんだというような理由をしっかりとつけてほしい。そのことによって納得するような補助の体系があったらいいねということですね。ありがとうございます。

上野：省エネも。

高橋：省エネもですね。ありがとうございます。武生先生。

武生：日本は学校教育は充実しているんですが、社会教育がどうしても不足しているというのが大きな課題です。そういう中で、今年千国地区のお祭りを見に行って、今日来ていただいている栗田さんが、子供相撲とか一生懸命やられているところなどを見ると、お祭りやそういったいろいろな形で地区の子供たちを育てるというのはとても大事なことだなと感じます。それが最終的につながって、地区運営になり、茅場の運営になるんですが、こういうのは実は社会教育の一環です。

学校教育の中にはなかなか社会教育に子供たちを放すことができないんですが、ぜひ、例えば今の総合教育をもともっと充実していただいて、子供たちの教育の中に里の中でのいろいろな生活文化などをどんどん取り入れていただくといいなというのは一つあります。これは実は小谷だけではなくて、小谷の人たちはよくやっているほうですが、全国的にもこういう機運をどんどんと高めていただきたい。

それは分科会の中でもある方からあったんですが、茅場を使って茅場の草原教育を議論している環境教育団体が、団体を維持していくには、修学旅行とか、学校規模の旅行を受け入れないと維持できない。とすると、茅場でなくて里山の様々な自然を題材にした教育をしている団体、今、頑張っているところがいっぱいあるんですけれども、こういうところが生きていくためには、やはり学校教育の中にもっと積極的に修学旅行とか林間学校とかでこういう場を使うというシステムをつくってもらって、そこに積極的にお金を落としてもらうというシステムができてくると、もっと運営している団体やそれを使って観光している団体も、運営ができるんじゃないかと思います。その辺も教育のところ、特に国を中心にしたところに期待をしたいと思っています。

高橋：学校教育という場でそういうものをやりながら、それを入り口としていって地域教育に広げていく、あるいはそういう団体とのつながりも広げていくという形ですね。ありがとうございます。町田先生、何かございますか。

町田：今回の第４分科会での意見から出たところでは、今回子どもたちが草原と食の恵みにつながりを感じて調べてくれた生徒さんが多かったです。やはり草原というのが、人と自然との豊かなつながりの場になるので、地産地消の観点からも貢献度が高いという話が出ました。草原の恵みで、例えばワラビが給食に出る等、学校教育と草原学習の一体的なつながりが求められることも考えられます。また、子どもたちが将来ふるさとに戻ってきてくれるような、移住の方も含めた地域づくりの施策の御意見も出てきました。

あと、今回の分科会とはちょっとテーマが違うんですが、こういう草原での課題も自然共生サイトで活用できないかなと思っているところです。

高橋：環境省への発言も最後にありましたけれども、自然共生サイトはもう募集が終わったという話を聞いたんですが。

町田：また再度募集しますね。

高橋：そうですか。ぜひ本物の自然共生サイトも見ていただければと思います。ありがとうございました。そろそろ時間が迫ってきましたが、最後に質問等は本当にございませんか、皆さん。よろしいですか。では、最後に一言、皆さんの思いを、小谷村に対するエールでも結構ですし、日本の草原に対する思いをそれぞれ述べていただけたらと思っております。では、井田さんからお願いいたします。

井田：最初にいつも振られますね。私、随分長く小谷の茅場にお邪魔させていただいて、毎年１回は来ているかなと思うんですが、小谷の皆さんには「本当にありがとうございます」の一言に尽きるんですけれども、今回こうして本当に大きな会ができて、草原サミット・シンポジウムができて、まさに今回が非常に充実した関わりの場だなと思っております。今日、名刺交換をいっぱいさせていただいて、交流できればいいかなと思っておりますので、ぜひとも、また引き続きよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

高橋：交流や活動の場をまた新たに提供できたらありがたいなと思います。では上野さん。

上野：小谷に通い始めてもう何年もたちますが、本当に小谷そのものと、そこにいらっしゃる皆さんが本当に来るたびに大好きになってくるという、そんなところなんですけれども、今日お話しなさった大先輩の敬夫さん、そして朋典さんを見ていて、一つは謙虚でありたいなと思いました。自然に対しても人間優位でコントロールするとか、火をコントロールするとか、何かちょっと違うなと思っていたんですが、人に対しても自然に対しても、何か謙虚でありたいなと。この小谷の皆さんと一緒に活動する中でそこは学ぶところで、自分にとっては、こうありたいという自分ができているわけではないので。

あと、今日お集まりの180人ぐらいいらっしゃるんですかね。それからオンラインで見ている皆さんも、１回どこかで、最寄りの茅場で茅刈りをしてみませんかと、お一人ずつどこかで、近くでやっていると思いますので、そこからまた次の出会いも、何か感じることもあるかなと思います。私は茅担当だったので御提案したいと思います。本当にありがとうございました。

高橋：では、武生先生、お願いします。

武生：僕は通い始めてからいろいろな形で関わらせてもらっているんですが、今年も雨中のお祭りに参加させてもらって、おみこしを担がせてもらって、たくさん酒を飲ませてもらったんです。荻澤さんも70歳になってもまだ若い、まだまだ走ると言っていましたが、私もぜひこれからも来る間は走らせてもらえたらと思っているところです。

それから少し大きな話をすると、このせっかくの機運をここで終わらせずに、今日いろいろなアドバイスをいただきましたし、この村のいいところをたくさん再発見したかと思うので、できればこの先、これをもう少し進めていただければと。

例えばですけれども、ユネスコのエコパークとか、幾つかトライできることがあると思うので、小谷村のせっかくの素晴らしい自然と文化を世界に発信していけたらと、そういうことを少しお手伝いしたいと思っています。以上です。

高橋：では、町田先生、お願いいたします。

町田：小谷村は、武生先生を通じて実習でも通わせていただき、御縁があり今回は中学校の先生方と一緒に２月ぐらいから打合せをして今日にいたりました。実感したところは、やはり今日子どもたちが素晴らしい発表をしてくれたのは、中学校１年生からの地域学習の積み重ねがあって、草原や里山等、地域を通じた教育の継続性が非常に重要かと思いました。特に草原は、生物多様性から、それをバックグラウンドの社会課題まで、子どもたちが草原を見つめるといろいろな課題が見えてくるので、草原を通じた教育の重要性と継続性がすごく大事だと思いました。

そのためにも、草原が持続した形であるためのシステムが、武生先生が言ってくださったように、各地域の皆さんが悩んでいる、どうやったらこの草原を維持できるのかというところで、よいフレームワークができるとよいと思いました。以上です。

高橋：時間がそろそろ来たので終わりにしないといけないと思います。今日も本当にたくさんの要素やアイデア含めていろいろ飛び交っていましたね。なかなか整理するのも大変だろうなと、茅場一つ取ってもこんなにたくさんの問題があって、楽しみもあるんだろうなと実感しました。それと、茅場の維持とそれに伴う茅葺き屋根の維持というのは極めて合理性の高いシステムだなというのがよく分かりまし

た。合理性が高いということは持続性が高いということだろうと思いますし、しかも最近は様々な多面的機能という言い方で、草原や茅場の価値というのは皆さんが強調されるようになってきたし、この枠組みもようやく少しずつ見えてきたかなという気がします。

ただ、茅場や草原をなぜ守らなければいけないのかという答えはなかなか出ていないですね。これは私たち自身が考えなければいけないことだと思いますので、それぞれ立場は違うかもしれませんけれども、今日いろいろと情報を得た中で、行政への働きかけ等も提案されましたけれども、大きな枠組みの提案もありました。そういうものに発展していくように、先ほど武生先生がおっしゃったように、これからが出発、このサミットの経験を今から出発点として、まずこの小谷村が発展していくように祈念して、お願いをしたいと思っております。

長い間、午後から大変な中で皆さんお疲れさまでした。基調講演をいただいた安藤先生と松澤さん、それから報告をいただいた井田先生、今日最後に全体会で登壇していただいた４人の皆様に、最後になりますけれども、盛大な拍手をお願いいたします。

司会：ありがとうございました。高橋さん、そしてコーディネーターの先生方、誠にありがとうございました。では、これをもちまして全国草原シンポジウム in おたり大会を終了いたします。参加の全ての皆様長い時間にわたりまして誠にありがとうございました。

第14回 全国草原サミット・シンポジウムinおたり

～つなげよう 茅場(かやば)が育んだ技術と命～

現地見学会

1．文化庁「ふるさと文化財の森」　牧の入茅場

解説　井田秀行 氏

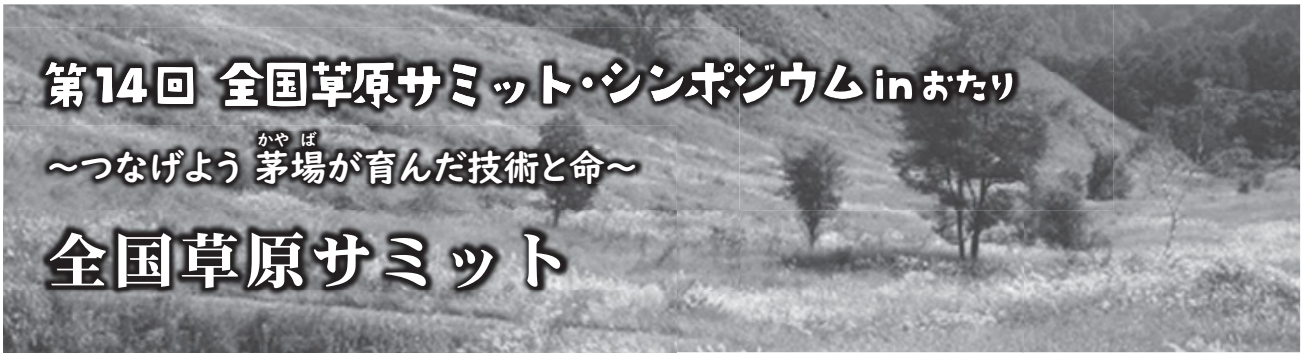
実演　田原重男 氏・中村英子 氏

2．文化庁「ふるさと文化財の森」　雨中ショクの茅場

解説　武生雅明 氏・荻澤隆 氏

3．長野県宝旧千國家住宅（牛方宿）

解説・実演　松澤朋典 氏



司会：皆様、本日は、草原サミットに御参加いただき誠にありがとうございます。昨日から引き続きの御参加の皆様におかれましては、大変お疲れさまでございます。私は、本日の司会を務めます小谷村教育長の関芳明と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

ただいまから「第14回全国草原サミット・シンポジウムin おたり」サミットを始めさせていただきます。

まず初めに、開催地を代表しまして、大会実行委員長でもあります小谷村長・中村義明が御挨拶を申し上げます。

小谷村長：皆様、改めましてこんにちは。お集まりの草原に関わる皆様、それから市町村長の皆様、代理出席いただいている皆様、それからオンラインでも御参加いただいているということで、誠にありがとうございます。

私、午前中は他の公務がありましたのでこの時間からになりますが、午前中は、それぞれの現地見学会ということで出ていただいたのではないかと思います。天候が少し心配されたと思いますけれども、雨が降らなかったと聞いていますので、それぞれ当村の特徴ある茅場を見ていただくことができたのではないかと思っているところであります。

では、これからは今回のサミットの核心部分に入っていくという形になりますので、皆様からしっかりと御協議をいただきたいと思っております。

各市町村の草原の状況がどのようになっていて、どのような課題があって、さらに次世代につないでいくには、どうやって行政であるとか教育団体が関わっていかなければいけないのかなど、今日は短い時間ではありますけれども、皆さんと共に活発に議論をしていきたいと思っています。

そして最後に、今回のサミットの成果としまして、小谷村におけるサミット宣言という形で広く全国に発信していきたいと思いますので、力強い議論をいただきますように、よろしくお願いしたいと思います。会場の皆さんも、しっかりとこの議論を見守っていただきたいと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。以上です。

司会：続きまして、本日大変お忙しい中、御来賓として環境省自然環境局自然環境計画課調整官、笹渕紘平様に御出席をいただいておりますので、御祝辞を賜りたいと存じます。

環境省・笹渕調整官：ただいま御紹介にあずかりました環境省の自然環境計画課の笹渕と申します。私は、昨日のシンポジウムの前の草原の里の認定の授与式からフル参加で参加させていただいておりま

す。この２日間、小谷村の中村村長はじめ小谷村の皆さんに本当に温かいおもてなし、歓迎をいただきまして、この２日間の準備はいろいろ大変だったと思いますけれども、非常に心のこもった素晴らしい場を提供していただきまして、まず深くお礼を申し上げたいと思います。

それから今日は、昨日からも含めて全国からこれだけ多くの草原の関係者の方々が集まって、草原の保全・再生について熱い議論を交わしているという場面に私も立ち会わせていただいて、非常に感銘を受けました。

この小谷村では、茅葺きの文化と草原の保全が非常に一体になって取り組まれているというか、草原を守るということだけではなくて、茅葺きの文化を守ってきた結果で草原が守られていると、そういった自然と文化を一体的に環境省としても考えていかなければいけないと、非常に私自身も学びになった機会になりました。

実は私、数年前に北海道に赴任をしていたことがあって、そこでアイヌの方の話を聞くことがありました。アイヌの文化というのは北海道の文化ではなくて、もともと縄文の文化だと。縄文時代に日本全体にあった文化がたまたま北海道に残っていて、それがアイヌと言われているだけだという話を聞いて、非常に面白いなと思っていたんですけれども、昨日の話を伺うと、草原もその１万年の歴史があり、縄文時代からの歴史のある人の暮らしとともに維持されてきたものが草原として残っているという話を聞いて、そのアイヌの縄文の文化と草原が非常に私の中につながって、目から鱗だったというのが昨日からの感想です。

日本、それから世界全体で、今、自然との共生というのを世界の目標にしていますけれども、では自然との共生は何かというと、そういった縄文から受け継いだ自然との共生の文化を未来につないでいくことではないかと、本日までに感じたところです。

ですから、ここにいるお集まりの各自治体の皆さん、それぞれ草原を抱えていて、それが１万年の歴史、それぞれによって状況は違うかもしれませんけれども、世界が目指す自然との共生に先駆けて、世界の最先端を行っているという誇りを持っていただけるといいんじゃないかと思います。

今日、この最後のサミットで、ぜひこれから未来に向けて草原をどう維持・保全していくのか、そういったことがこの場で議論されて、実際にこの草原が未来に残されていく、そういった場になることを心から祈念して、私の挨拶に代えさせていただきます。

司会：本日は、オンラインを含めて12の自治体様から御参加をいただいております。時間の都合上、参加者につきましては、お配りしました資料の次第の裏面の出席者名簿記載をもって御紹介に代えさせていただきたいと思いますので、御了承をお願いいたします。

それでは、これから会議に移ります。会議の中で、各自治体様からお話をいただきますが、お手元に参加者自治体様の概要についてはまとめた資料をお配りしてございますので、現状と課題を中心として、要点のみ３分以内でお話いただきたいと思います。ここからは、実行委員長の中村村長に議長として会を進行していただきたいと思います。

小谷村長：それでは、ここからは私が進行という形で進めさせていただきます。

まず初めに、前回の草原サミットの報告ということで、東伊豆町様のほうからお願いをいたします。

東伊豆町・鈴木副町長：皆さん、こんにちは。前回サミットを開催させていただきました静岡県の東伊豆町の副町長の鈴木でございます。どうぞよろしくお願いをしたいと思います。次第に従いまして、前回のサミットの報告をさせていただきます。

まず、2020年、令和２年度に開催を予定していましたが、本来よりも１年延期をさせていただいて、2021年９月26日・27日と２日間でサミットを開催させていただきました。

１年遅らせた理由としては、ちょうど世の中がコロナ禍ということで、当時は、開催をしても皆さんに一堂に会してお集まりしていただくことが無理だろうという大前提がありました。１年我慢をして、皆様と膝を突き合わせながらサミットが開催できないかということで、１年間延期というのをやむなく決定して翌年を迎えたんですが、そのときになってもコロナは終息を迎えることができなかったということで、シンポジウム・サミットともども、オンラインを中心にして開催というような、非常に変則的な開催となりました。

当時私は役場の職員として関わっていたという

か、サミットに関わっていたというよりも、コロナの対策の担当をしていた関係で、サミットの開催についてどのようにしていくかということで非常に苦慮しながら、スタッフと考えてやった記憶があります。そんな形でサミットそのものには参加をすることはなかったんですけれども、側面からいろいろ関わったというような形でございました。

まず、その第13回の「全国草原サミット・シンポジウムin 東伊豆」は、副題として「未来へつなごう！　壮大な海すすきの草原」という題をつけました。まず、「海すすき」というのはなかなか一般的にある言葉ではないんですが、このサミットのためにつけたというような内容でございます。

私どもの草原が細野高原という名前で、東伊豆町の稲取地区というところにございます。こちらが大体125haぐらいのところですが、標高が400mから800mぐらいまでにわたって草原があります。一番頂上の800mのところが三筋山という山になっておりますが、そこから草原全体を臨むとそのまま太平洋までつながっていっている景色が見えます。太平洋の海面の揺らぎと、それから風に吹かれるススキに揺らぎが非常に一体感となった景色を醸し出すということで、「海すすき」という表現をさせていただいて会を進めることといたしました。

開催についてはリモートということで、本日は、できればパワポなどを使い様子を見ながらが本当はよかったかなと思うですけれども、なにせリモートがほとんどという形で、全てパソコンの画面の中で出来事が進んでいくというような形でしたので、映像の配信等でやられるのは今も一緒ですけれども、実際に現場もみんなリモートという形でやらせていただいたものですから、映像でも紹介は難しいということで、今日は言葉だけの紹介にさせていただくという形になっております。

サミットの中では、前々回の開催の宮崎県の川南町と串間市さん、これは共同開催ということで行っていただきました。両市町を代表して、川南町長の日高さんから、前回の報告をいただきました。その後、今日御参加の全国草原再生ネットワークの会長の高橋様、非常に御尽力いただきまして誠にありがとうございました。高橋様よりシンポジウムの報告・問題提起という形で発言をいただきました。

今回のパンフレット等にも出てきますけれども、「共創資産」という言葉、資産を共に未来へ残していくということが、すごくその一言に表れているなと、誰にでもその望んでいることが分かってもらえるような共創資産という捉え方、そういう表現をしていただいて、保全と利用と継承といった側面をどうしていくかといったことで、サミットを行うことによって、いろいろな発想・アイデアが生まれるといった、非常に有意義な場になったことは間違いないなと思っております。

その後、前々回開催の宮崎県の川南町・串間市の両市町を含め、兵庫県の新温泉町、岡山県の真庭市、熊本県の高森町、南阿蘇村、本日もお越しいただいております広島県北広島町、それから島根県の大田市、そして当町の九つの市町村により、各自治体の取組と課題を発表していただき意見交換をさせていただきました。主に維持・管理・保全といった内容での議論だったと感じております。

それから以前から提案・議論されてきましたが、今回もシンポジウムの前に行われておったかと思いますが、「未来に残したい草原の里100選」、この事業についても、前回のこの選定事業の第13回を皮切りに、募集アナウンスをさせていただくこととなって現在に至っております。その後の経過は皆さん御承知のとおりで、今回も認定授与式が行われながら進んでいるというところでございます。

最後になりますけれども、保全活動の支援、観光資源としての草原と自然観察など、教育・文化の調和と継承、生活の中にある草原の利用への創意工夫の支援、地域振興に活用できる社会環境の整備など、そういった内容で「東伊豆宣言」を採択していただき、閉会をすることができました。前回の活動報告とさせていただきます。

小谷村長：東伊豆町様、ありがとうございました。ただいまの報告に何か御質問がございましたらお受けしたいと思いますが、よろしいですか。

【発言者なし】

中村小谷村長：それでは続いて、シンポジウムの報告と問題提起ということで、全国草原再生ネットワークの高橋会長、お願いをいたします。

全国草原再生ネットワーク・高橋会長：皆さん、こんにちは。全国草原再生ネットワークの高橋です。昨日このサミットに先立ちまして、全国草原シンポジウムというのを開催いたしました。私はその全体会の座長をした関係で、その報告をさせていただくことになっております。

最初は基調講演がございました。筑波大学名誉教授の安藤先生と、茅葺き師の松澤さんのお話です。最初の安藤先生の講演の後は対談形式で、松澤さんが持っていらっしゃる知識や経験をひもといていく、とても面白い内容だったと思います。

小谷では、カリヤスを使う必然性があるんだというお話で、非常に標高が高い、雪が多い、枯れ上がりの早いカリヤスを雪が降る前に刈るということ。刈ったカリヤスは雪囲いにして、春になって茅葺きをして、そのときに出た古茅は畑に還元して、桑の栽培や農業に用いる、そうした自立した循環が存在していると。

それから、草原も豊富な生き物のすみかであるということで非常に重要だということ。茅屋根と茅場の土壌の中で炭素を蓄積する、貯留するという、非常に貴重である。松澤さんのお話では、ススキは牛馬のえさに使って、大事なカリヤスは屋根材にうまく利用していたということでした。

それからワラビも、茅を刈るにはやっかいですが、土壌づくりには関与しているかもしれないし、食べることができるので、ワラビ採りなどをして、いい適当なあんばいで防除していって、いい茅を育てているという話でした。

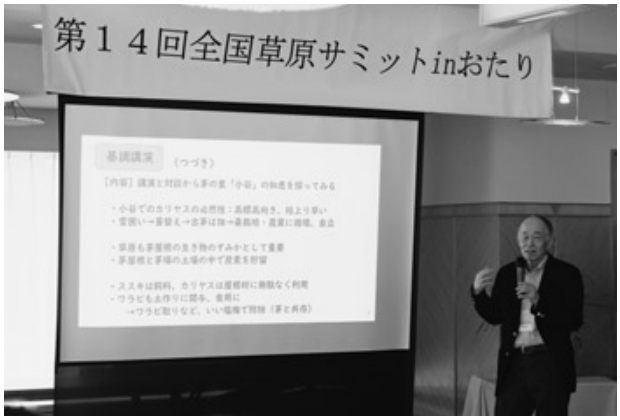
次です。膨大な茅葺き屋根が存在していたそうですが、それを支えていたのはやはりコミュニティーだということ。100軒の茅葺き民家を７ヘクタールで賄えるという、すごくポテンシャルの高い資源と社会のシステムがあった。それから、いろいろな仕組みがあることで草原保全に循環と展望が見いだせているものであると。小谷は、もともと越後から職人さんを呼べるほど豊かな経済があったんだと。今後は茅葺き屋根の復権が、たぶん草原再生に不可欠だろうという話を最後されていました。例えば、積極的に文化財になれば、今いろいろあつれきのある消防法との関わりというのにも、規制をクリアできるんじゃないかという希望を最後にお話になられました。

次に、信州大学の井田先生から研究の報告がございました。小谷の牧の入茅場というところで、もう15年研究をされているということでした。火入れの知恵と手順にはそれなりの合理性がある、結論的にはそういうことだったのかなと、私のほうで勝手に考えています。カリヤスが燃えるときは30cmぐらいのところで350℃ぐらいになるんですけれども、燃えてしまうと灰ではなくて炭という形で土壌に還元されると。一方、地下はほとんど温度が変わらないので生き物も生きていけます。それから、火山灰であることと縄文時代から続くと言われる火入れの作業が、土壌中に安定した炭素を貯留していくという優れた仕組みがある。それから、細くて小さいように見えるカリヤスですが、実は高密度に生えていて、面積当たりの植物量としたら、ススキよりもはるかに高いぐらいある。根っこも当然非常に大きいので、先ほどの炭素の貯留にも役立つし、また土壌の崩壊を防ぐにも効果的ではないかというお話がありました。火入れというのはカリヤスの品質を向上させるためには不可欠で、もし火入れをしなければ茅を刈った後全面刈りをして持ち出すような、そういう作業が必要になる場所もあるというお話でした。

次は、茅場の植物の種数というのは多いというわけではないけれども、バッタや昆虫、それから鳥などは非常に多いということ。それからヤマハギは茅を刈るときに非常に邪魔になるので、積極的に退治する。そういう様々な人の関わり方が牧の入茅場らしい生態系を本日まで維持しているというお話でした。

次に四つの分科会を行いました。それぞれ一つずつお話しさせていただきます。

第１分科会は、先ほど講演していただいた井田先生がコーディネーターとなって、東京大学の高橋栞さんが、御自分の研究内容だとか、あるいは自分が



やっている活動の内容だとか、そういうものを御紹介くださいました。行政への茅場の現状に関するアンケートや妙岐ノ鼻という霞ヶ浦にある湿原の茅や茅場の評価、それから茅場の利用管理の未来の在り方について、様々な活動をしている内容を話題提供していただきました。多様な人が多様な目的で多様な関わりができるような場所や仕組みづくりが重要だということを結論に出されておりました。連携のある相手の価値観に入る、そういう工夫がとても大事で、結果として自然の多様性が守られるという構図がとても大切なんじゃないか。生き物を守るために草原を守るというのもそれなりの意義があるかもしれないけれども、持続性を考えればそういうスタンスが必要だと。

次の第２分科会は、茅葺き文化協会の上野さんがコーディネーターで、先ほどの松澤さんの息子さんの松澤朋典さんが発表者として話題提供をしてくださいました。

茅を使うことで草原を育み保全するというシステムがあるんだということ。屋根材だけでなく、茅の役割は非常に多様で、関係人口の増加にも当然つながる要素ではないか。それから茅葺きがあることのメリットや総合力をもっと発信すべきではないかというお話がありました。それから年代を超えて、新しい茅の利用が、例えば楽しさというものを含めてあるんじゃないかということで、会場からは茅刈りのスポーツ化の提案だとか、都市からのアプローチの仕方というような御意見もあったと伺いました。草原の里の活用から広がる新しい世界には夢がある感じがしました。

次の第３分科会は、実際に茅を保全されている牧の入と雨中のそれぞれで、茅の火入れ作業などをしていらっしゃる栗田さんと荻澤さんが発表して、東京農業大学の武生先生がコーディネーターでした。草原の運営には、経済面として、例えば茅材とか観光とか、教育が経済かどうか分かりませんが、そういうものと人材。ボランティアであるか、移住者を活用できるか、あるいは地元の人たちかということと、地区の人々、あるいは地区と外の人々の交流というのがモチベーションとして重要になってくるだろうという結論でした。

茅場の管理体制も、今この二つの茅場によって結構色合いが違っていました。非常に伝統的で強いコミュニティーでしっかりと、ある種の義務のように水管理や道普請のような形で管理されているところもあれば、新しく交流を重視するそういう感覚で新しいコミュニティーのタイプもある。そういう多様なタイプが小谷村にもあると。多様な目的で日常的に若い人を教育するということは、どちらにとっても大事な問題として捉えられているということでした。

次の第４分科会は、中学３年生たちが率先して活動して、大人とのコミュニケーションを実際に取ったというものでした。東京農大の町田怜子先生がコーディネートして開催しました。内容としては、草原の恵みとして四つ、ワラビと情報発信、それからミツバチ、高齢者というそれぞれのグループをつくって、草原を里の課題解決に向けて中学生が提案して、それを大人たちが聞いて、また意見交換するというワークショップを行いました。小谷村には草原の豊かな資源や機能があることを、大人も子供も共有していく。茅場の恵みは世界発信も可能なほど非常に豊かなものだというのを実感している。学びや発信する結果、未来に子供たちが戻ってくるだろうという大きな期待を持ちながらワークショップを進めていったという形です。

全体会は私がコーディネーターをしたんですが、各分科会からの報告を会場の皆さんと共有して、保全や活用について必要なことを討議しました。一つ、茅場や草原の価値と継承についてということですが、保全のための保全から活用による保全への重点の移動が最近行われていると。それから、伝統的管理が残る草原は、保全や利用価値が非常に高いんだと。それから、学習や環境教育が世代を超えていく高い潜在性を持っている。地元だけの負担ではなく、自治体や市民との連携もこれからは考えていく

必要があるんじゃないかと。それから、先ほどもお話ししましたが、多様な人の目的、関わりが実現できることが重要だということで、その意味では、草原サミットは良い機会を生み出す仕掛けでもあったんだという話でした。それからこれは大きな課題ですが、これは仮の名前ですけれども、「草原・茅葺き文化伝承基本法」というものを制定するなど、法整備をしっかり行政にはやってほしい。茅は屋根材だけではなく、空調や省エネ、減災の機能が非常に高いので、そういう価値を支援する施策をやるべきである。それから茅材を使う地域と茅を供給する地域間の密接な連携を自治体間でもやってほしい。それから、原っぱの子供たちがまた戻ってこられる豊かな施策を充実してほしい。

次ですが、地産地消という草原の恵みと結合したような学習内容を展開してほしい。ある特定のものではなくて、そういうつながりや循環。それから、草原・茅場の保全に環境省の「自然共生サイト」や「エコパーク」というのがありますが、そういう枠組みを生かして実現してほしいという御意見がありました。これらの要望といっても、私たち個人の活動で解決できる問題ではありません。そういう意味で、市民として今後も行政側と対話を続けていきたいと思っております。

そういうことで、以上が昨日のシンポジウムの報告でございます。市民サイドから望むこととして、サミットでの論議をしていただけるとありがたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。した。

小谷村長：こちらの高橋先生の御報告、問題提起について、質問等ございましたらお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。

【発言者なし】

小谷村長：それでは、これでこの報告等については終了したいと思います。これからは、各自治体の取組と課題についてということで、次第の記載のとおり、竹田市様から順番にお願いしたいと思います。

その発表が全て終わった後にディスカッションをしたいと思いますので、よろしくお願いをしたいと思います。 それでは、竹田市様からお願いいたします。

竹田市：大分県竹田市の市長代理として参加させていただいております岩本と申します。竹田市の久住高原の概要と課題ということで、併せて説明させていただきたいと思います。久住高原の概要からです。久住高原に関しては、阿蘇くじゅう国立公園の一角に位置しております。久住高原の中で行われる野焼きが、「くじゅう四季の草原、野焼きのかおり」として環境省の「かおり風景100選」に選ばれている場所であります。

また、このたび「草原の里100選」に認定いただきました久住高原にあります坊ガツル湿原は、標高約1,200mに広がる中間湿原でございます。湿原は、2000年に約30年ぶりに野焼きを再開した経緯がありまして、そこから人の手による野焼きが今の状態を維持しておりまして、５年後の2005年にラムサール条約の第９回締約国会議において、くじゅう坊ガツルと、九重町にありますタデ原湿原が、両湿原合わせた中間湿原として、国内最大級の面積を有する湿原となっています。

こちらの久住高原は、春には野焼きが行われ、夏には、今写真に掲載させていただいておりますミヤマキリシマという高山直物がピンク色に咲き乱れて、秋には紅葉で楽しまれており、坊ガツル湿原は１年中登山客で賑わっている状況であります。坊ガツル湿原についてはキャンプ場として利用されて、標高の高い秘境のキャンプ場として人気があります。

久住高原の概要としてお話しさせていただいたんですが、久住高原も、もう全国的にあるとは思うんですが、高原を守る方、主に農家の方の高齢化が進んでおりまして、後継者不足と高齢化が伴って、野焼きが行われなくなった地域が増え始めて森林化が進んでいる状況になります。

坊ガツル湿原をはじめとして、地元の方々と地元団体と協働して、後継者不足や火入れの技術の伝承というものが課題となっておりますので、伝統ある野焼きを未来永劫継続できるように後継者の育成を行っていけるか、そういった組織づくりや仕組みづくりが課題となっているような状況です。久住高原の概要については以上になります。

中村小谷村長：続きまして、九重町様、お願いをいたします。

九重町：九重町商工観光・自然環境課の吉光です。本来であれば、町長が出席して現状や課題について

説明するところですが、公務のため出席がかないませんでしたので、私のほうから現状と課題について説明をさせていただきます。

まず、九重町は飯田高原というところを中心に草原がございまして、過去には採草・放牧のために毎年春に野焼きを実施することにより、美しい草原の景観と古来の植生を維持してきました。

しかし、昭和40年代頃から畜産農家の減少や高齢化によって野焼きの実施が困難になり、景観や植生に影響が見られるようになってきたところであります。

こうした現状を鑑み1996年に、「飯田高原野焼き実行委員会」を結成し、約360haの野焼きを復活することができました。以後、本日このサミットにも約20名の方が参加してくださっておりますが、「九重の自然を守る会」を中心とした実行委員会形式で、ボランティアの応援の下に野焼きを継続しているところでございます。年を追うごとに野焼き面積も広がり、現在は約600haまで野焼き面積が拡大をしております。

この飯田高原の草原は、先ほど竹田市さんからもありましたが、標高900m以上の緩やかな起伏のある高原部、またくじゅう連山の山脈に広がっているところです。ススキやネザサを中心とした植生が代表的であります。

課題といたしましては、先ほど竹田市さんんもございましたが、一つは高齢化の問題であったり、やはり担い手、伝承をどうやっていくかというところと、野焼き実行委員会の活動資金のための安定的な収入、これをどう確保していくかが一つ課題として挙げられております。また、オオハンゴンソウ等の外来種の侵入があり、鹿やイノシシの食害で希少な品種の在来種が食べられてしまう対策を今後どうやっていくかも課題の一つとなっております。

最後になりますが、各団体が生態系保全のために駆除活動等は行っているんですが、まだまだ外来種等の駆除であったり、イノシシや鹿による食害の根絶には至っておりません。

また、最後に草原利用者へのルール啓発であったり、マナーの向上、草原の持つ価値や魅力の発信というのも今後必要になってくるかとは思っております。これら課題の解決への道を探りながら、飯田高原の草原の保全活動を長く続け、次世代へ引き継いでいく必要があると考えております。以上です。

小谷村長：それでは続きまして、西原村様にお願いしたいと思いますが、阿蘇地方の草原を含めてということになりますので、６分以内でお願いしたいと思います。

西原村：熊本県阿蘇郡西原村の産業課長の中西と申します。本日村長が公務のため、代理で発表させていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。西原村の取組と課題というところで、まず少し西原村の御紹介を混ぜながらさせていただきたいと思います。

西原村は熊本県の中心部、熊本市より東方約20km、熊本空港まで車で10分ぐらいのところに位置しております。総面積は7,723ha、うち原野が1,556haで、この原野のうち、野焼き等の維持管理を行っております原野が1,024haあります。

村の東部は阿蘇外輪山の一部である標高1,095mの俵山を中心に、原野と山林から成る起伏の多い地形を成しています。春には野焼き、夏には青々とした草原、秋には黄金のじゅうたんを広げたようなススキが広がり、冬には薄い雪化粧と、四季折々でいろいろな表情を見せてくれており、訪れた人々の目を楽しませてくれています。

阿蘇山系独特の気候変化により、山々から風を多く受ける西原村では、その風を利用して、俵山の中腹に10基の風車を擁する風力発電所を持っております。風力発電が平成17年度より運転を開始しておりまして、原野内で回っておる風車の風景というのは、わが西原村の象徴となっております。

春の訪れを告げる野焼きについては、雑草が繁茂するのを防ぎ、原野の害虫駆除と草原の再生を促すために行われております。原野にはユウスゲ、オキ

ナグサ、マツムシソウなど生物が植生しておりまして、これらの保護をするためにも、原野の野焼きというのは欠かせないものとなっております。

またその原野において毎年村の小学５年生を対象に、風力発電関係の企業及び各団体の協力の下、原野の中で環境体験学習会が毎年開催されておりまして、自分たちが住む阿蘇の自然環境について学び、草原と森林が広がる村の風を感じながら、自然エネルギーの役割と大切さを学ぶ場としても、この草原が利用されているところでございます。

このような草原を維持していくためには、野焼き、防火帯づくりが必要不可欠となっております。阿蘇地方では、牧野組合さんが中心となり、草原の維持をされているところが多い中ではございますが、当村におきましては、地域の住民が共に協力して、防火帯づくりを行ったり、野焼きを行ったりしています。というのは、山林や原野は、かつて牛馬の飼料のみならず、田畑の肥料となる草の刈場だったり、炊事や暖の燃料とする薪を集めるなど、生活に欠かせないものであった、そういった背景から、地域や集落の共有財産として、今でも地域で維持管理がなされている状況でございます。

課題といたしましては、地域の高齢化、後継者不足などにより、維持管理が困難な状況となってきているところでございます。野焼き自体が継続困難な地域も出てきております。今後はそのような地域が増えてくることを懸念しているところでございます。

近年では、阿蘇グリーンストックさんの御協力をいただきながら、防火帯づくりボランティアとか、野焼きボランティアの御協力をいただきながら、草原の維持に努めているところでございます。

最後になりますけれども、西原村では先人たちより守り継がれてきた豊かな自然を次世代に引き継ぐためにも、今後も地域・行政・各団体が一緒になって協力・連携し、原野・草原の保全に邁進していきたいと考えております。以上でございます。

小谷村長：続きまして、島根県大田市様からお願いをいたします。

大田市：島根県大田市より市長代理として参りました環境政策課の藤山と言います。

大田市にございます国立公園三瓶山は、西の原、東の原、北の原といった三つの草原があるところで

す。主に西の原について御紹介したいと思いますが、裾野に広がる草原は、レジャーや登山客、クロスカントリー大会など、大田市を代表する景観の一つです。こんもりとした峰の麓に広がる草原の風景には、放牧の牛がたたずむ姿が見られることがあります。草原は、オキナグサやユウスゲなど、希少な草花の宝庫でもあります。

地元小学校による植栽の行われているところですが、講師を務めていただく地元の保護団体の方などの高齢化と言った課題があるところですが、小学校の行事として定着しているもので、行政としても関わっていけたらと考えておるところです。

そのほか三瓶山の春の風物詩といえば火入れです。地元のNPOや団体と協力して、西の原一面に広がる枯れススキに計画的に火を放ち、焼き払う壮大な行事です。どうしてもこういったイベントは天候などに左右されやすく、中止にすると１年そのままといった状態で、イバラやススキなどが繁茂し、すぐにやぶと化してしまいます。害虫の駆除や山火事の防止のためにも一翼を担っている草原の維持・回復に大切な行事といったところです。

また、毎年春には「クリーン三瓶」を開催しています。ごみ拾いのイベントですが、近年はブタナ・セイタカアワダチソウなど外来種の駆除も行っているところです。外来種が広がらないようにすることも、景観を維持していく課題の一つだと捉えているところです。

小谷村長：続きまして、江府町様、お願いをいたします。

江府町：町長代理で参加させていただきます鳥取県江府町役場総務課の藤田と申します。

江府町における草原、鏡ヶ成草原について現状と課題について報告させていただきます。

鏡ヶ成湿原につきましては、鏡ヶ成保全再生活用

協議会というものを発足しておりまして、その団体さんを中心に活動を行っております。基本的には４月に草原の管理として山焼きを行い、その後、５月に選択的草刈りとして希少種等を残して草刈りを行っております。それ以外でも、資料には今年度と書いてありますが、昨年度からウスイロヒョウモンモドキの再導入を目指しまして、オミナエシの種を採取し、苗木を育てて草原へ移植する活動を始めております。今年度は、約400の株をつくりまして、移植を終えているところでございます。また、草原の中に湿原もございまして、現在その湿原を少し広げようということで、伐木や草刈り等を行う予定にしております。

課題としまして、会員のほうの平均年齢も高齢化しておりまして、そちらに向けて有志のボランティアを募っているんですけれども、やはりボランティアの方々も高齢化してきているのが実態でございます。ですので、今後はもう少しPR活動等をして、会員様、有志のボランティア様を増やしていこうと考えております。

行政といたしましては、地域おこし協力隊を昨年度から採用しまして、パークレンジャーとして今年度までに４名を採用しておりまして、こちらのほうも江府町内の国立公園内の監視等も続けているところで、鏡ヶ成の草原活動にもこの４人が参加しております。火入れに関してもこの４人を後継者とするよう、火入れの指導等を現在行っている状態です。

小谷村長：続きまして安芸太田町様からお願いをいたします。こちらもオンラインですね。

橋本安芸太田町長：御紹介いただきました安芸太田町長の橋本と申します。

本町の中の深入山が草原の山ということで御紹介をさせていただきます。本町は広島県の中でも一番人口が少ない、しかも過疎が進んでいる地域ですが、広島県の北西部に位置しております。深入山も当然その広島県の北西部、中国山地の中の山でございまして、西中国山地国定公園の中に位置しております。

現在、草原としては大体100haございまして、もともとは地域の放牧のため、あるいはワラビ山として、250年以上前から山焼きがされていました。そういった意味で、つい最近も地元の自治会が中心になって山焼きを続けていただいておりましたけれども、皆さん御案内のとおり、過疎化・高齢化ということで、地元だけでは山焼きを維持することができないということで、もともとはこの深入山も地域の共有林だったわけでございますが、今は町のほうに無償提供いただきまして、町が主体となって火入れについては町職員、約80人が参加をし、地元消防団114名、110名近い皆さんにも消火班ということで御協力いただきながら、また最近ではボランティアの皆さんにも参加をいただきながら、山焼きを引き続き継続している状況でございます。

課題というのは、話があったように高齢化が進む中で、この山焼きの人員を確保することが難しくなりつつあるということが一つ。また植生も少し変わってきているように感じておりまして、最近はススキよりもササがだんだん増えているということで、火がなかなか難しいかと感じております。

本町の放牧ということではもう使っておりませんが、観光資源としても大変重要なものだと思っておりますので、イベントや山焼きのときに飲食や物販など、あるいは御当地の神楽といった伝統芸能なども披露する形で、観光資源としても大事にしながら、引き続きこの山焼きも維持して、深入山の環境も維持していきたいと感じているところでございます。以上でございます。よろしくお願いします。

小谷村長：広島県北広島町様、お願いしたいと思います。

北広島町：北広島町役場芸北支所の村竹と申します。本日は、町長代理で出席させていただきました。よろしくお願いします。

北広島町の概要からです。北広島町は広島市の北部、広島県に北西部に位置しまして、島根県と接しております。平成17年に四つの町が合併しまして、今年で20年目を迎えます。その北広島町のさらに北西部に芸北町というところがあったんですが、そこに草原の管理をしております雲月山という山がございます。それについて紹介させていただきます。

雲月山は、かつて1960年代頃まで、採草放牧地として利用されていました。島根県に隣接する草原の山として知られていたんですが、林地化が進んできたということで、町のほうでイベントを計画しまして、1980年頃から町主催で山焼きイベントを開催してきました。

ですが風・雨等の気象状況の影響でなかなかイベ

ントとしては成功しませんでした。ある年には島根県から山を焼いたこともございます。大変御迷惑をかけたことがありました。

ということで、イベントとしてはできないということで、いったん停止にいたしました。その後2005年、地元の地域によりますボランティア活動が始まりまして、ボランティアの募集をかけて、消防団、地元の住民によります火入れが行われるようになりました。

イベントでは全体は50haあるのですが、そのうち３分の１を焼いていたんですが、このボランティア作業では110haを焼いております。ですが、火入れをする場所がなかなか限られてきますので、一部はやはり林地化が進んできましたので、そこは広島県民税を活用しまして、樹木の伐採をいたしまして草原に戻したという経緯もございます。そうして今、草原の保全をしております。

課題としましては、地域の皆様の高齢化等々が進んでおります。地元では、町のイベントとしてもう一遍やってもらえないかという声も出ております。先ほど橋本町長が話をされたように、安芸太田町は町のほうが、今、実施するようになりましたので、お隣を見習って、町がもう一度できないかという話が動いております。そのような感じで草原の保全をしているところでございます。北広島町からは以上でございます。

小谷村長：それでは続きまして、兵庫県の神河町様からお願いしたいと思います。今日はこちらに町長さんにお越しいただきましたので、町長さんからお願いします。

山名神河町：神河町長の山名宗悟です。それでは、砥峰高原の現状と課題ということで報告させていただきます。神河町は、兵庫県のちょうどど真ん中に位置しております人口１万人、兵庫県で一番人口規模が小さい過疎化がどんどん進む町であります。その中に、砥峰高原と言いまして、標高約800mから850mに位置しております約90haのススキ草原ということでございます。

屋根材としての茅刈り場、または牧場開発を目的として、あるいは山火事防止、そういうところから山焼きをやってきたところでございますが、山焼きが始まった1800年代では、地元、私ちょうどこの地元、神河村ですが、約100世帯ありまして、１世帯から必ず1人出てきて山焼きに参加すると、そういうしきたりがありました。それからずっと年数がたちましてから、1950年代までは、現在の高原エリア、90haよりもかなり広く草原が広がっていたようであります。しかしながらそれ以降、60年あたりから今の90haの大きさに山焼きの対象を縮小してきたというところであります。

ススキの草原ということで、神河町、砥峰高原の場合、今は茅刈り場ということではなしに、もうあくまでも観光資源として、もうススキの穂はカリヤスよりも穂が多いということで、非常に秋になればきれいということで、多くの方々に来ていただく、そういう観光資源となっています。ところが、この地元の集落の過疎化と高齢化ということで、もう現在地元が50で、約60戸という状況になってきておりまして、近年では地元だけではなしに、神河町の消防団の協力もいただきながら、この山焼きをやってくる。そして1990年代あたりから、この高原の山焼きをイベント化していこうという、そういった動きの中で、当然消防団に協力をお願いしようということで、この間取り組んできたところであります。

それと併せて、砥峰高原内でたくさんのイベントをやってまいりました。多くの交流人口というところで進めてきたところでありますが、記載しておりますとおり、2018年に山焼き中に不幸な事故がございまして、それ以降、24年現在は一般公開はしていないという状況であります。

先ほども言いましたが、最近はコロナでちょうどこの山焼きを中止した時期があります。それに合わせて、本当になかなか再開に向けて、事故もありましたので大変でありました。そんな状況で、今、承継者の確保が課題でございます。

小谷村長：それでは続きまして、岐阜県白川村の概要についてお願いをいたします。

白川村：岐阜県白川村教育委員会文化財担当の尾崎と申します。本来であれば村長の成原が出席をさせていただく予定でございましたけれども、あいにく公務のため代理で私のほうから現状と課題を説明させていただきます。

白川郷は、合掌造り家屋と呼ばれる茅葺き屋根が114棟ございまして、そのうちの59棟が母屋、人が今も生活を営んでいる合掌家屋でございます。こちらは、1971年、昭和46年の保全団体「白川郷荻町集落自然環境を守る会」という団体の発足当時から、変わりない数値として今も守られているというような状況でございます。

一方、茅場というものは、残念ながら観光化が進むにつれ茅場の維持というものが困難になってまいりまして、茅葺き屋根の葺き替えを年間４棟から５棟行うわけですけれども、その茅の材料というのは、大半を静岡県御殿場市から輸入している状況でございます。

村としては、それではいかんぞというようなことで、世界遺産登録20周年を機に、2015年あたりから、村は茅場を７ha造成いたしまして、一方地域では、茅刈り行事を行ったり、あるいは交流関係人口、そういったものを築きながらイベント化したり、さらには義務教育学校の学校行事にしたりと、そういうような活動をいたしまして、現在、ススキ束ですけれども、年間２万束必要なところに対して、４分の１に当たる5,000束の収穫に至っております。コロナ禍ではございましたけれども、2020年にはイギリスから茅刈り機を導入いたしまして、今後はさらに生産性を高めていきたいということを考えております。

今後の課題といたしましては、世界遺産ということもございまして、かつての結の屋根葺きもそうですが、こうした茅刈りというものも地域総出でやれるような地域の関係というものを深めるということと、世界遺産になる前は伝建地区の登録が1976年にあったわけですけれども、今３世代目に当たるわけですけれども、世代間の継承というものをいかにして将来つなげていくのかというところが課題となっております。以上でございます。

小谷村長：それでは続きまして、東伊豆町様からお願いをしたいと思います。

東伊豆町：当町は、伊豆半島の東部、中心、真ん中辺に位置しております。人口が１万2,000人ぐらいで減少傾向にあるとこれは全国どこでもという形かと思います。

町の特徴として、海抜ゼロメートルから、町の西に至ると天城連山がありますので、大体1,400mぐらいまで、一つの町の中でゼロメートルから1,400mぐらいまであるという多様な環境があります。その中の400mから800m帯に細野高原という草原が、東京ドーム約26個分、何ヘクタールと言うよりもそのほうがイメージが湧きやすいかと思いますが、そのぐらいの広さの草原があります。

山菜狩りやススキの鑑賞会という観光的な意味合いでの草原の保全ということに現在力を入れている状況ではあります。もともと数十年前までは茅場としての利用が大きかったんですけれども、現在は農業従事者の減少とか、地域の高齢化によって人材の確保等に苦慮しているものですから、観光への移行というような形になっています。

ただ、火入れ、うちのほうでは山焼きと言いますが、山焼きをするためにはやはり人手が非常に必要ということで、やはり皆様のほうからもいろいろお声が出ておりますけれども、そこへの人材をどうするかというのが大きな課題になっているところでございます。

管理にかかる費用は、お金に換算しますと年間大体500万ぐらいかかるのかなと思います。この財源の確保のことも考えますと、観光利用という中で、現在はススキの鑑賞会、今年は11月１日から１か月間にわたって行われますけれども、そこへの入山料、それから春先には野焼きの後にワラビと山菜が生えますので、山菜狩りということで、こちらも少

し入山料という形で収入を上げておりますけれども、年間の維持費を賄うところまでは全然行かないというところでございます。

前回のサミットを契機に、うちのほうも皆様から出ましたいろいろな御意見だったり、いろいろな創意工夫、そういうものを非常に勉強させていただきまして、それまでは稲取地区特別財産運営委員会というところが担い手として中心になって、それから町内にある四つの共有財産ということもありまして、そこで火入れの作業とかをやっておりました。私も20回以上は参加しているかと思います。今月も19日に、まずは防火線焼き、防火線切りはもう済んでいるので、その切った防火線のところを焼く防火線焼きが始まります。やはり週末毎週土日という形で天候を見ながらやっていくという形になります。その後に、「細野高原みらい協議会」というものができまして、現在はそこで管理等をしていく方向で進んでいる最中です。以上です。

小谷村長：続きまして、白馬村から概要等についてお願いをしたいと思います。

白馬村：白馬村の丸山村長代理の教育委員会の横川と申します。よろしくお願いします。ウィンタースポーツのメッカ・白馬村でございます。昭和30年代までありました茅場は全てスキー場に変わってしまって、草原がなかなか見えないような現状でございますけれども、北アルプスの湧き水が豊富な場所でありますので、村内には大小幾つかの湿原がございます。

その一つに、「親海」と書きまして「およみ」湿原、隣接する大町市との境から、日本海に流れる姫川源流にございます湿原がございます。この湿原は、1980年に県の自然環境保全地域に指定され、地域の皆様の協力の下に保護されております。

近年、少雪、雪が少なくなることによりまして、湧き水が減少している傾向がございまして、そのために、植生が変わりつつあります。しかしながら観光資源としての有効利用ということもありまして、木道の設置、除草等、地域のコミュニティーの皆さんにお手伝いをしながら、また近くの小学校の教育現場として貴重な動植物の存在も確認されております。

村内には、そのほかオリンピックの滑降コースでありました八方尾根湿原、八方池や鎌池、2,000m級のところに自然の池があったり、それからこの小谷村に隣接する落倉自然園というのがございます。落倉自然園には、ハクバサンショウウオという天然記念物が生息しておりまして、文化財審議委員会、あるいは保護団体の下に年２回ほどの調査を続けております。

そういった保護活動の下に、昨年度、国連世界観光機関の認めますベスト・ツーリズム・ビレッジに認定されました。これが観光を通じて地域の景観、生物・文化の多様性、産業といった地域が持つ様々な側面の価値の向上、保護を促進することを目指して、地域の優良事例を集めることを目的としております。

地域コミュニティーに根差した価値観の保全に努めて、経済・社会・環境の全ての側面においてイノベーションと持続可能な形で明確に取り組んでいくことにしております。優れた地方部の観光地が表彰されるものとして、私たちも自負しております。しかしながら課題としては、地域コミュニティーの弱体化、高年齢化もあります。それとともに、少子化に伴う子供たちの減少で、地域に根差す継続的な学習の場としての維持・管理を一番重要な課題としております。以上です。

小谷村長：それでは最後に、私のほうから小谷村について御説明をさせていただきたいと思います。最後のページを御覧いただきたいと思います。

まず小谷村についてですけれども、過去にはほとんどの集落、小谷村は53の集落があり、前は54だったんですが、その場所が各地区まとまっているところもありましたけれども、管理する場所にはやはり茅場を所有していたんですが、それが昭和30年代頃から茅葺き屋根が少なくなってきたものですから、茅場も放棄されて山林になってきたという状況になっています。それは、もう昨日説明があったとおりでありますので、そういった形がうちのほうの状況だということであります。現在維持しているのは、牧の入茅場という今日見ていただいたのと、ショクの茅場というところがやっている形です。

牧の入茅場につきましては、広さが約30ha、それから雨中のショクの茅場については13.5haということです。私自身がこの雨中ショクの茅場を持つ雨中林野組合に入っておりますので、そこで私も野火つけなどをやって、本当にいろいろ先輩方から教

えられながらやってきた経過があります。

今現在は、昨日の話の中でもいろいろ使われているというのはあるんですけれども、そのほかに私どもの地区などでは、それぞれ「歳の神（せいのかみ）」というのがあるんですけれども、いわゆる「どんど焼き」や「三九郎」と言ったり、お正月に火をつけてやるものですが、それに多く使っているところであります。

昨日も話があったんですけれども、牧の入の茅場では１万把、雨中ショクの茅場では9,000把が採取できるぐらいのカリヤス等があるということです。それから現在は、村の中学生とその保護者が茅刈りを体験することを一生懸命やっています。これについても昨日話をしたとおりであります。

特にこれからさらなる発信と技術の継承を担う次世代の育成を、一番課題として捉えていないといけないということで、それぞれの地区がどのようにしてやっていったらいいかということを考えている状況であります。

非常に簡単になりましたけれども、これで説明を終わらせていただきたいと思います。

それでは、それぞれの発表が終わりましたので、これからはディスカッションに移りたいと思います。

東伊豆町：ちょっと中途半端になってしまったんですけれども、観光目的でうちは利用していこうという形に今はしている途中です。前回のサミットが終了した翌年、近隣市町で全くテーマは違うんですけれども、とある映画が撮られて、そこで細野高原という場所がキーワードになる場所ということで御紹介をさせていただきました。もちろん名前は全然架空の名前ですので出てこなかったんですけれども、その映画を通じた中で、映画の主題歌を玉置浩二さんが書いたんですが、プロモーションビデオ、ミュージックビデオの撮影を細野高原でやられています。

全編にわたって草原の風景が映し出されるということで、宣伝ではございませんが……、半分宣伝ですね。そういう形で皆さんに知っていただいて親しみを持ってもらおうということで、実際玉置さんのアルバムのジャケットもその場所から撮った太平洋を臨む風景が採用されたという形で、こんなことを通じてたくさんの人に知ってもらって、「ああ、こんな場所に行ってみたいな」と思ってもらえればいいかなと、そんな場所づくりがされている最中です。以上です。

小谷村長：宣伝という形ではありますが、ほかに御質問等ございましたらお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。

私のほうから皆さんに投げかけたいことでは、やはり維持費、維持をやっていかなければいけないという形で、特に今、東伊豆町さんの中では維持費の捻出とかがそういったことがあろうかと思いますけれども、維持費について、こんなことをやっていますよというのがあれば、そんなことを発表いただければと思います。

私どもの小谷村、ちょうど雨中のショクのところでは、過去にいろいろ収入があったところですが、特にこれを維持するためにみんなが会費を払ってということは今現在はないんですね。ただ前にいろいろな形で入ったりしていたものを使っているという状況ですので、いずれは枯渇してしまうか、別の形でまた収入をしなければいけないことも考えられると思うんですけれども、そこら辺について、皆さんのほうから何かございましたら御発言いただければと思います。

九重町：九重町では、春の野焼きをするために、今の時期になるんですが、防火帯づくりを地元の実行委員会にやっていただいています。そのことについては、若干ではありますが、行政のほうで支援をしているのが現状でございます。

小谷村長：ありがとうございました。実は私どもは、行政から組合とかそういうところに支援金というのを出していないので、非常に重い課題をいただいたと思いますが、皆さんのほうで行政から出していらっしゃるという、例えば、神河町さんも行政のほうから何か出されているということでよろしいで

すか。

神河町：砥峰高原の所有形態がどうなっているかというところで言いますと、実は兵庫県の所有物になっておりまして、以前は川上区の村山でして、村山として村がしっかりと管理しなければいけないということで山焼きをやっていたと。それから兵庫県が開発をしていこうということで、兵庫県が買い取って、そして兵庫県の管理地になっているんですが、管理するのを地元にお願いしたいということで、実は兵庫県と神河町とが維持管理契約をし、そして実際の管理委託を神河区にお願いしているという状況で山焼きをしていただいています。ところが、先ほど説明しましたけれども、イベント化をしていこうと。この山焼きを観光化しようじゃないかというのが村の当時の役員の区長、自治会長の考え方で、それに役員としてもしっかりみんなで盛り上げていこうということになって区としてやり出したんですが、それと併せて砥峰管理組合というのを別に設けて、その中で砥峰を管理してきたということがあります。

イベント化していますので、当然駐車場の整備とかそういうことをしていかなければいけないし、そういうところにお金ということではなしに、事業として行政がしっかりと関わっていたというところです。当然自然公園内なので、事前にしっかりと協議をやって、そして許可を得て整備をしなければいけない。そういう状況になってきているところです。

中村小谷村長：ありがとうございました。どうぞ。

阿蘇グリーンストック副理事長・山内氏：すみません。私は自治会の代表ではないんですけれども、財源の問題について、阿蘇の事例を御報告させていただきますと、私どもは阿蘇グリーンストックという財団で活動しています。先ほど西原の報告でありましたけれども、大体年間で2,300名ぐらいのボランティアさんを派遣しております。野焼きと防火帯づくりで。その費用が非常にかかるものですから、熊本では、「阿蘇草原再生千年委員会」という特別な組織が、九経連（九州経済連合会）の名誉会長さんとか、JR九州の前の会長さんとか、県知事さんや九州農政局の局長さん、環境省の九州所長さんが入った非常にそうそうたるメンバーの千年委員会というのがあって、そこでその財源の問題が話題になりました。

その議論の中で、もう今年辞められた蒲島前知事が、随分強い熱意を持って取り組まれて、「かばしまイニシアチブ」というのを発表されました。県と地元の市町村と農政局の多面的機能の支払交付金と、合わせて大体年間2,200万円ぐらいの財源を10年間保障すると突然宣言されて、普通行政は単年度主義ですよね。それを10年間は確保すると言われて、それで草原再生支援システムというのをつくられて、今現在も、ほぼ10年になりつつありますけれども、この前県に聞いたら、あれはもうしばらく継続するとおっしゃっていましたが、そういう形で財源があります。

もう一つは、このサミットの第10回、阿蘇は第５回と第10回を開いていますが、第10回のところでたくさんの、兵庫とかあの辺の茅葺き職人さんたちが来られて、阿蘇は茅の宝庫だから、ぜひ茅の材料を提供してほしいという働きかけがあって、それから２～３年実証試験などをした上で、今現在年間１万束弱ぐらいの茅を生産して、それも一つのグリーンストックの活動の財源になっています。それでもちょっと足りませんけれども、そんな形でボランティアの派遣などを賄っているところです。

中村小谷村長：まだまだ聞きたいことがあるのですけれども、時間の関係でお許しいただきたいと思います。財源については、非常に参考になりました。これから我々も県に強く言ってみようかどうしようかと少し考えますけれども、よろしくお願いしたいと思います。

本当にありがとうございます。時間の関係で大変恐縮でございますけれども、この辺でディスカッションを閉じさせていただきたいと思います。

それでは最後に、本日御来賓として御参加いただきました環境省の自然環境局の笹渕調整官様から講評をいただきたいと思います。

環境省・笹渕調整官：笹渕です。講評というほど偉そうなことを言える立場でもないんですけれども、今日の皆様からの発表をいただいて、やはり後継者の問題や財源の問題が非常に皆さん課題に感じられているというのはよく分かりました。

そこで環境省の施策の御紹介にもなりますけれども、高橋先生のほうからシンポジウムの報告で少し触れていただきましたが、環境省では、昨年から自然共生サイトの認定というのを始めております。こ

の背景としましては、生物多様性に関する世界目標というのがあるんですけれども、その中の一つに「サーティ・バイ・サーティー」というものがありまして、これは2030年までに国土の30％を保全していく、面積的に確保していくという目標があります。今現状ですと大体20％ぐらいが国立公園やほかの地域の制度を含めて保全をされていると。残り10％を稼いでいかなければいけないんですけれども、なかなか国立公園みたいな規制の厳しいエリアを膨大に広げていくというのは難しいと。そういうこともございまして、現在OECMと、これは英語のアルファベットを並べたものですが、要は、国立公園みたいな保護地域じゃないけれども、住民の管理や里山みたいなところで今まで利用されてきた中で、結果的に生物多様性が保全されているエリア、そういったものが実態としてあるので、そういったものもきちんと国際目標の達成に貢献しているエリアとして認めてもらおうと。そういう背景もあって、環境省が始めたのが自然共生サイトという取組です。昨年度から認定を始めて、184か所昨年までに認定して、今年さらに70か所認定をしているところです。

実はそういった自然共生サイトについて非常に企業の関心が高いことがありまして、先ほど申し上げた184の６割が民間企業から申請をいただいていると。こうした背景には、企業のほうもいろいろなビジネスをする中で、生物多様性を損失するのがビジネス上のリスクになっていると。そういったところに適切に対処していない企業については投資家からすごく厳しい目で見られると。そういったこともあるので、そういった自然共生サイトへの登録・認定を受けて、きちんと投資家に向けても、生物多様性の保全にも貢献しているといった施政を示すことが、社会的に求められるような時代になってきたと。そういったことで企業の関心が高まっているということがございます。

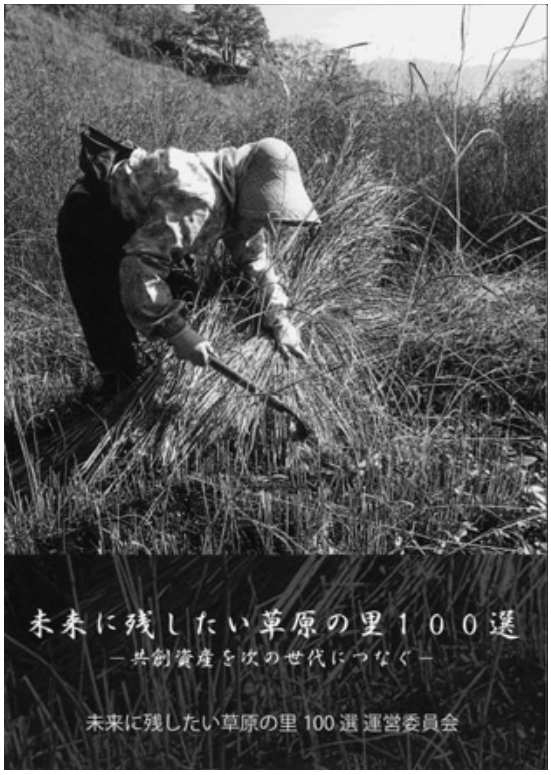
今回草原の里の中でも、私もちゃんと調べてこなかったんですけれども、もしかしたらその自然共生サイトに登録されているところがあるかもしれません。昨日からいろいろ話を伺っている中で、まさにこういった場所が自然共生サイトとして登録されるというのは、非常に親和性のあるところかと思っています。

企業が自ら登録するだけではなくて、こういった民間団体や地域で維持しているところに企業が支援をするといった場合もあります。それに対して環境省が支援証明書という、企業がこういった取組に支援をしていますねと、それに対して環境省が証明書を発行するという手続も、今年からこれは施行しているんですけれども、そういったことを進めていく中で、自然共生サイトに認定を受けたエリアが企業から支援を受けやすくするということも環境省のほうで、今制度を検討して進めているところです。

そういった制度もうまく活用しながら、草原の保全・再生にも活用できたら非常にいいかなと、今日のお話を伺いながらそう思った次第です。もし御関心があれば、ぜひ環境省のほうにも問合せをいただければ、詳しい紹介等させていただければと思います。

小谷村長：講評と、それから大変参考になる御発言をいただきました。

司会：それでは次に、未来に残したい草原の里100選事業につきまして、全国草原再生ネットワーク会長の高橋様から御発言をお願いいたします。



高橋会長：最後になりますけれども、中村村長が会長をされている全国草原の里市町村連絡協議会というのがあって、今全国で28市町村が加入されています。そこの主催事業である「未来に残したい草原

の里100選」というのを３年前から始めております。

お手元のパンフレットを見ていただければ分かると思いますが、その趣旨や考え方、選考委員などが書いてありますが、一番最後のページのところに実施要領が書いてあります。先日、昨日10月４日認定式の場で（第４期の）募集を開始しました。草原100選の応募締め切りは来年１月10日になります。最後から２ページに掲げてございます８人の選考委員の皆様が最終選考をして認定していくという形を取っております。最終審査は３月で、結果通知は５月で、来年の秋には授与式を行う予定になっております。

ここにお集まりの自治体の中でも、まだ草原の里に応募されていない草原が幾つかあると思いますので、ぜひこれに応募していただくとともに、ちょっと迷っているようなところもあれば、いろいろとお問合せをいただければそれに対応いたしますので、どしどしと応募していただければと思っております。以上です。

司会：高橋様、ありがとうございました。続いて、サミット宣言の採択に移りたいと思います。お配りをしております資料の最終ページに案を掲載してございますので、御覧をいただきたいと思います。改めて、サミット宣言につきましては村長にお願いしたいと思います。

小谷村長：それでは「第14回全国草原サミットin おたり」ということで、これが一番肝心なところになろうかと思いますが、サミット宣言という形にしたいと思います。一応朗読させていただいて、確認をさせていただきたいと思いますが、前文については省略させていただきます。それでは後段になりますが、「小谷宣言」。

一、私たちは草原に関わるすべての人々と連携しながら、茅場をはじめ希少な草原の環境・文化を守り、保全することに努めていきます。

一、私たちは草原の貴重な資源を暮らしや観光・産業振興に活用し、草原が育んだ技術や知恵を次世代へと受け継いでいきます。

一、私たちは希少な草原の価値を再認識するために学習を継続し、地域社会への還元方法を模索していきます。

一、私たちは「全国草原の里市町村連絡協議会」の連携を深め、全国の草原を持つ自治体に協議会への加入促進を進め、希少な草原の価値を共有していきます。

一、私たちは「未来に残したい草原の里100選事業」の選定を進め、各地に残る「共創資産」を全国に発信し、活用していきます。

以上を宣言する。令和６年10月５日。

以上であります。このことについて御協議をお願いします。

【賛成者拍手】

小谷村長：ありがとうございます。拍手をいただきました。本当にありがとうございます。 それでは、「小谷宣言」として御承認をいただきました。

なお、このサミット宣言は、本大会のホームページに掲載するほか、小谷村の公式ホームページ、そして昨日も参加いただいたんですが、「全国山の日協議会」のホームページにも掲載されるようにしていただいております。

また、報告書等を作成しまして、加盟団体にお配りするほか報告書は全国草原再生ネットワーク様のホームページにも掲載をさせていただきます。

司会：本来ですと、御参加をいただきました皆様から御署名をいただくということがありますけれども、オンラインで参加の方もございますし、今回につきましては、代表して会長の中村村長からの署名とさせていただきたいと思いますので、御了承をお願いしたいと思います。

【中村小谷村長、「小谷宣言」へ署名】

中村小谷村長：それでは署名させていただきました。

司会：ここで、次回の開催地を引き受けていただきました大分県九重町から御挨拶を頂戴したいと存じます。

九重町：次回開催地ということで、大分県九重町、九州の屋根と呼ばれておりますくじゅう連山の麓に広がります高原と温泉の町でございます。若干こちらのスライドを使いまして、九重町について御説明をさせていただきたいと思います。基幹産業は、農業と観光ということで、トマトやシイタケ、ブルーベリーの生産、畜産業を盛んに行っております。

九重町の観光といたしましては、九重夢大吊橋であったり、ミヤマキリシマ、タデ原湿原等がございます。そして昨日の交流会の中でも御説明させていただきましたが、町内様々な温泉を抱えている町でございます。また、温泉の恵みとともに地熱の発電も盛んです。写真は出力11万kwで国内最大の地熱発電所であります八丁原発電所でございます。

また、九重町は四季色とりどりで色で表現することもございまして、「春は黒なり、夏は青なり、秋は赤なり、冬は白なり」ということで四季を表現しております。

こちらが先ほど申し上げました九重町飯田高原の野焼きです。野焼きを行いますと、辺り一面が黒くなることから、九重の春は黒と表現されております。また、野焼きが終わりますと、希少植物でありますリュウキンカであったり、サクラソウ、キスミレ等、春の植物が花を咲かせます。

そしてこれはくじゅう連山のミヤマキリシマ、そしてこちらはやまなみハイウェイということで、九州屈指のドライブコースとして別府から阿蘇をつなげている道路でございます。タデ原湿原はこれは野焼きによって保全され、草原には様々な花が咲き、見る人の目を楽しませてくれております。なお、こちらの草原はラムサール条約にも登録をされております。そして先ほど申し上げました九州の屋根と呼ばれるくじゅう連山の紅葉でございます。秋は赤ということで、紅葉シーズンで多くの登山客で賑わっております。そしてこちらは長さは抜かれたんですが、18年前につくりました長さ390m、高さ138mの日本一高い人道吊橋で、現在1,300万人の方に起こしいただいております。そして草原のススキでございます。秋の終わり頃を迎えますと、草原にはススキが一面に広がり、銀世界となっております。そして、九州では珍しく、九重町は雪も降りますので、冬は白ということで、九重は白銀の世界へと変化していきます。

そして最後になりますが、九州で唯一のスキー場、くじゅう森林公園スキー場が九重町は抱えておりまして、毎年冬に10万人の方が訪れてくださっております。駆け足となりましたがこれで九重町の御紹介を終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。

司会：不慣れな司会進行で大変失礼をいたしました。慌ただしい会議進行に御協力をいただきまして、誠にありがとうございました。

以上をもちまして、「第14回全国草原サミット・シンポジウムin おたり」大会の全てを終了といたします。会場へお越しいただきました皆様、オンラインで御参加いただきました皆様、大変お疲れさまでした。今大会への御参加、御協力に厚く御礼を申し上げます。次回は、大分県九重町でお会いしましょう。

お帰りの際には十分お気をつけてお帰りください。誠にありがとうございました。

第１４回　全国草原サミット inおたり

日本の草原は人が管理し続けてきたことで維持されてきました。火入れや採草、放牧など長い時間の中で優れた技術や知恵が生まれ、人々の協働により絆が育まれてきました。しかし戦後の燃料革命などの生活の変化、多様化により、草原の利用は低下し、草原は都市化や植林などの様々な理由により失われ、国土の１％にまで減少してしまい、草原の維持はますます困難を極めることが予想されます。

小谷村でも、各集落にあった茅場の草原は茅葺き屋根の消失とともに、多くが失われ、毎年雪消えとともに行われる「野火つけ」が行われる場所も少なくなってしまいました。

茅場や湿原を含む草原は、多様な動植物を育み、人々の暮らしは草原によって支えられてきました。草原は牛馬の飼料や茅葺き屋根の材料を供給するとともに、ワラビやセンブリなどの山菜や薬草などを提供する場としても重要でした。また、七草や盆花の文化など、地域の年中行事にも深くかかわってきました。

希少になった草原は観光資源としての価値が高く、多くの希少動植物の観察地としての機能、水源涵養や炭素の固定能力の高さなど、新たな価値が見いだされています。また、草原で培われた技術や知恵が今後の「持続可能な社会」の実現に不可欠であることも注目されています。

この希少となった草原を持つ私たちの自治体は、さらなる学びを続けながら草原を維持し、草原の恵みを享受することに感謝し、「草原のある暮らし」を後世に引き継いでゆく努力を惜しまず、草原に関わるすべての人々とともに交流し連携していくことを、ここ小谷村において宣言します。

小谷宣言

一　私たちは草原に関わるすべての人々と連携しながら、茅場をはじめ希少な草原の環境・文化を守り、保全することに努めていきます。

一　私たちは草原の貴重な資源を暮らしや観光・産業振興に活用し、草原が育んだ技術や知恵を次世代へと受け継いでいきます。

一　私たちは希少な草原の価値を再認識するために学習を継続し、地域社会への還元方法を模索していきます。

一　私たちは「全国草原の里市町村連絡協議会」の連携を深め、全国の草原を持つ自治体に協議会への加入促進を進め、希少な草原の価値を共有していきます。

一　私たちは「未来に残したい草原の里100選事業」の選定を進め、各地に残る「共創資産」を全国に発信し、活用していきます。

以上宣言する。
令和６年１０月５日

大分県竹田市長　土居　昌弘

大分県九重町長職務代理者
九重町副町長　時松賢一郎

熊本県西原村長　吉井　誠

島根県大田市長　槻野　弘和

鳥取県江府町長　白石　祐治

広島県安芸太田町長　橋本　博明

広島県北広島町長　箕野　博司

兵庫県神河町長　山名　宗悟

岐阜県白川村長　成原　茂

静岡県東伊豆町長　岩井　茂樹

長野県白馬村長　丸山　俊郎

第14回全国草原ｻﾐｯﾄ・ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ
inおたり実行委員長
長野県小谷村長　中村義明

第14回 全国草原サミット・シンポジウムinおたり ～つなげよう 茅場(かやば)が育んだ技術と命～

交流会・会場展示

郷土芸能 大網 三番叟

郷土芸能 姫川太鼓

九重自然を守る会の発表

郷土料理の振舞い

小谷の実行委員会の挨拶

サミット参加自治体の草原パネル展示

新聞報道

小谷で全国草原サミット
地域のかやぶき材料
「カリヤス」特徴解説

「第14回全国草原サミット・シンポジウムinおたり」が4日、小谷村の白馬アルプスホテルで始まった。初日の基調講演では、かやぶき師で株式会社「小谷屋根」（小谷村）会長の松沢敬夫さん（82）と、筑波大名誉教授で日本茅葺き文化協会代表理事の安藤邦広さん（76）が登壇、村内にかやぶきなどについて語る松沢さん（奥右）と安藤さん生まれ、かやぶきの材料となるカリヤスの特徴について解説した。約140人が聞いた。

安藤さんによると、国内のかやぶき屋根の大半はススキとヨシで、カリヤスは全体の約1割程度。ただ、雪深くなる同村では年末に刈るススキでは材料に向かず、「カリヤスがこの地域のかやぶき文化を支えてきた」と指摘した。

松沢さんは「若い頃、集落のほとんどの家がかやぶきだった」と振り返った。各家が管理するかや場からカリヤスを持ち寄って職人に屋根を葺いたといい、「集落に100戸あり、年2戸ずつ葺で作業した」と話した。

全国草原サミットは草原の価値や存在意義をアピールし、維持のために連携することを目的に開催。5日は文化庁の「ふるさと文化財の森」に認定されている村内のかや場を見学する予定。

令和６年10月５日
信濃毎日新聞

「草原を次世代に」茅場見学

小谷村を会場に4日と5日、茅場や草原、放牧地など「草原」の保全活動に取り組む全国の自治体が集まり、現状や課題について共有する「第14回全国草原サミット・シンポジウムinおたり」が開かれた（本紙既報）。

村などでつくる実行委員会が主催。講演会や研究報告、茅場の現地見学会などを行い、希少な草原を次世代に残していくための議論を深めた。

4日にシンポジウム、5日に現地見学会と呼ぶミットを実施。見学会は文化庁の「ふるさと文化財の森」に認定されている「牧の入茅場」と「田中ショックの茅場」、茅屋根の県宝旧千國家住宅「牛方宿」を見て回った。牧の入茅場では職人に教えてもらいながら参加者が茅刈りに挑戦。筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所（上田市）の修士課程1年生・入江瑞生さん（24）は初めての茅刈りを体験し「面白かった。今度茅刈りに参加してみたい」と関心を高めていた。

シンポジウムでは基調講演で小谷村が誇る茅葺き師の松澤敬夫さん（82）と、日本茅葺き文化協会代表理事の安藤邦広さん・筑波大名誉教授が登壇。松澤さんの経験や今後の課題について話した。信州大学の井田秀行教授による茅場の研究報告もあり、1年火入れをするだけで茅の品質が落ちることや、動植物多様性の土壌になっていることを解説した。

シンポジウム後の分科会では小谷中学校の3年生が発表者として出席。茅文化を里山についてフィールドワークなどを通して学んだ成果として、茅場に生える山菜のワラビを収穫することや茅刈りやすくなるなどを発表した。

サミットは全国草原の里市町村連絡協議会に加入している市町村の首長が出席し、大会のサミット宣言を採択した。草原の価値や存在を全国にアピールするとともに、草原を未来につなげていくため連携を確認した。

牧の入茅場では参加者が茅刈りに挑戦した

茅葺き屋根の牛方宿を見学

茅葺き屋根の模型で刈り込み作業を体験

小谷中学校３年生が学びの成果を発表した

「山恵を探る」
実行委代表理事
廣氏
大氏

基調講演で話す茅葺き師の松澤敬夫さん

令和６年10月13日
大糸タイムス

草原サミット・シンポジウムinおたり参加者一覧

参加者数集計

シンポジウム	153
交流会	119
現地見学会	120
サミット参加	19

分科会数集計

第１分科会	48
第２分科会	35
第３分科会	27
第４分科会	28

現地見学会バス

Ａ１	21
Ａ２	22
Ｂ１	21
Ｂ２	20
Ｂ３（自家用車）	2
Ｃ１	19
Ｃ２	16

オンライン参加者

オンランイン参加者	44

都道府県別参加者数

北海道	2	静岡県	4
茨城県	2	滋賀県	1
栃木県	1	京都府	5
群馬県	3	兵庫県	3
埼玉県	1	島根県	3
東京都	18	岡山県	1
神奈川県	5	広島県	8
新潟県	2	熊本県	7
山梨県	4	大分県	28
長野県	64	宮崎県	2
岐阜県	2		

第 14 回　全国草原サミット・シンポジウム in おたり　報告書

2024年（令和６年）10月４日・10月５日開催

発行日：令和７年２月
発　行：第14回全国草原サミット・シンポジウム
in おたり大会実行委員会
事務局：小谷村教育委員会
連絡先：TEL 0261-82-2587

印刷：有限会社　北辰印刷

第14回　全国草原サミット・シンポジウム in おたり　報告書
～つなげよう　茅場が育んだ技術と命～

主催：第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり大会実行委員会

後援：環境省・農林水産省・文化庁・長野県・長野県教育委員会

※この事業は長野県地域発元気づくり支援金を活用しています。